

43020

教科書文庫

4
210
42-1939
20000 171960

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

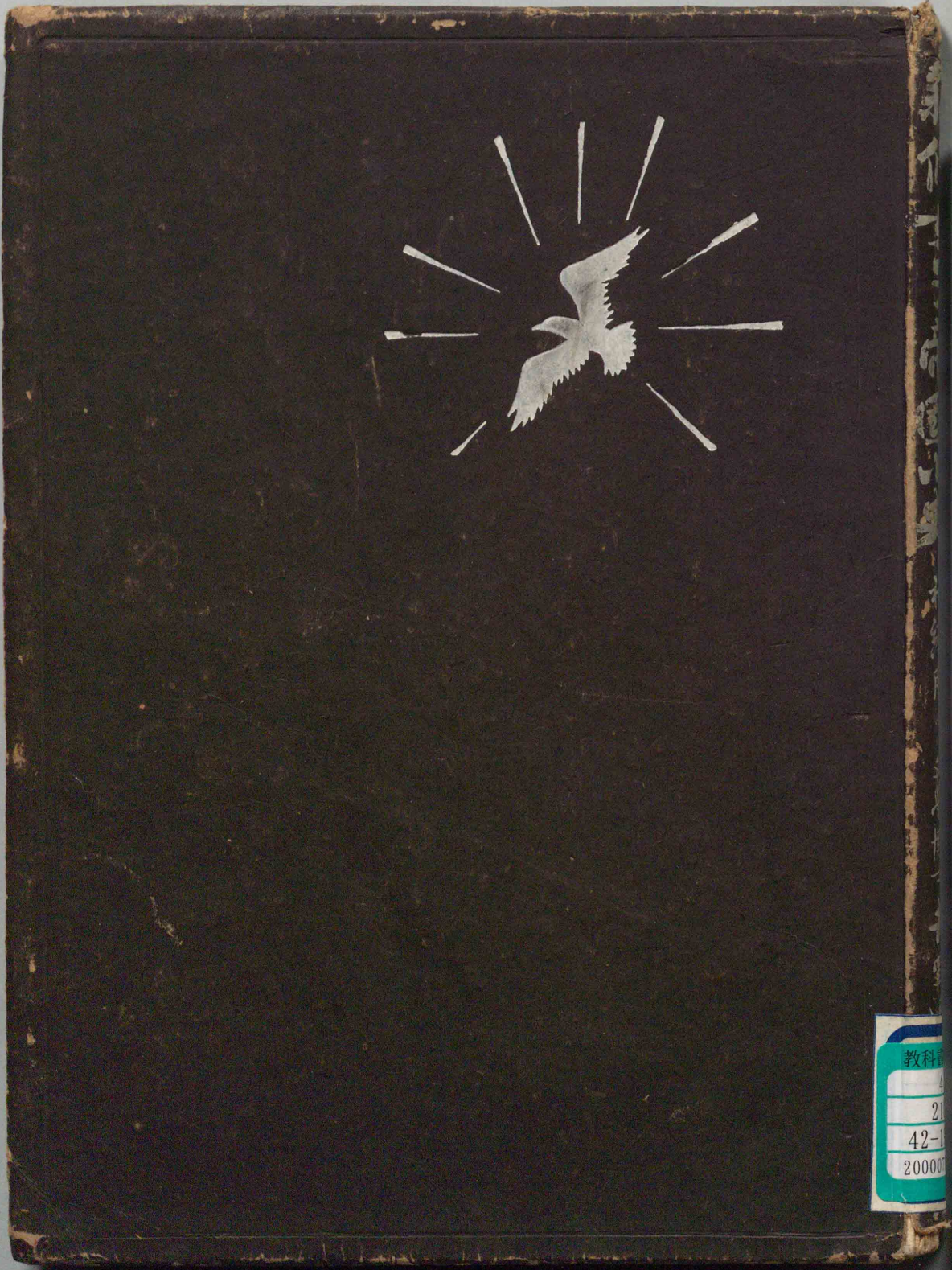
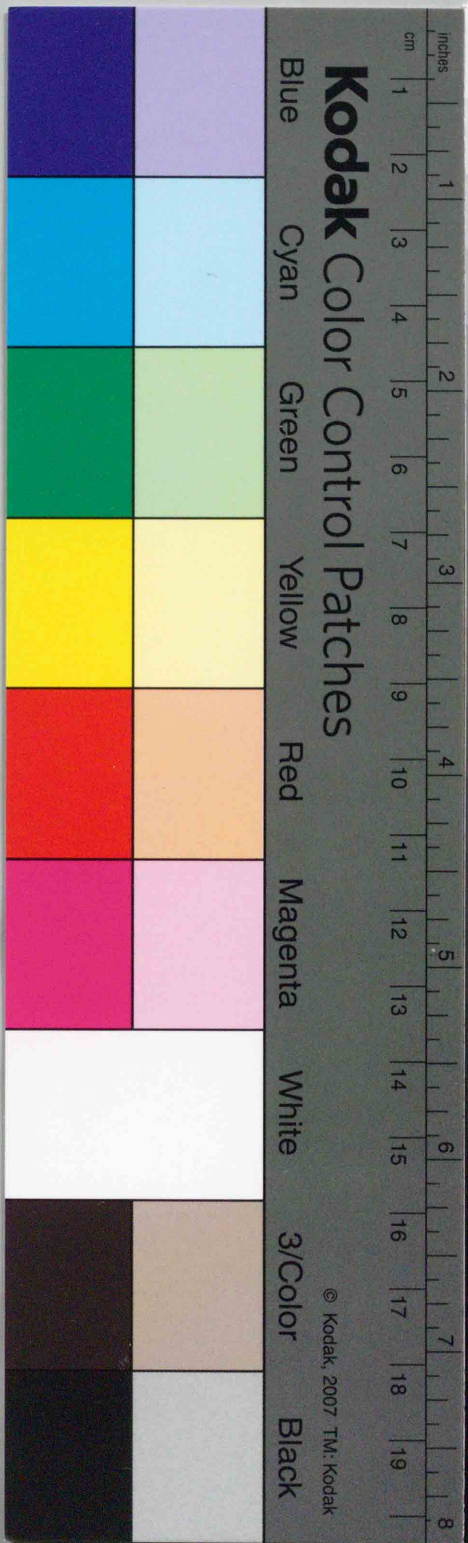


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書  
210  
42-1939  
20000





資料室

教科書文庫
4
210
42-1939
2000071960

46  
210  
AB.14



文部省檢定濟

昭和四十九年九月二十八日高等女子學校歷史科用

# 新修女子帝國小史

東京帝國大學史料編纂官  
文學博士 井野邊茂雄著

東京中文館藏版

広島大学図書

2000071960



新修女子帝國小史  
東京中文館藏版



## 例言

一本書は、昭和十二年三月改定中學校教授要目に準據し、女學校低學年用國史教科書として、編纂したものである。

一本書は、國史教育の精神に則り、世界に比類なき我が國體と、いつも希望と光明とに輝く、我が國民性とを闡明し、光輝ある國史の成跡を繹ねる事に就いて、細心の注意と、最大の努力とを拂つた。

一國史教育の要は、大局に通ずる事である。煩瑣の史實などに、拘泥すべきではない。故に本書に於ては、時代の動きと、これに伴ふ文化の發展とに重點を置き、叙述の簡明を期し



た。蓋し著者の志の存するところである。  
 一欄外の標出には、注意すべき事項の外、本文の説明を補足する意味で、特に註したところがある。實地授業に當られる方々は、その積りて御覽を願ひたい。  
 一本書に挿入した圖版は、東京帝國大學史料編纂所の厚意によるものが多い。特に謝意を表す。

昭和十二年九月

井野邊茂雄

目次

第一編 神代及上代

第一章	國體の淵源	一
第二章	國內の統一	五
第三章	皇威の發展	一〇
第四章	大陸文化の傳來	一八
第五章	政治の改革	三三

第二編 大化の改新と奈良時代

第一章	大化の改新	三七
第二章	律令の制度	四〇
第三章	奈良奠都	三
第四章	大陸文化の攝取	三



第三編 平安時代

第一章 平安奠都・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四  
 第二章 政治教學の刷新・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四  
 第三章 攝關政治の由來・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四  
 第四章 國風文化の發達・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四  
 第五章 世上の有様・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・五  
 第六章 院政・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・五  
 第七章 源平二氏の盛衰・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・六

第四編 鎌倉時代

第一章 幕府の成立・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・空  
 第二章 北條氏の暴逆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・空  
 第三章 武士の生活・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・七  
 第四章 國威の發揚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・七

第五編 建武中興と吉野時代

第五章 鎌倉時代の文化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・七五  
 第一章 建武中興・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・七  
 第二章 吉野の朝廷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・六

第六編 室町時代

第一章 内治外交・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・九  
 第二章 東山時代の文化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・九  
 第三章 戰國時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一〇〇  
 第四章 革新の機運・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一〇四

第七編 安土桃山時代

第一章 皇室を中心とする社會統一・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一〇七  
 第二章 海外發展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一一三



第三章 安土桃山時代の文化……………一六

第八編 江戸時代

第一章 江戸幕府の創立……………一三

第二章 鎖 國……………一六

第三章 江戸時代前期の世相と文化……………一三〇

第四章 江戸時代後期の世相と文化……………一三六

第五章 開 國……………一四〇

第六章 尊王思想の發達……………一四七

第七章 大政奉還……………一五〇

第九編 明治維新と明治時代

第一章 維新の國是……………一五五

第二章 社會の一新……………一五八

第三章 立憲政治……………一六七

第四章 條約改正……………一七二

第五章 東洋平和の實現……………一七三

第六章 文教の發達……………一八二

第七章 明治天皇・大正天皇……………一八五

第十編 大正昭和時代

第一章 躍進の日本……………一八九

第二章 列國との關係……………一九二

第三章 わが國の現状……………一九七

………終………



# 新修女子帝國小史 初級用

## 第一編 神代及上代

### 第一章 國體の淵源

國のはじめ 神代の昔、伊弉諾尊、伊弉冉尊と申す二柱の神が、はじめて大八洲國を御開きになつた。大八洲國とは、今の淡路、四國、隱岐、九州、壹岐、對馬、佐渡、本州などの總稱である。この頃、まだ、日本といふ國名はない。それが定まつたのは、支那、朝鮮と交はるやうになつてからである。

皇室の御先祖 伊弉諾尊、伊弉冉尊の御子、天照大神は、高天原を治められたが、御徳が高く、すべてのものを、御慈みあそばされ、

伊弉諾尊  
伊弉冉尊  
大八洲國

日本國

天照大神  
高天原



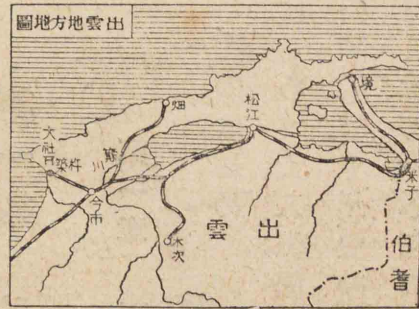
日本人の故郷

素戔嗚尊

大國主命

また農業をはじめ、蠶をかひ、機を織ることをも教へたまひ、わが國の基を御定めになつた。この天照大神こそ、皇室の御先祖にましますのである。高天原は、日本人の故郷であるけれども、今のどこであるか、はつきり分つてゐない。

**素戔嗚尊と大國主命** 天照大神の御弟素戔嗚尊は、勇ましい御氣性であるから、自然荒々しい御ふるまひも多く、遂に大神の御怒にふれて、高天原を追はれたまひ、出雲島根縣の地方に御降りになつた。尊は、八岐の大蛇を退治して、人々の難儀を救はれ、またその御子大國主命も、病をなほし、藥のつくりかたを教へるなど、人々を慈まれたので、次第に御勢が強く、御支配の國々が廣くなつた。

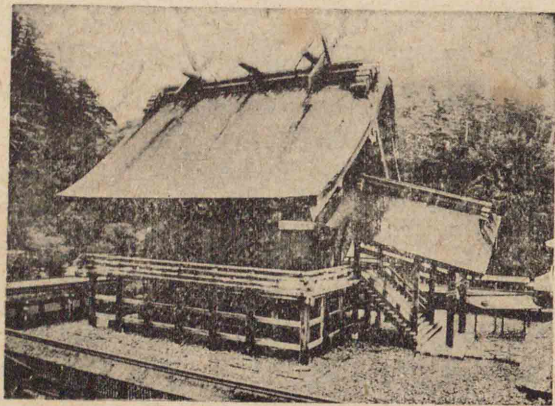


國體の淵源

杵築宮

出雲大社

八咫鏡  
天叢雲劍  
八坂瓊曲玉



出雲大社

**わが國體(其一)** しかし、わが國は、伊弉諾尊、伊弉冉尊が御開きになり、天照大神が、基を御定めになつたのであるから、この國に君たるべき御方も、大神の御子孫でなければならぬ。大神は、そのわけを、大國主命に、御さとしになつたところ、命は、よくこれをわきまへ、御支配の國々を、大神に御返し申して、杵築宮に御隠居になつた。後に、この宮に、命を御祭りしたので、今の出雲大社島根縣簸川郡大社町である。

**わが國體(其二)** 大國主命が、御支配の國々を御返し申したので、天照大神は、御孫瓊瓊杵尊に、この國を治めさせようと思召され、八咫鏡、天叢雲劍、八坂瓊曲玉を御



天壤無窮の神勅

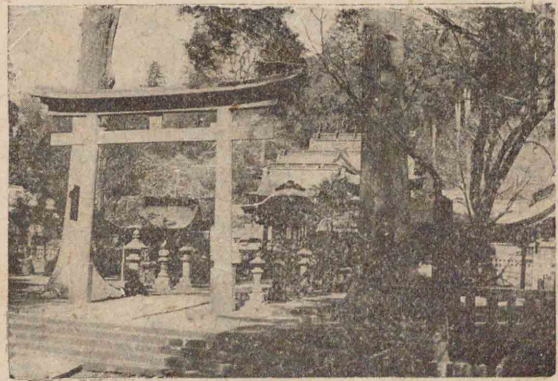
豐葦原の瑞穗國

萬世一系の皇統  
限りなき國の榮え

御位の御し

授けになり、豐葦原の瑞穗國は、わが子孫の王たるべき地である。汝皇孫行いてこれを治めたまへ。實祚の隆えまさんことは、天壤とともに窮がないであらうと仰せられた。豐葦原の瑞穗國は、わが國の別名である。これから、わが國體が、はつきりと定まり、上に萬世一系の皇統をいただいて、限りなく榮えて行く基が開かれた。

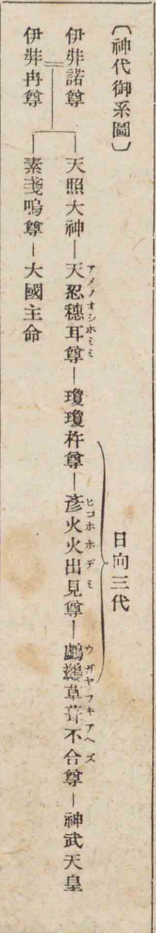
三種の神器 天照大神が、瓊瓊杵尊に御授けになつた八咫鏡、天叢雲劍、八坂瓊曲玉は、三種の神器と申し、これから後、御代々の天皇が、御位の御しとして、永く御傳へになることになつた。尊い御實である。



(村山製東郡良婚縣島兒鹿)宮神島霧たしり祭御を尊杵瓊

女帝小初

天孫降臨 瓊瓊杵尊は、天照大神の神勅により、三種の神器を奉じ、多くの神々を従へて、高天原から、日向宮崎鹿兒島兩縣地方へ御降りになつた。その後、三代の間、この地方に都せられてゐる。伊弉諾尊、伊弉冉尊から、この頃までを、世に神代といふ。



## 第二章 國內の統一

神武天皇の御東征 瓊瓊杵尊から三代の間、日向の地方に都せられてゐたので、遠い國々は、皇室の御恩を受けない爲め、みだれたところが多い。尊の御曾孫神武天皇は、これを御心配あそばされ、大八洲國をおだやかに治めたいとの御考から、兵を率ゐ

御東征の理由  
平和なる社會の建設



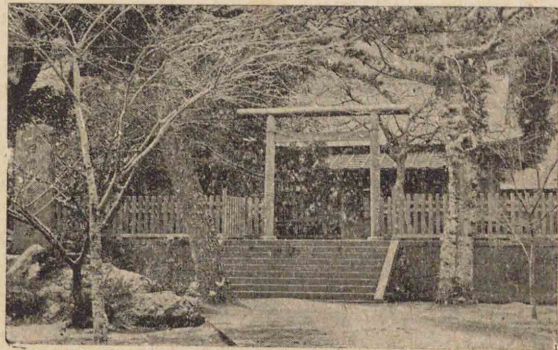




には、國造、縣主をおかれた。これから國の基は、ますます固くなつて、千代萬代までも、動くことがない。

**敬神崇祖** わが國では、昔から神を敬

ふ心が厚い。先祖を大切にしているからである。天照大神も、神武天皇も、御みづから、御先祖の神々を御祭りになつた。また國民が、先祖の神を祭つたのを、氏神といふ。先祖を大切にしている國民は、先祖の恩に報い、家の名をも、けがすまいと心がけて、世の爲めに、國の爲めに盡くした。君に忠に、國を愛する心も、つまりは、神を



(社神房安るれ祭を神祖が命富天) 社の神氏

敬ひ、神を祭る心と一つである。まことに、わが國の美風であり、一致團結して、國力を進めて來たのも、これによるところが多い。

**世界無比の國體** 神を敬ひ、先祖を大切にしている國民は、同じ心を以て、皇室に仕へた。わが國民は、概ね神々の子孫であり、また

は、神武天皇このかた、皇室から分れたのであるから、皇室を中心とする、大きな家族のやうなものである。故に君臣の間には、親子と同じ情愛が結ばれてゐる。然るに外國の君主は、多く、國民から選ばれたものであるから、國の成立が違へば、君臣の關係も、まるで違ふ。世界に國は多いけれども、かやうな國の姿を、昔のままに傳へ、萬世一系の皇統をいただいてゐるのは、わが國ばかりである。かくも、めでたい、尊い國に生れた私どもは、忠義の眞心を君にささげて、ますますこの國の榮えるやうに、心がけなければならぬ。

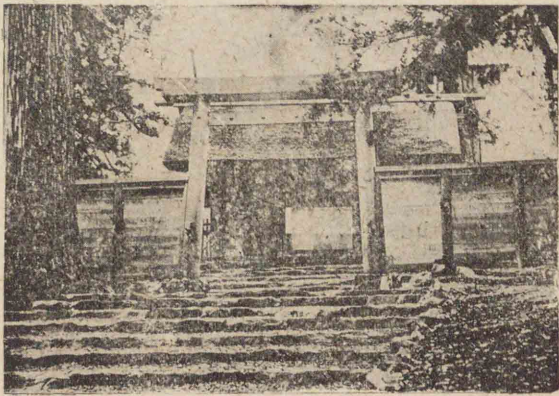
わが國は神のするなり神祭る昔の手ぶり忘るなよゆめ  
とこしへに國守ります天地の神の祭をおろそかにすな

明治天皇  
明治天皇



第三章 皇威の發展

皇大神宮 崇神天皇第十代



皇大神宮

は、神を敬ひたまふ御心が深く、御先祖をも、大切になされた。これまで三種の神器は、宮中で御祭りになつてゐる。中にも八咫鏡は、天照大神が、瓊瓊杵尊に御授けになつたをり、「この鏡を見ること、われを見るがごとくにせよ」と仰せられた大神の御靈代であるから、天皇は、御側近くおき奉ることを恐多く思召され、天叢雲劍とともに、大和の笠縫邑に遷し

御靈代

神鏡神劍の遷座と模造  
凡二千二百餘年前

再遷座  
凡千九百三十餘年前

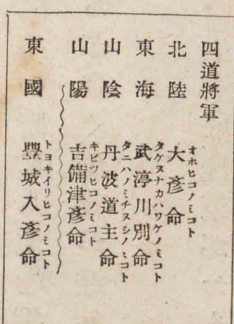
御つくりになつて、宮中におき奉り、永く皇位の御しるしとせられた。ついで御子垂仁天皇（紀元六五六年）の時、また伊勢の五十鈴川のほとりに遷しまゐらせたのが皇大神宮（三重縣宇治市）である。

とこしへに民やすかれといのるなるわがよを  
まもれ伊勢のおほかみ  
明治天皇

皇威の伸張 崇神天皇

皇は、遠い國々まで、おだやかに治めたいとの思召から、皇族を、東海、北陸、山陰、山陽に御遣はしになつた。世に四道將軍といふ。ついで、また、東國にも御遣はしになつた。いづれも、永くその地方に留まり、御子孫に至るまで、

四道將軍  
凡二千二十年





活生の代上



胃 (埴輪)



甲 (埴輪)



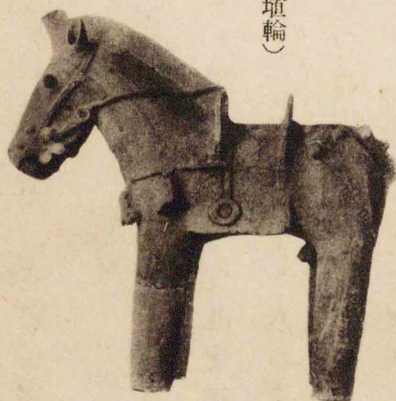
曲玉



切子玉



管玉



馬具 (埴輪)

玉類

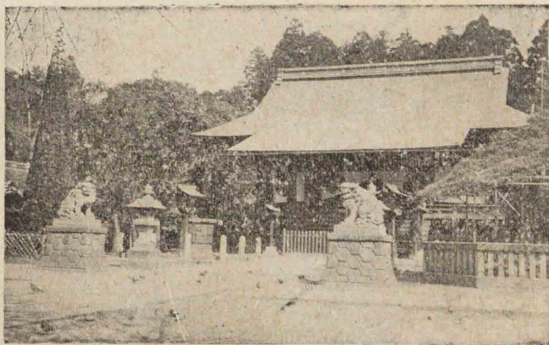
衣服

食料

税の取立  
弭調  
手末調

農業の進歩

交通の進歩



(市宮都宇) 社神山荒二たしり祭御を命彦入城豊

土地をひらき、民をあはれられたので、皇室の御威光が、次第に遠  
いところへも、及ぶやうになつた。

民政 天皇は、諸國に命じ、船をつくら  
しめて、交通の便を開かれ、多くの池を掘  
らしめて、農業の助とせられ、また人口を  
調べて、男からは、狩の獲物、女からは、織物  
などを御取立になつた。弭調、手末調と  
いふ。つぎの垂仁天皇の時にも、池を掘  
らしめられたところが多く、農業が進み、  
人民が豊になつた。

日常生活 上代の生活は、農業がおも  
で、米、麥、粟、野菜などがつくられ、また狩や、漁業も盛んである。衣  
服は、多く布でつくり、男も、女も、上には筒袖で、丈の短い衣をつけ、



裝飾品

家屋

墓

埴輪

男子の服装



女子の服装



熊襲と蝦夷

かやうに、世の中が、次第に進んで來た時、しばし

(輪埴) 帯はのるゝに腰、ちひてけつな玉に飾株にもと女男

下には、男は、ツボン形の、大くゆつたりした禪をはき、女は、スカート形の裳をつけた。襦は左てあはせ、飾には、曲玉、管玉、切子玉がある。家は、丸木の掘立柱であつたが、後には、二階建も、つくられるやうになつた。また墓を大切に、して、そのまはりに、土でつくつた人馬、鳥など、さまざまの形のものをたてた。これを埴輪といひ、今でも、古い墓からは、掘り出すことがある。



平和の擾亂者としての蝦夷と熊襲

景行天皇の御征伐  
凡千八百五十餘年前

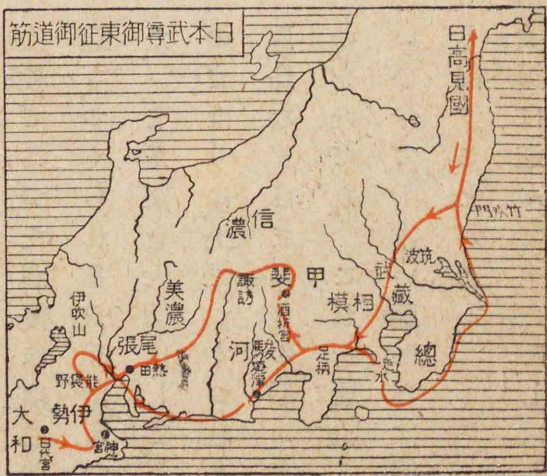
日本武尊の御征伐  
凡千八百四十餘年前

日本武尊の御征伐  
凡千八百二十餘年前

ば、平和をみだしたものが九州の南部に住む熊襲と、本州の、東北地方に住む蝦夷とであつた。いづれも、強い、亂暴な種族である。

熊襲征伐 景行天皇<sup>第二十</sup>の時、  
(紀元七四二年)  
熊襲が叛いた。天皇は、御みづから御征伐になつたが、まもなく、また叛いたので、皇子日本武尊を御遣はしになつた。武勇才智の勝れた尊は、女の姿をして、その酋長川上梟帥に近づき、御手づから刺殺された。御年は、わづかに、十六歳である。

〔皇孫御系圖〕(二)  
垂仁天皇—景行天皇—日本武尊—仲哀天皇—成務天皇

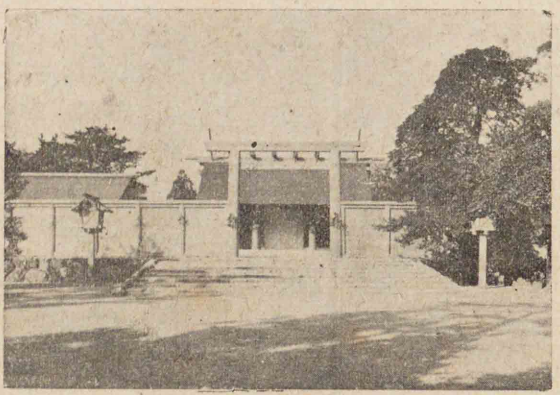


蝦夷征伐 その後、蝦夷が叛いた  
(紀元七七〇年)

野火の難

草薙劔

熱田神宮  
弟橘媛の貞烈



熱田神宮

た。蝦夷は、今のアイヌと同じ種族である。この時にも、天皇は、日本武尊を御遣はしになつた。尊は、まづ、皇大神宮に御參詣になり、天叢雲劔を奉じて、駿河まで下られた時、賊の爲めに、野火の難に御逢ひになつたが、神劔を抜いて、草を薙ぎ拂ひ、その賊を平げられた。これから、神劔を、草薙劔と申上げることになつた。まもなく、奥羽地方まで御下りになり、悉く蝦夷を平げられたが、御歸京の途中、御病がおこり、伊勢で、御かくれになつた。神劔は、尾張に残しておかれたのを、後に御祭りしたのが、今の熱田神宮<sup>名古屋市中熱田町</sup>である。

日本武尊が相模の走水から上總に向はれた時、海が荒れて御船も沈むばかりで



國力の進み

高麗百濟新羅の分立

任那の保護  
凡千九百六十  
餘年前  
仲哀天皇の  
熊襲御征伐  
凡千七百四十  
餘年前

ある。この時御供してゐた御妃弟橘媛は尊の御命に代らうと、さかまく浪間に御身を沈められたところ不思議にも風が静まり、尊は御無事に上総に御着きになつたといふ。日本の女性性は昔から、しとやかな内に、御國の爲めに、夫の爲めに、いつでも命を捨てる勇氣があつた。



弟橘媛の御入水

海外發展 西に、東に、御征伐になる

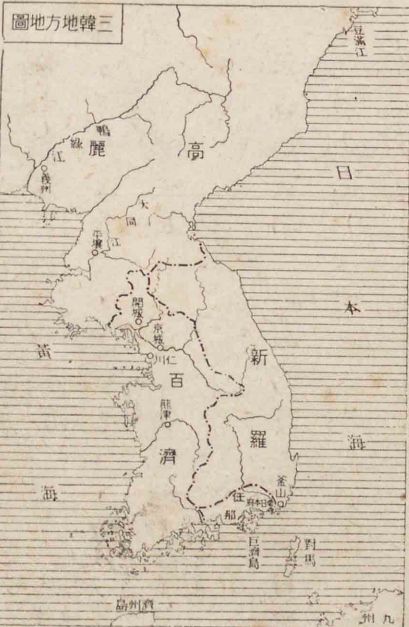
ほどであるから、わが國力は、ますます盛んになり、遂に海外にまで伸びるやうになつた。

三韓の内附 今の朝鮮は、この頃、高麗、百濟、新羅の三國に分れ、わが國では、

三韓と呼んでゐる。また百濟と新羅との間に、任那といふ小國もあるが、新羅に苦しめられ、崇神天皇の時、救をわが國に求めた。天皇は、これを許して、わが國の保護國とせられた。その後、仲哀天皇<sup>第四十代</sup>の時、熊襲が、新羅と通じて叛いた。天皇は、御みづから<sup>(紀元八五三年)</sup>

神功皇后の  
新羅御征伐  
凡千七百三十  
餘年前  
平和の爲め  
の出兵  
日本府

熊襲を御征伐になり、ついで、神功皇后<sup>(紀元八六〇年)</sup>の仲哀天皇<sup>第五十代</sup>もまた、御みづから新羅を御征伐になつた。熊襲を助けて、平和をみだすからである。新羅王は、恐れて、すぐに降参した。その後、高麗、百濟も服従したので、わが國は、任那に日本府をおいて、三韓地方を治めた。これから熊襲も、叛かないやうになつた。



神功皇后 神功皇后は、應神天皇<sup>第五十代</sup>の御母

である。天皇が、まだ御幼少のころ、攝政として、永い間、政を行はれた。新羅御征伐といひ、攝政といひ、男も及ばないほど、立派な御功績を残されてゐる。日本の婦人にも、これだけの偉い御方

攝政



三韓に傳はれる支那の文化

のましますことは、われらの誇である。

### 第四章 大陸文化の傳來

大陸文化の傳來 支那は、世界で、早く開けた國の一つである。また、そのすぐれた文化は、三韓にも傳はり、それが、三韓の服従した後、わが國にも、傳はるやうになつた。

學問の傳來 應神天皇の時、百濟

から、阿直岐王仁が歸化して、漢學を

(紀元九四四年)(紀元九四五年)

傳へ、後には、天文、地理などの學問も

傳はつた。文字を覺えて、使ひはじめたのも、これからである。

工藝の傳來 同じ頃、百濟にゐた支那の人弓月君は、養蠶、織物

の業を傳へ、阿知使主は、支那から、織物、裁縫の工女をつれて來た。



支那から來た工女の姿

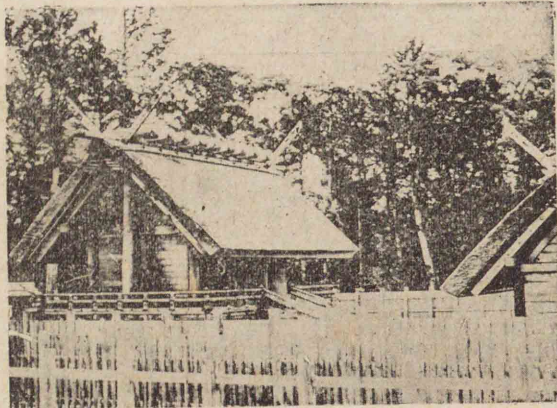
漢學 凡六百五十年  
天文學  
地理學  
文字使用の始  
養蠶  
織物  
裁縫

土木  
建築  
造船  
鍛冶  
産業の發達

豊受大神宮 凡四百六十年

内宮  
外宮

百濟より傳來 凡千三百八十餘年前



豊受大神宮

その後、土木、建築、造船、鍛冶をはじめ、支那、三韓の技術の傳はつたものが多し。されば雄略天皇第二十の時には、工藝が進み、産業

がおこり、絹織物が盛んになつた。

豊受大神宮 天皇は、また、神代の

昔、天照大神を御助け申して、農事に

盡くされた豊受大神を、伊勢の山田

宇治山田に御祭りになつた。今の豊

受大神宮である。後に、皇大神宮を

内宮、豊受大神宮を外宮と申上げる

ことになつた。

佛教の傳來 佛教は、印度におこ

つた宗教で、支那、三韓にも弘まつてゐる。それが、欽明天皇第十九

代の十三年に、百濟から、わが國にも傳はつた。漢學の傳はつて

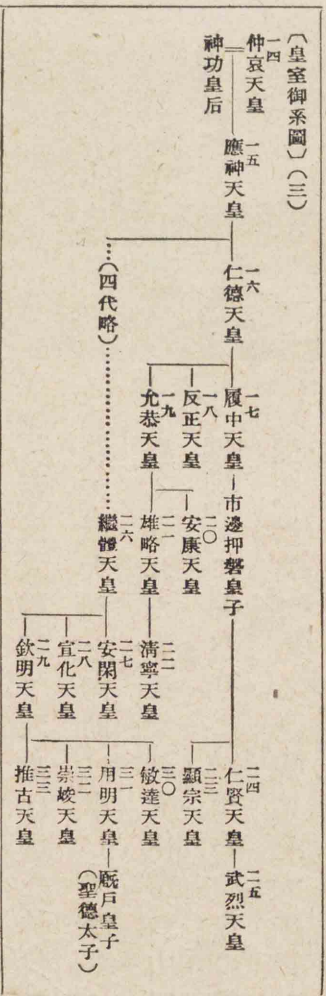
(紀元一二二年)



皇室の御信  
仰とその御  
保護  
聖徳太子の  
攝政

から、約二百五十年の後である。

佛教の流通 佛教が傳はつた後、次第に、これを信するものがあり、寺もつくられたが、その盛んになつたのは、推古天皇<sup>第三十</sup>の時である。天皇は、皇太子厩戸皇子とともに、深く御信仰になつた。厩戸皇子は、攝政として、天皇を輔けてゐられたが、世上で、



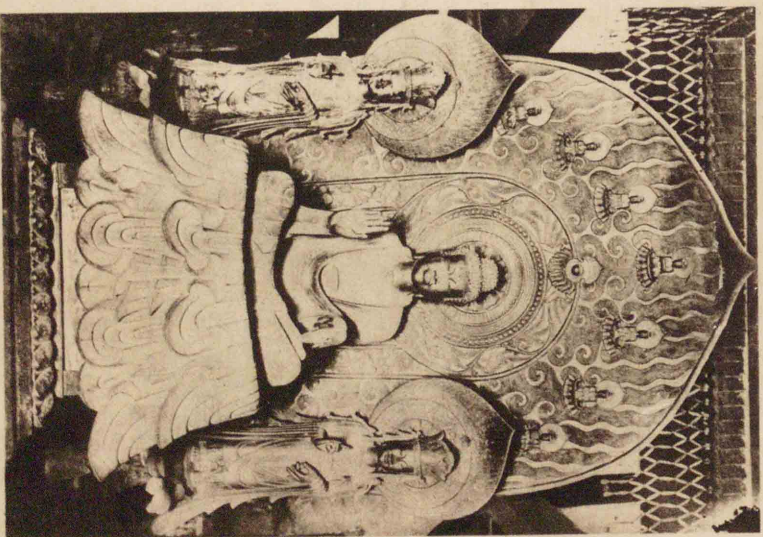
法隆寺  
四天王寺  
凡十三百四十  
餘年前

聖徳太子と申上げたほど、すぐれた御方である。人々を集めて御みづから、その教を説かれ、また奈良の法隆寺<sup>生駒郡</sup>、攝津の<sup>紀元二六七年</sup>、<sup>紀元</sup>

本尊釋迦如來は、聖徳太子御生前の御模範によつて、太子薨去の後、太子の御一族が、太子と太子の御位並に如の御冥福を祈るが爲めに、名工鳥佛師に命じて作りしめられたのである。また壁畫は金堂の内部四方の壁に畫いてあるが、こゝには其一部を示した。



法隆寺金堂壁畫



法隆寺金堂本尊(釋迦及兩侍像)

上代の美術



建築  
彫刻  
繪畫

美術の標本  
法隆寺の  
金堂壁畫  
佛像

聖徳太子の  
博學

國史の編纂  
曆の使用

天王寺（大阪市）をも御建てになつた。これから、佛教は、皇室の御保護を受けて榮え、世の中にも弘まつた。

藝術の發達 佛教の弘まるにつれて、寺、佛像のつくられるものが多く、これが爲めに、建築、彫刻、繪畫なども進んだ。中にも法隆寺の金堂、その内部の壁に畫いた佛畫、及び名工鳥佛師のつくつた佛像は、この時代の美術の標本といはれる。

學問の發達 學問も、この頃から開けた。ことに聖徳太子は、佛教の外、漢學にも、天文、地理の學にも通じたまひ、また大臣蘇我馬子とともに、國史を撰ばれ、はじめて、曆をも用ゐられた。國史は、早く



(堂金が右の塔重五) 景全寺隆法



隋との交通

對等の交際  
凡千三百三十  
除年前

支那文化の  
傳來

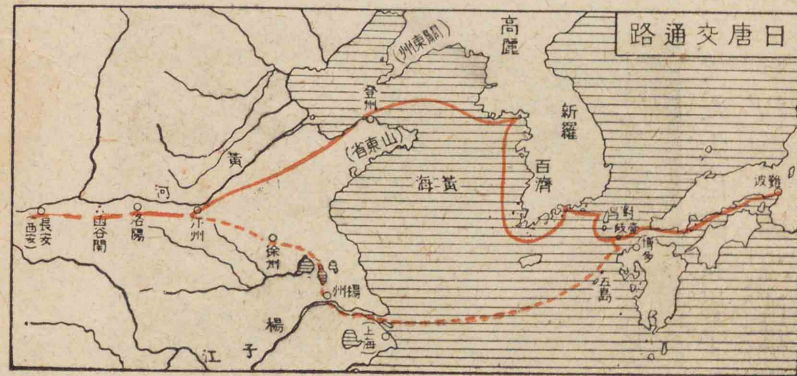
唐との交通  
凡千三百二十  
年前

遣唐使

留學生

失せて傳はつてゐない。

支那との交通 支那はこの頃隋の時  
時で、國力が盛んであり、外の國々を屬  
國扱にしてゐる。然るに聖德太子は、  
少しも恐れたまふことなく、使を遣つ  
て、對等のつきあひをなされた。(紀元一三六七年)これ  
から兩國の交が開け、支那の文化は、三  
韓を経ずに、直接わが國に傳はるやう  
になつた。まもなく隋が滅び、唐がお  
こつてからも、朝廷では、交を結び、使を  
も御遣はしになつてゐる。これを遣  
唐使といふ。遣唐使には、必ず留學生  
が隨行し、歸國の後、その學問を傳へた



固有の精神  
文化

物質文化の  
傳來

日本文化の  
特長

國際關係に  
よる國力充  
實の必要  
社會上の弊  
害身分と職  
業との一致

から、世の中が、ますます、開けた。

上代の文化 上代には、神代このかた、うけついで文化がある。  
神を敬ひ、君に忠に、國を愛する眞心が、その中心を爲してゐる。  
たゞ學問、藝術などは、支那、三韓が、すぐれてゐたから、これを學ん  
だ。外國の文化が傳はつてから、わが國の開けたことは、一とほ  
りでない。しかし、いつまでも、日本人としての、大切な心がけを  
失はないところに、その長所がある。

### 第五章 政治の改革

改革の必要 外國との交が開けてからは、國の力が十分に備  
はつてゐなければならぬ。然るに、わが國では、家々によつて、  
身分と職業とが定まり、土地をも賜はつてゐる。その家柄でな  
ければ、いくら偉い人でも、取立てることが出來ない。また身分



豪族の勢

蘇我氏と物部氏の争

物部氏の滅亡

十二階の冠位

十七箇條の憲法  
凡千三百三十餘年前

國體明徴

の 高いものほど、廣い領地があるので、おのづから、豪族の勢が強い。中にも朝廷の政にあづかる大臣蘇我馬子と、大連物部守屋とが、最も盛んである。これが爲めに、勢力の争がおこり、馬子は、



(子王は右左)子太德聖

遂に、守屋を攻滅ぼして、わがまゝをするやうになつた。

聖德太子の御事業

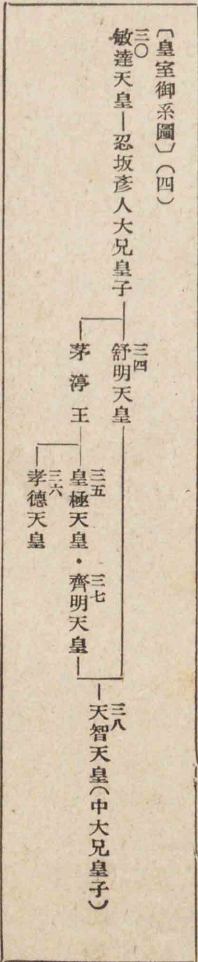
聖德太子は、これを憂へたまひ、十二階の冠位を定めて、身分にかゝはら

ず、人材を用ゐる途を開かれ、また十七箇條の憲法をも定め、政治と道德との心得を御さとしになり、とりわけ、豪族がわがまゝをすることを戒め、君臣の大義を明かにせられた。しかし、まだ御

位に御即きにならない内に、御かくれになり、御事業も中止になつた。

蘇我氏の専横

蘇我氏の滅亡 聖德太子が、御かくれになつてから、蘇我馬子のわがまゝが、甚しくなつた。馬子の子蝦夷も、また、大臣となり、その子入鹿とともに、その勢が強くと、遂に、國體をみだすやうにな



中大兄皇子  
中臣鎌足  
蘇我入鹿の  
誅伏  
凡千二百九十  
餘年前  
蘇我蝦夷の  
自刃

つた。皇極天皇第五代の時、皇子中大兄皇子は、これを見て、中臣鎌足とはかり、入鹿を宮中で誅せられた。蝦夷も、罪を恐れて自殺したから、蘇我氏は、こゝに滅び、豪族の勢がくじけた。鎌足は、藤原氏の先祖である。



聖徳太子御  
事業の未完  
新羅の勃興  
亡 日本府の滅  
凡千三百七十  
餘年前  
中大兄皇子  
と中臣鎌足  
年號の始  
凡千二百九十  
餘年前

## 第二編 大化の改新と奈良時代

### 第一章 大化の改新

改新の必要 豪族の勢が盛んになつてから、皇室の御威光は衰へ、人民は苦しむやうになつた。聖徳太子の御事業も、これを改められる爲めであつたが、まだ十分でない。またこの頃、新羅が強くなつて、わが國から離れ、早く任那の日本府をも滅ぼし、三韓地方がみだれてゐるから、これに備へる必要もある。そこで中大兄皇子は、太子の御志をつぎ、まづ蘇我氏を滅ぼしたまひ、ついで孝徳天皇第三十代の時、皇太子となり、中臣鎌足とともに、天皇を輔けて、大改革を行はれた。世に大化の改新といふ。

### 改新の大要

この時、はじめて年號を定めて大化といひ、ついで



土地人民の  
收公  
戸籍  
租庸調  
班田收授  
地方官制  
國司郡司

口分田

中央官制

八省百官

大化改新の  
精神

て、豪族の支配する土地と、人民とを朝廷に收め、戸籍をつくり、租庸調の制を定め、班田收授の法を設け、國造、縣主を廢して、國司、郡司をおいた。男女ともに、六歳になれば、一定の土地を班ち授け、死んだ時には、朝廷に收める。



中臣(原)藤原足

これを班田收授といひ、その田を口分田といふ。口分田の取入の中から、一部を朝廷に納めるのを租といひ、夫役のかはりに、米、布などを納めるのを庸といひ、土地の産物を納めるのを調といふ。また、大臣、大連をも廢して、八省、八官をおいた。これから、人材は、登庸せられ、全國の土地、人民は、直接朝廷の御支配を受けるやうになつた。

國體明徴 太子は、この改革の前、天皇を奉じて、御先祖の神々、

天智天皇の  
御即位

百濟の滅亡  
凡千二百七十  
年程前

天智天皇の  
御英斷

を御祭りになり、群臣とともに、君臣の分を守るべきことを御誓ひになつた。この思召により、豪族を抑へて、國體を明かにし、制度をととのへて、國を強くせられたのが、大化の改新である。

三韓の放棄 太子は、次の齊明天皇<sup>第三</sup>

<sup>十七</sup>代をも御輔けになつたが、天皇御かく

れの後、はじめて、御位に御即きになつた。

天智天皇<sup>第三十</sup>代と申上げる。まもなく

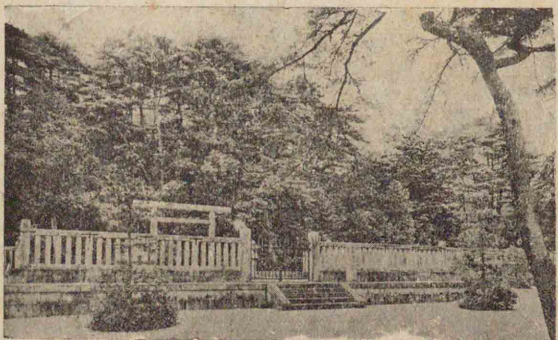
新羅は、唐と連合して、百濟を滅ぼした。

(紀元一三三三年)

この時、わが軍隊は、半島に滞在してゐる。

しかし、天皇は、唐と戦ふよりも、その文化

を取入れるのが、大切だと思召され、御英斷を以て、軍隊を御引上げになつた。三韓の地方は、神功皇后このかた、四百五十餘年の



天智天皇御陵



後遂にわが國から離れたのである。

## 第二章 律令の制度

令の制定  
凡千二百七十  
年程前  
律の制定  
凡千二百三十  
餘年前  
令の修正

律令の制度 天智天皇は、大化改新の御事業をと、のへる爲めに、はじめて、令（紀元一三二八年）を撰（撰）ばれた。令は政治上必要な制度を定めたものである。ついで、文武天皇（紀元一三六一年）の（大寶元年）律が撰（撰）ばれ、また、令をも修正せられた。律は、刑罰のことを定めたものである。世に大寶律令といふ。

中央官制  
神祇官  
太政官  
入省

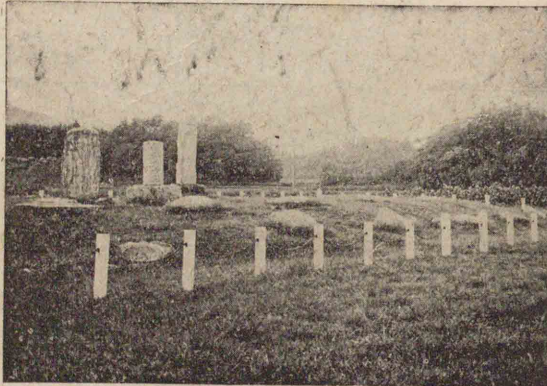
律令の大要 中央には、神祇官、太政官がある。神祇官は、わが國敬神の風により、諸官省の上にあつて、神を祭ることをつかさどり、太政官では、政を統べた。また太政官に、太政大臣、左大臣、右大臣をおき、その下に、中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮内の八省がある。諸國には、國司、郡司があり、九州には、別に、太宰府（福岡縣）

學制  
大學  
國學  
兵制  
衛府  
軍團  
五刑  
固本法と日  
尊本精神との

城町大字 觀音寺 をおいた。學制には、京都の大學、諸國の國學があり、兵制には、徵兵の制を定めて、京都の衛府、諸國の軍團がある。律には、笞（チ）、杖（ウエ）、徒（ト）、流（リウ）、死の五刑がある。律も令も、支那の制度を取入れてあるけれども、わが國體と昔からの、ならはしとが、もとになつてゐる。これから、わが國の制度がと、のひ、國の力が備はるやうになつた。

## 第三章 奈良奠都

奠都の必要 これまでは、御代のかはるごとに、都を遷されてゐる。しかし國の方が進み、都下の人口も増してからは、それが出来なくなつた。また外國との交も



太宰府の遺址

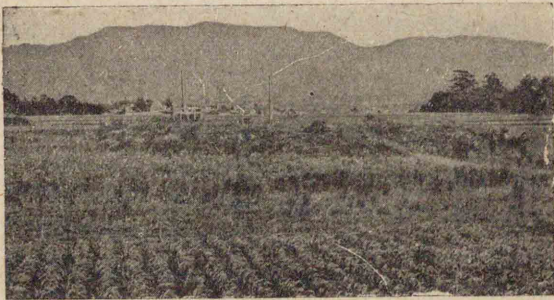


凡千二百二十  
餘年前

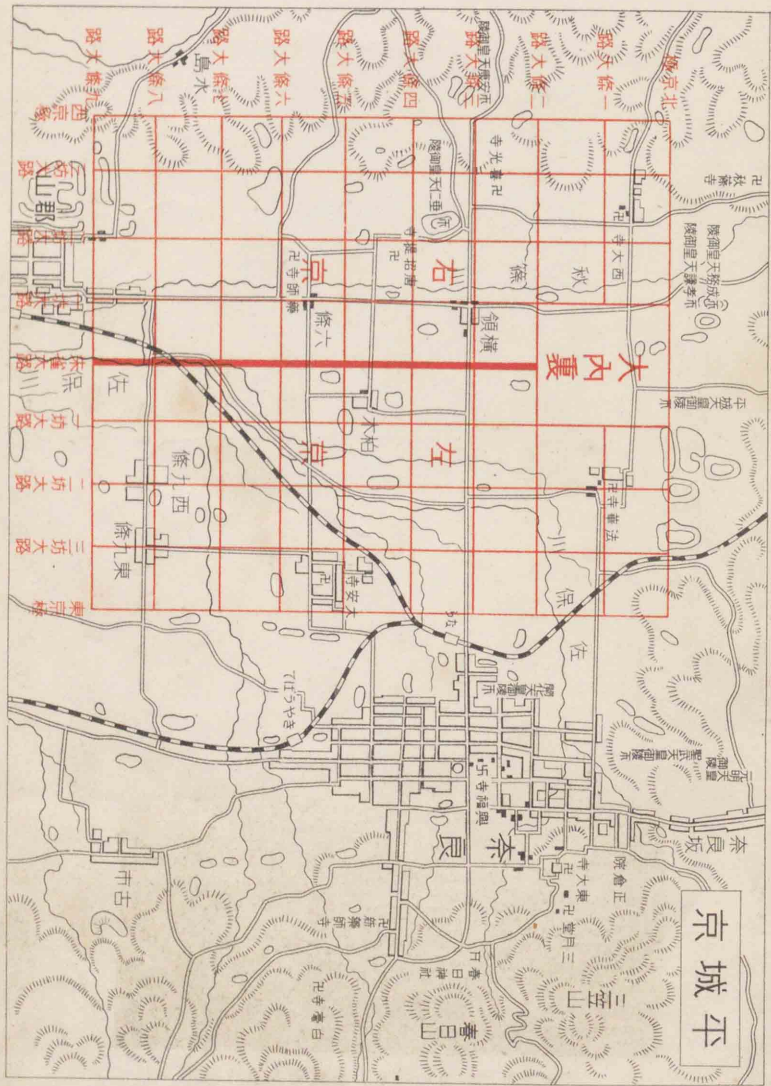
開けたので、體裁をも考へなければならぬ。これが爲めに、き  
まつた場所に、立派な都をつくることが必要になつた。  
平城京 元明天皇第三十四の和銅三年(紀元一二七〇年)に、  
かやうな必要から、都を大和の奈良市奈良に  
御奠めになつた。都は、左京右京の二つに  
分れ、碁盤の目のやうに、正しい道路が、縦横  
に通じ、四方には、築地をめぐらしてある。  
これを平城京といひ、その後、七代七十餘年  
の都であつた。この間を、世に奈良時代と  
いふ。

#### 第四章 大陸文化の攝取

支那文化の傳來 天智天皇の御英斷により、三韓を放棄せら



(所るゐてつ立の碑石) 址敷極大京城平





聖武天皇の御信仰

國分寺 東大寺 大佛 行基良辨と 公益

れてから後、わが國は、よく治まり、律令の制度がととのひ、立派な都が出来たばかりでなく、大陸の文化が、ますます傳はるやうになつた。佛教が榮え、文學がおこり、藝術の進んだのも、この頃である。



佛大の良奈

ある。

佛教 奈良の都にも、多くの寺

が建てられた。中にも聖武天皇

第五代十は、御信仰が厚く、世の中の

太平と、國民の幸福とを、御祈りに

なる爲めに、國ごとに、僧と尼との

大和の國分寺が東大寺で、名高い

大佛がある。また行基、良辨などの名僧があり、布教のかたはら

道をつくり、土地をひらくなど、公益をはかつたことも多い。

社會事業

天皇の皇后は、御容顔がうるはしく、光りかゞやく



光明皇后

施薬院  
悲田院

社會事業

漢文學

和歌

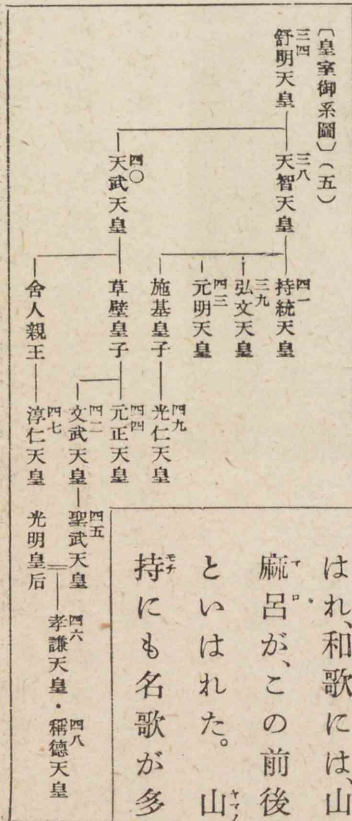
萬葉集

歌集の始

やうで、いらせられたから、世上で、光明皇后と申上げた。國分寺の建てられたのも、皇后の御力添えがあつたからである。また御慈みの御心も深く、貧しい人々の爲めに、施薬院と悲田院とを設けられた。かやうに、皇室が、まづ模範を御示しになつたので、貴族、僧侶などにも、これにならふものが多く、社會事業も次第に盛んになつた。

文學 漢文學には、吉備眞備が名高く、その頃、第一の學者とい

はれ、和歌には、山部赤人、柿本人麻呂が、この前後に出て、歌仙といはれた。山上憶良、大伴家持にも名歌が多い。家持は、また萬葉集を撰んだ。歌



萬葉假名

集のはじめである。この頃、また、漢字の音と訓とを借りて、國語を寫すやうになつた。世に萬葉假名といふ。これが平假名片假名のもとである。

萬葉集の歌の例

田子の浦ゆ打出で、見れば眞白くぞ富士の高嶺に雪はふりける 山部赤人  
久かたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも 柿本人麻呂

萬葉假名の例

田兒之浦從打出而見者眞白衣不盡能高嶺爾雪者零家留

國家觀念の發達



合人親王

國史地誌の編纂 文化が

進み、外國との交が開けると、國家といふ考が強くなる。それで、聖德太子は、早く國史を撰ばれたが、この頃にも、元明天皇の時、太安麻呂が、勅を



古事記  
凡千二百二十  
餘年  
風土記

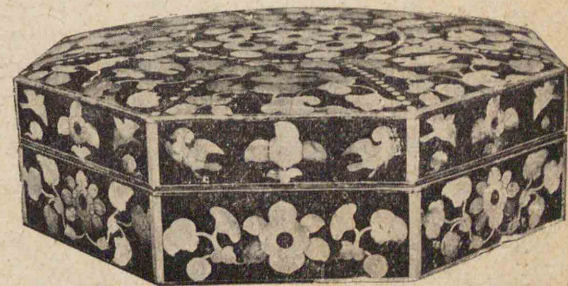
日本書紀  
凡千二百十餘  
年

國體意識の  
養成

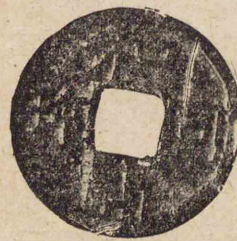
佛像佛畫  
織物  
染物  
漆器  
正倉院

奉じて、古事記を撰び、また、諸國からは、風土記を上つた。風土記は、地誌のはじめである。ついで元正天皇第四十の時、舍人親王が、勅を奉じて、日本書紀を撰ばれた。これから、國史、地誌などの撰ばれることが、次第に盛んになり、國のすがたが、はつきりと、國民の間に、理解せられ、忠君愛國の心を高めたのである。

美術工藝 佛教の盛んになるにつれて、美術工藝が進み、寺の建物は、立派になり、佛像、佛畫には、すぐれたものが多く、織物、染物、漆器などの美しいことは、目を驚かさばかりである。奈良の正倉院には、



(物御院倉正)箱手の細螺



和同開珎

男子の服装



女子の服装



篋<sup>せき</sup>は器樂るて手に持

この時代の美術工藝品の御物が、澤山に傳はつてゐる。正倉院は、この時代の建物である。

### 貨幣の流通

この頃、鑛山も開けたので、元明天皇の和銅元年に、和同開珎が鑄られた。これから貨幣が、少しづつ、行はれるやうになつた。

### 日常生活

大陸の文化が傳はつてから、日常生活も、かはずつた。衣服は、男女ともに、これまで左前にしてゐた衽も、右であはせ、綾、錦、

鑛山の採掘

和同開珎の鑄造

衣服  
右衽  
織物



家屋

などの織物が用ゐられ、家屋は、茅葺、板葺の外に、瓦で屋根を葺き、赤、青の繪具で、柱を塗ることもはじまり、次第に美しくなつた。

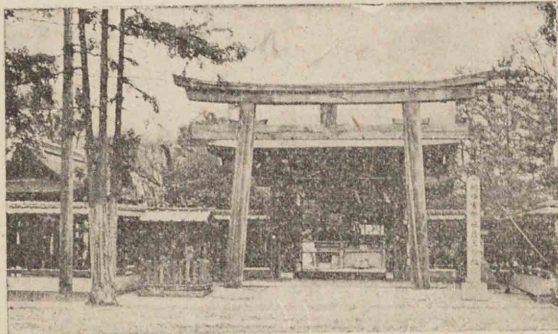
音楽

また支那、朝鮮の音楽も行はれてゐる。

文化の特質 この時代には、佛教が弘

まり、學問も、美術工藝も進んだけれども、まだ日本のものになりきつてゐない。

しかし、國家といふ考が強くなり、また萬葉假名が、工夫せられるなど、國風の文化が、漸くおこりかけてゐる。



(市都京) 社神王護るれ祭を蟲廣同呂麻清氣和

國風文化の曙光

文化の弊害 この時代の文化は、佛教がもとになつてゐる。されば佛教の弘

佛教と政治

まるにつれて、僧侶が重く用ゐられ、世の中の信用もあるから、遂に政治に口を出したり、貴族と勢を争ふやうになつた。中にも

道鏡の無道

凡千七百七十年

和氣清麻呂の精忠

稱徳天皇第四十代の時、道鏡は、政をほし、にして、君臣の義を

(紀元一四二九年)

みださうとするまでになつた。この時、和氣清麻呂が、道鏡の勢

にも恐れず、命を捨てる覺悟で、これを挫いたのは、誠に忠臣の模範である。これが爲めに、清麻呂は、遠い國へ流されたけれども、

つぎの光仁天皇第四十代の時、召かへされ、道鏡は、卻けられた。

和氣廣蟲

和氣廣蟲は、清麻呂の姉である。早くから宮中に

道鏡の排斥

仕へてゐたが、操が正しいので、稱徳天皇の御信任が厚い。清麻

孤兒の救養

呂が、道鏡を挫いた時にも力を添へた。また思ひやりが深く、飢

饑のをり、數十人の孤兒を拾ひ集め、自分の子として、育てたことがある。清麻呂との仲もむつまじく、姉、弟、財産を分けなかつたといふ。天皇が、まだ一度も、人の惡口をいつたのを聞いたことがないと、仰られたほど、たしなみのよい婦人であつた。



### 第三編 平安時代

#### 第一章 平安奠都

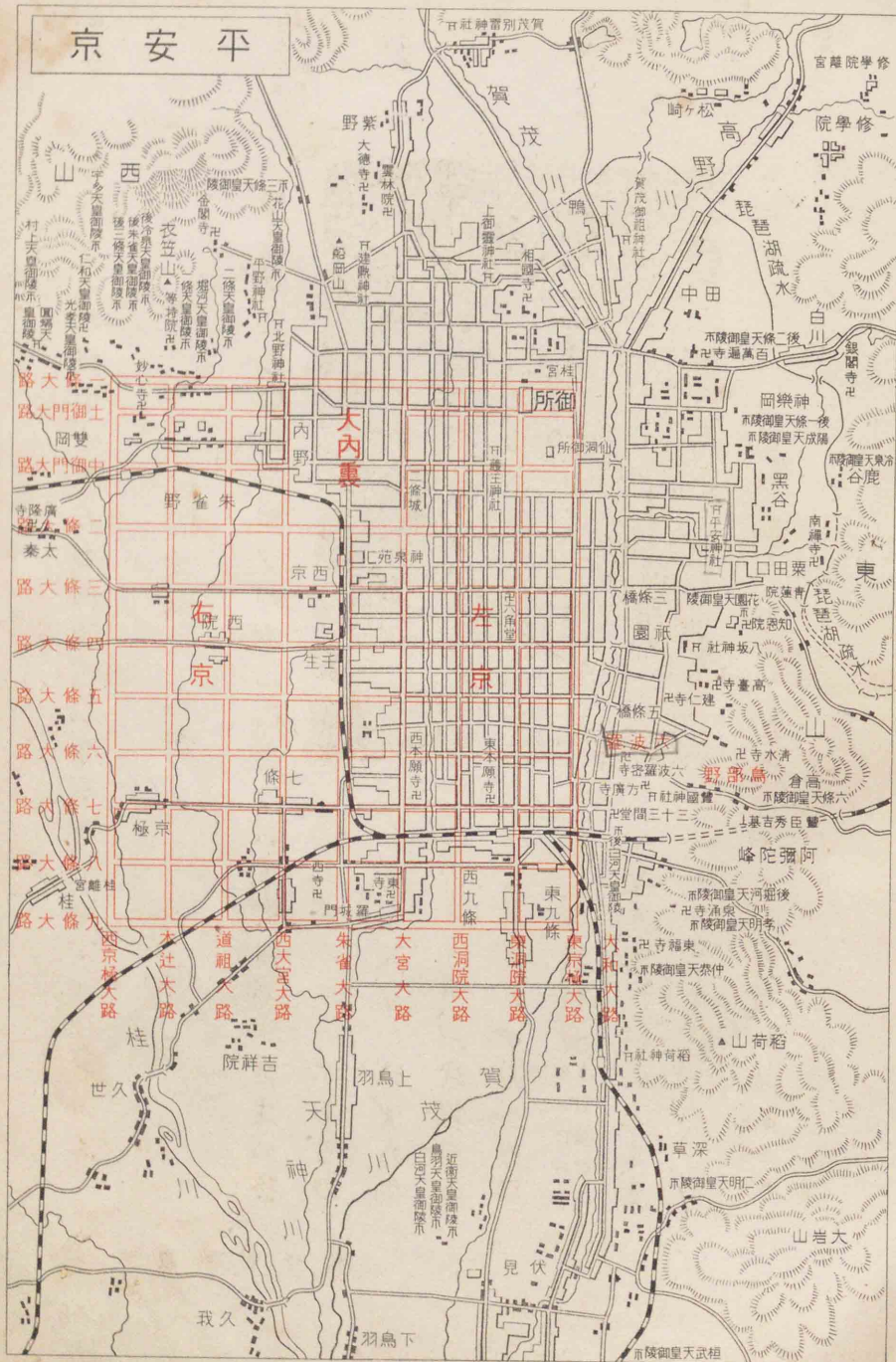
情弊の一新  
文化の發達

凡千四百餘  
年前

奠都の必要 大陸文化から受けた弊害を改めるには、人の心を引きしめなければならぬ。それには、奈良の都をはなれて、外の場所に遷るのが便利である。また文化も進んだので、大きな都が必要になつた。

平安京 桓武天皇第五代は、かやうな必要から、延暦十三年(紀元一四五四年)に、要害がよく、交通の便利な、今の京都に、都を御奠めになつた。左右の兩京に分れ、道路が、縦横に通じ、四方に築地をめぐらしてあるなど、平城京と同じであるが、それよりは、廣くもあり、立派でもあつた。これを平安京といひ、明治二年まで、千七十五年間の都で





平安時代

日本武尊以後の蝦夷征伐

凡千八百十年程前

多賀城の造築

坂上田村麻呂の征伐  
凡千三百三十九年前  
膽澤城の造築

あつた。この中、はじめの約四百年間を、世に平安時代といふ。

## 第二章 政治教學の刷新

東北地方の開拓 東北地方の蝦夷は、日本武尊の御征伐の後



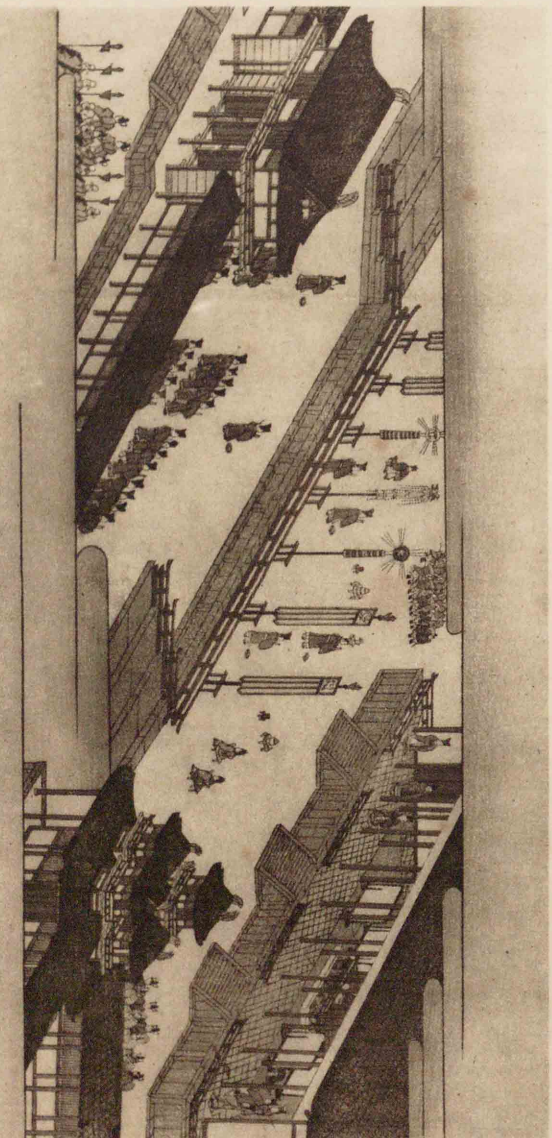
桓武天皇

にも、叛くことがあるので、齊明天皇の時、また御征伐になり、聖武天皇の時には、これに備へる爲めに、多賀城宮城縣宮城郡多賀城村を築かれたけれども、まだ十分でない。そこで

桓武天皇は、坂上田村麻呂をして討たしめたまひ、膽澤城岩手縣膽澤郡を築かれた。蝦夷は、この時に、ほゞ平ぎ、ついで嵯峨天皇第五



平安時代の皇居



るあで式の賀朝且元、門昌會が門るあに左、殿極大が物建るあに右

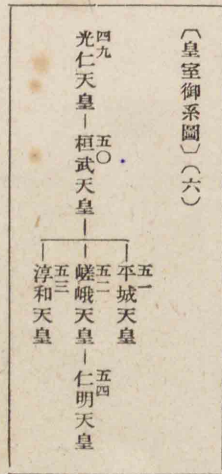
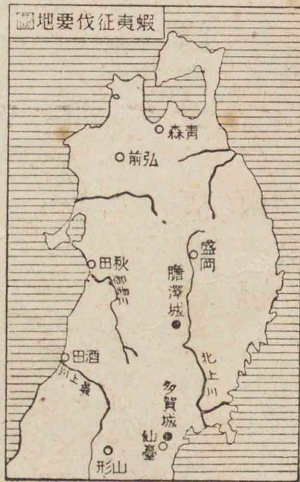


蝦夷の平定  
鎮守府將軍

政治と佛教との分離  
地方政治の革新  
教育の奨励  
學問の進歩  
名高い學者  
私立學校の設立

十二代の時にも、御征伐があつてから、全くしづまり、鎮守府將軍が膽澤城にゐて、東北地方を治めた。これから東北地方が開けたのである。

政治教育の革新 桓武天皇は、僧侶が政治に口を出すことを戒めて、その弊害を除き、地方には、よくない國司もゐるので、嚴重に取締りたまふなど、改革せられたところが多い。また教育をも、



はげまれたので、學問が進み、後には都良香、菅原道真、三善清行など、名高い學者があり、私立學校も出來た。

佛教の革新 これまでの佛教には、色々よくない事もあるか



最澄天台宗  
を傳ふ  
空海眞言宗  
を傳ふ  
凡千三百餘  
年前  
延曆寺の造  
營  
金剛峯寺の  
造營



(師大法弘)海空僧



(師大教傳)澄最僧

ら、最澄（傳大教）大師空海（弘法）の二僧が、  
桓武天皇の勅を奉じて、唐に留  
學し、歸國の後最澄は天台宗を  
傳へ、空海は眞言宗を傳へ、佛教  
を改革した。（紀元一四六五年）  
延曆寺（滋賀縣滋賀郡坂本村）  
は、最澄が建て、金剛峯寺（和歌山縣伊都郡高野町）  
は、空海が建てた名高い寺で  
ある。これから天台眞言の二  
宗が、弘く世に行はれた。

### 第三章 攝關政治の

由來

藤原氏の勃興 蘇我入鹿を

藤原不比等  
外戚となる

良房攝政と  
なる  
凡千八十年程  
前

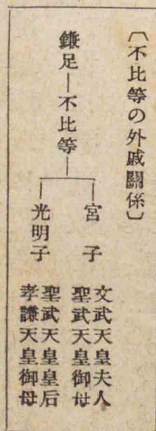


藤原不比等

誅し、大化の改新にも功のあつた中臣鎌足は、天智天皇の御信任  
が厚く、内大臣となり、藤原といふ氏を賜はつた。その子不比等  
も右大臣となり、また、はじめ  
て、皇室の外戚となつて、藤原  
氏の榮えるもとをつくつた。  
この後、御歴代の御母は、おほ  
かた藤原氏の女である。藤  
原氏は、これから盛んになつ

た。  
攝政關白 藤原氏が、外戚として、最

もあらはれるのは、不比等六代の孫良  
房からである。良房は、文徳天皇（第五十代）  
の時、攝政となつた。  
皇族の外に、太政大臣となり、  
清和天皇（第六十代）の時、攝政となつた。  
（紀元一五二八年）









第四章 國風文化の發達

大陸との關係 新羅は、この頃朝鮮半島を統一してゐたが、わが國とは、交がなく、新羅が滅び、高麗(紀元一五九六年)がおこつてからも、同様である。また支那とは、宇多天皇の時に遣唐使がやみ、ついで唐も滅んだので、交が絶えた。

平安文化の特色

國風文化 外國の文化を消化することは、奈良時代から、おこりかけてゐるが、大陸との交の絶えた後、ますます進み、遂に國風の文化をつくつた。こゝに平安時代の特色がある。

敬神 神佛の調和

信仰 佛教が弘まつても、神を敬ふ心は、少しも衰へない。そこで、日本の神も、印度の佛も、もとは一つであると考えられるやうになり、神佛二つの信仰が、結付けられた。また天台宗も、眞言宗も、よほど日本風になつてゐる。

平假名片假名の發明

國文の發達

紫式部の源氏物語

清少納言の枕草子

和歌

女流歌人の輩出

古今和歌集の勅撰

國文學 この頃、漢字をくづしたり、扁をはぶいたりして、平假名片假名がつくられた。これから文章が自由に書けるやうになつて、國文が發達した。紫式部の書いた源氏物語、清少納言の

書いた枕草子は、古今の

安 あ あ あ 阿 ア

名文といはれる。和歌

以 い い い 伊 イ

も盛んになり、在原業平、

宇 う う う 宇 ウ

紀貫之が名高く、女にも、

衣 え 衣 え 江 工

衛門、小式部内侍などの

於 お お お 於 才

歌人が多い。いづれも 宮中の女官である。貫之は、また、他の人々と、醍醐天皇の勅を奉じ、古今和歌集を撰んだ。勅撰集のはじめである。

和歌の例

源字の名假平

源字の名假片



天目星  
五世

人はいさ心もしらず故郷は花ぞ昔の香に匂ひける  
千早ふる神代もきかず龍田川韓紅に水くゝるとは  
古への奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな

紀貫之  
在原業平  
伊勢大輔

美術工藝の  
日本化

繪畫

佛畫

日本畫

書道

假名文字

建築

鳳凰堂

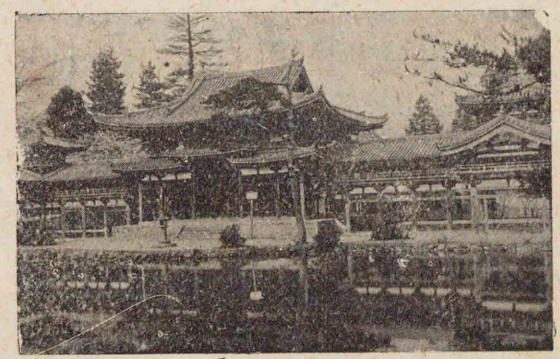
彫刻

外國貿易  
内地貿易

美術工藝

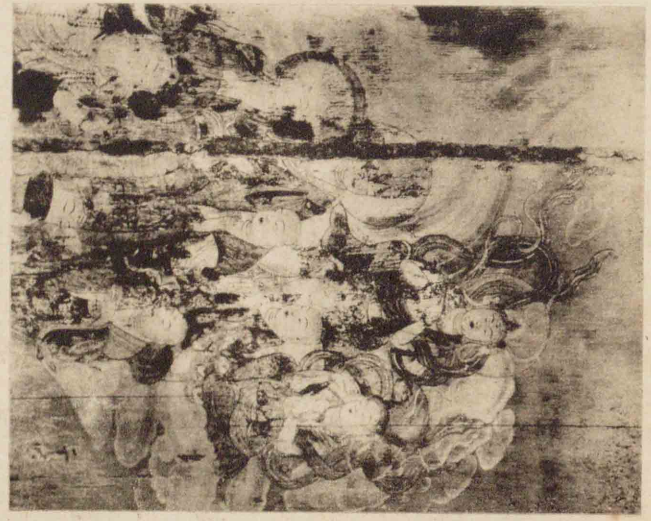
美術工藝も支那風をばなれて日本風になつた。佛畫では宅磨爲成が名高く、巨勢金岡が寫生に長じて、日本畫の祖といはれる。書道では、漢字の外に、美しい假名文字が出来て、小野道風、藤原行成などが巧であつた。建築では、山城宇治の平等院京都府宇治郡宇治の鳳凰堂が、日本風の美しさを極め、名工定朝の佛像、爲成の壁畫とともに、この時代の美術の標本として知られてゐる。

産業 外國貿易は、支那、朝鮮との間に行はれ、内地貿易では、京



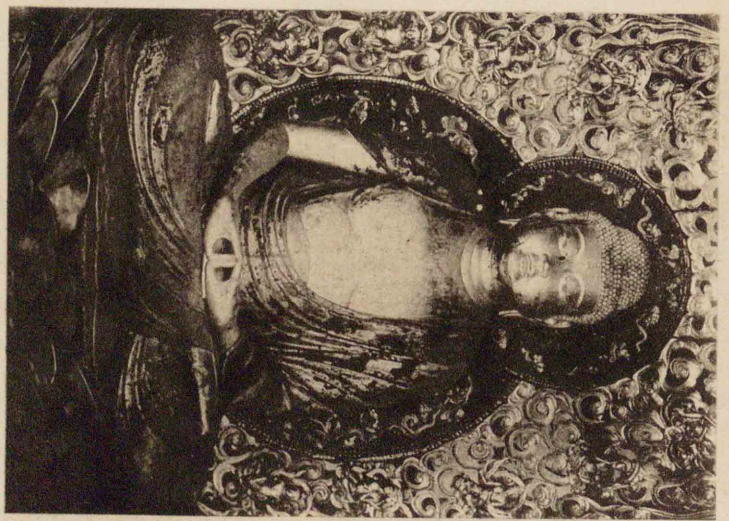
平等院鳳凰堂の全景

平安時代の美術



鳳凰堂壁繪 (宅磨爲成作)

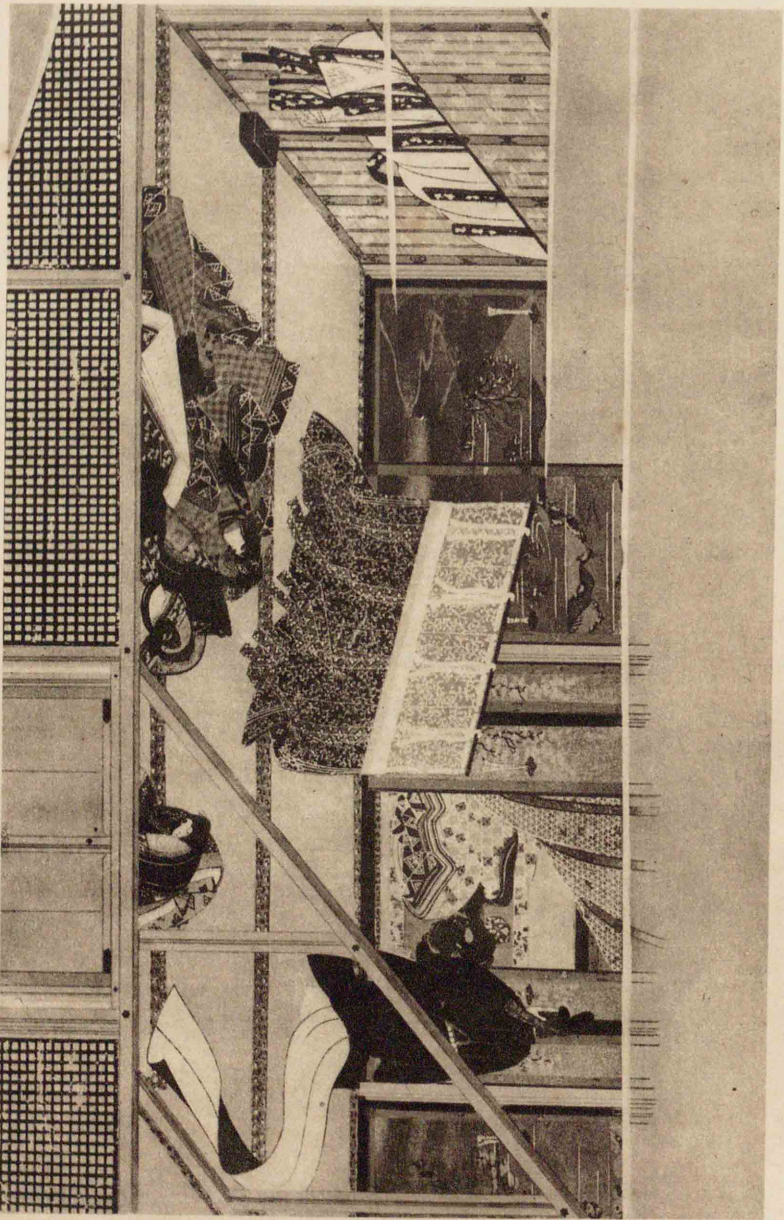
妙徽兼圓好相の陀彌、作の年晩朝定、は像佛式様の雅閑美優、は畫佛の成爲、し達に極のるゐてし和袋を長特たれらせ化本日、に



鳳凰堂本尊阿彌陀如來 (定朝作)



活 生 の 代 時 安 平



あゝて建に所の塵の左と央中、で部内の殿寢、單二十の子女、帯束の子男  
(巻繪記驗現權日奉)ののもるお用にめ爲る切任を屋部。帳几はのる



京都の商業  
諸國の市  
貨幣

詩歌管絃の  
遊

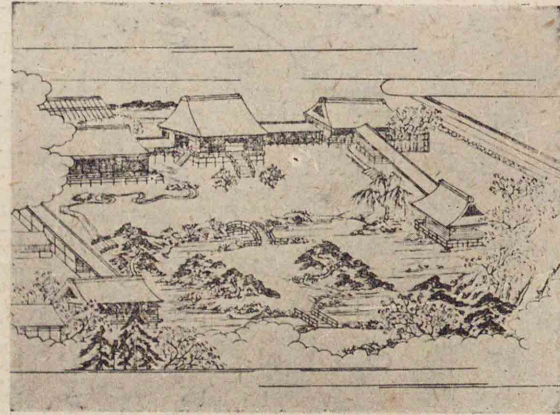
家屋  
寢殿造

衣服

束帶  
十二單

都の商業が盛んであり、諸國の市が榮えた。貨幣も引きつゞき  
つくられたが、原料が乏しいので、後  
には、支那の錢が流通してゐる。

日常生活 世の中が、泰平である  
から、貴族たちは、歌をよみ、詩をつく  
り、音楽を奏して、日を暮らした。さ  
れば寢殿造といふ優美な屋敷に住  
ひ、庭には、池もあれば築山もある。  
衣服も、支那風から、日本風になつた、  
品のよい男子の束帶、女子の十二單  
が行はれた。



寢殿造とその庭園

寢殿造は中央に寢殿があり、その東西北の三面に對の屋といふ建物がある。寢  
殿は、主人のある所對の屋は、妻子のある所、南面には、庭園があつた。



第五章 世上の有様

中央の有様 藤原氏は、勢のあるにまかせて、奢ウツクに耽トるばかり

で、政マツリに心を用ゐないから、  
京都の市中さへも、おだやか  
かでない。されば、寒い夜  
に、御衣ミイを脱ヌいて、貧しい民  
の身の上を思ひやりたま  
へる醍醐天皇、下々シモシモのもの  
にまで、政の善悪を御尋ね



醍醐天皇

になつた村上ムラカミ天皇第二十六代など、上に聖天子がまし／＼たけれど  
も、思召シメは、下まで届かない。世の中も、次第にみだれるやうにな  
つた。

京都の不穩

醍醐天皇の御聖徳

村上天皇の御聖徳

延喜天曆の御代

醍醐天皇も、村上天皇も、御聰明にまし／＼、御心を政治に用ゐたまひ、民をあはれ  
まれたので、世に延喜天曆チンギョウテンリキの御代ミコトと申し、めでたいことの例レイには、必ず引くことにな  
つてゐる。延喜は醍醐天皇御代の年號、天曆は村上天皇御代の年號である。

地方の有様 中央の有様がこのやうであるから、朝廷の命令

も、地方には及ばない。國司、郡司なども、重い税を取立てたり、私  
用の爲めに、人民を使つたり、よくないことをするものが多い。  
また班田收授は、早くすたれ、神社、寺、豪族などの私有地が多くな  
つた。これを莊園シヤウエンといひ、國司の支配を受けず、租税をも出さな  
いから、國庫の収入が減り、朝廷の御威光が衰へた。されば、山に  
は山賊があり、海には海賊があり、地方もまたみだれた。

武士の起り 世の中がみだれてから、地方の豪族は、身を衛マモる  
爲めに、武藝を學び、兵士をも養つた。これが武士の起りである。  
また地方の人民も、武士の保護を受けるのが安全であるから、そ

地方人民の自衛

地方豪族の自衛

山賊海賊

班田收授の廢絶  
莊園の増加

國司郡司の私曲



の部下となり、兵士となつた。これから武士の勢が盛んになつて行くのである。

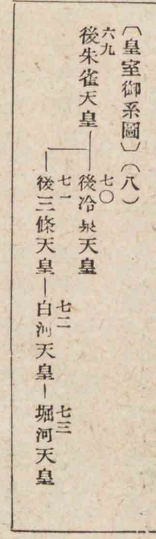
### 第六章 院政

藤原氏を抑へたまふ

置記録所の設

後三條天皇の御政治 後三條天皇<sup>第七十</sup>は、藤原氏の爲めに、世の中のみだれて行くのを憎みたまひ、その勢を抑へられた。御母は、三條天皇の皇女で、藤原氏と外戚の關係がないから、まことに都合がよい。また記録所<sup>カキモノ</sup>において、莊園<sup>シヤウエン</sup>を取締り、奢を戒め、儉約をすゝめるなど、思召<sup>オモボシ</sup>のまゝに、政を行はれたので、藤原氏は、次第に衰へた。

院政の始 ついて白河天皇<sup>第七十</sup>は、御讓位の後、上皇と稱せられ、院中で政を行はれた。



これを院政といひ、その御命令を

院中の政 凡千八百五十餘年前

院宣 空名の攝政 關白

院宣といふ。院とは、上皇の御所である。これから攝政、關白は、名ばかりとなり、藤原氏の勢が全く衰へた。しかし藤原氏の衰へた時は、武士の勢が強くなりかけてゐる時であつた。

武士の勢力

天慶の亂 凡千九百程前

平忠常の亂 凡千九百十年程

武士の争亂 都では、藤原氏が、政を怠つてゐる間に、地方では、武士の勢が盛んになり、世をさわがしたことも多い。朱雀天皇<sup>第六十</sup>の時には、平将門<sup>ヘイシャウモン</sup>が、亂を下總におこし、藤原純友<sup>ヘイゲンジュンユウ</sup>が、海賊を従へて、南海、山陽、九州の地方を荒らし、源經基<sup>ゲンキョウキ</sup>、平貞盛<sup>ヘイサダモリ</sup>、藤原秀郷<sup>ヘイラウヒデサト</sup>に誅せられた。世に天慶の亂といふ。後一條天皇の時には、平忠常<sup>ヘイタカノトシネ</sup>が、亂を上總におこして、經基の孫頼信<sup>ケンキョウキノミコタカノブミ</sup>に誅せられた。



(戦類がのるあと軍將、子父義類の中陣) 役の年九前



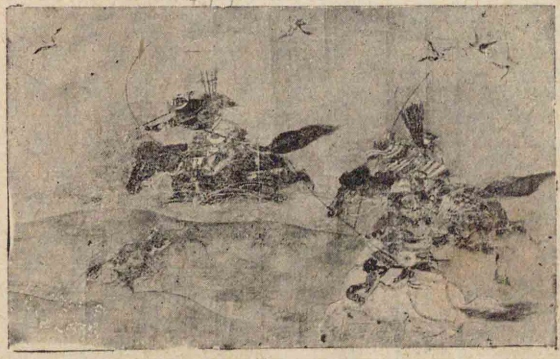
前九年の役  
凡八百八十餘年前

後三年の役  
凡八百五十餘年前  
南海山陽の海賊  
凡八百餘年前

源義家

の時には、安倍頼時、貞任父子が、亂を陸奥におこして、頼信の子頼義に誅せられた。世に前九年の役といふ。白河天皇、堀河天皇（凡八百八十餘年前）の時には、清原家衡が、亂を出羽（凡八百五十餘年前）におこして、頼義の子義家に誅せられた。世に後三年の役といふ。また崇徳天皇（凡八百餘年前）の時には、南海、山陽の海賊が、亂をおこし、平忠盛が、これを平げた。忠盛は、貞盛の後である。

源氏では、頼信、頼義、義家、平氏では、忠盛など、いづれもすぐれた人物である。中にも義家の威名は、最も高く、源氏は、これから盛んになった。義家は、武勇ばかりでなく、風雅の道にも長じ、嘗て奥州へ下る時、常陸の勿來の關で櫻の散るのを見て詠んだのが、吹く風にな（勿來）こそその關と思へども、道もせに散る山櫻かな



（ることすだみな列が雁でのるるが兵伏）役の年三後

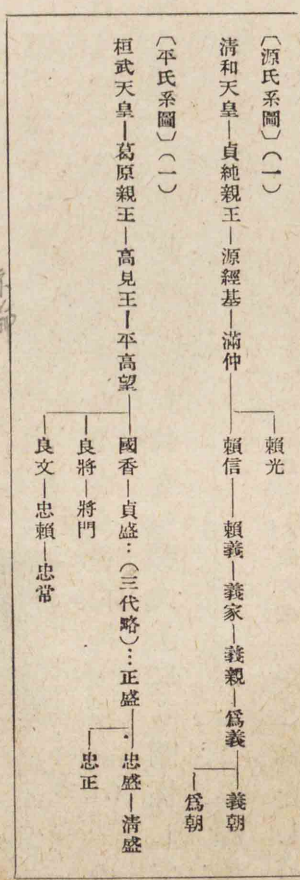
源平二氏の武功

武士の棟梁

僧兵

また大江匡房に兵法を學び、後三年の役に、雁の列をみだすのを見て、伏兵のあることを知つたのは、名高い話である。

源平二氏の勳興 武士が、亂をおこすごとに、これをしづめて、功のあつたのが、源氏と平氏とである。源平二氏は、これから、諸國の武士



國の武士に慕はれて、その頭と仰がれるやうに

なつた。この頃、延曆寺、興福寺（奈良）など、大きな寺でも、兵士を養つてゐる。これを僧兵といふ。不平があると、京都へ押寄せて來るので、いつも源氏と平氏とが、これをしづめた。されば源平二氏は、ますます盛んになり、白河上皇が、院政を行はれたをりに





兵 僧

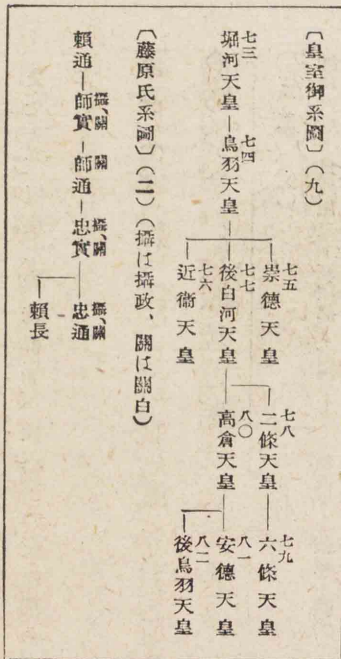
は、藤原氏にかはるだけの實力を持つてゐたのである。

### 第七章 源平二氏の盛衰

#### 源平二氏の争 源氏、平氏

は、もはや實力を持つてゐるから、後白河天皇第七十代の時、關白藤原忠通と、その弟左大臣頼長との勢力争にも關係して、保元の亂(紀元一八二六年)がおこり、源義朝、平清盛が、これをしづめた。ついで義朝と清盛とが勢を争ひ、二條天皇第七十代の時、平治の亂(紀元一八九九年)がおこり、義朝は、清盛の爲めに殺

保元の亂  
凡七百八十餘年前



の時、平治の亂(紀元一八九九年)がおこり、義朝は、清盛の爲めに殺

平治の亂  
凡七百八十年  
前

源氏の衰微

され、その子頼朝は、伊豆に流された。これから、しばらくの間、源氏は、衰へてゐる。

#### 平氏の全盛 源氏が衰へてから、清盛の勢が強く、六條天皇第七十代

平清盛の太政大臣就任  
凡七百七十餘年前

十九代(紀元一八二七年)の時、太政大臣となり、藤原氏に代つて、政を行つた。武士が政を行ふのは、清盛が、はじめである。清盛は、勢にまかせて、わがまゝのことが

多い。その子重盛は、よく忠孝の道をわきまへ、父を諫めてゐたが、まもなく重盛が薨じてから、遂に後白河



平 清 盛

法皇を、押込めまゐらせるまでになつた。

重盛は、清盛の長子、この時内大臣であつた。人となり聰明武勇に秀でゐる。忠孝は、その天性であり、常に父のわがまを憂へてゐたが、嘗て清盛が、後白河法

重盛の諫

清盛の無道

平重盛の忠孝

武家執政の始





平重盛

皇を押込めまゐらせようとするのを聞いて大に驚き、如何なることがあつても、君を怨み奉るべきでない。人間として最も大切な心がけは忠義である。せひ思ひとまつていたゞきたい。もし強いて思召のとほりになされたいとならば、先づ重盛の首を刎ねたまへ。自分が生きてゐる間は、父君をして、忠義の道に背くことをおさせ申すことは出来ない。泣いて諫めたので、清盛も、一たんは思ひとまつた。忠ならんとせば孝ならず、孝ならんとせば忠ならず、重盛の進退こゝにきはまるといつて慨いたのは、この時である。不幸にして父に先つて薨じた。

源氏の擧兵 源氏の一族源頼

政深くこれを憤り、安徳天皇第十一

代の時、後白河法皇の御子以仁王の令旨を傳へて、諸國の源氏を招き、清盛を討たうとした。頼政は敗れて、清盛に殺されたけれども、源頼朝は、兵を伊豆に擧げて、相模の鎌倉神奈川縣鎌倉町に據り、頼

朝の従弟源義仲は、兵を信濃の木曾長野縣西筑摩郡に擧げて、早くも京

平氏の都落 その頃、清盛が薨じて、

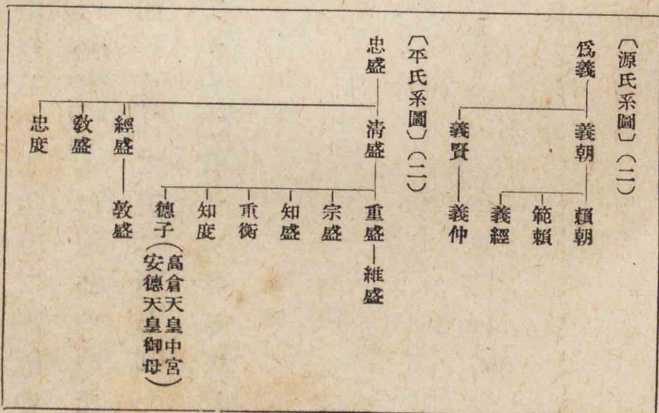
二男宗盛が家をついでゐたが、愚であるから、義仲を防ぐことも出来ない。一族を引きつれて、九州に走つた。

源義仲の滅亡 義仲は、平氏に代つ

て、京都に入つたが、勝誇つて、わがまの行が多い。頼朝の弟範頼、義經に攻められて、近江の粟津滋賀縣滋賀郡大津町で戦死した。

平氏の滅亡 頼朝と義仲と戦つて

ゐる間に、平氏は、勢をもりかへして、九州から攻上り、攝津の福原



(紀元一八四四年)



一の谷の戦  
壇の浦の戦

市神戸に據り、城を一の谷に築き、京都に入らうとした。範頼、義經  
進んでこれを陥れ、義經はまた平氏の逃げるのを追うて、讃岐の  
屋島高松市の東方に破り、さらに長門の壇の浦下の關海に附近に追ひつめた  
ので、平氏の一族は、こゝに滅び、宗盛は捕へられて、後に斬られた。  
時に壽永四年、清盛が太政大臣になつてから、二代、十九年めであ  
る。  
(紀元一八四五年)

第一編 期

第四編 鎌倉時代

第一章 幕府の成立

源頼朝の事業

源頼朝は、平氏を滅ぼした後、後鳥羽天皇第十二

代の文治元年、諸國に守護をおいて、軍事警察をつかさどらしめ、  
(紀元一八四五年)

地頭をおいて、土地を支配し、租税をつかさどらしめ、いづれも部  
下の武士を任命した。これから、守護、地頭の勢が強くなり、朝廷のお  
かれた國司は、次第に名ばかりとなり、全國の土地、人民も、いつし  
か武士の支配を受けるやうになつた。ついで、また、陸奥の豪族  
藤原泰衡をも滅ぼしたので、もはや頼朝に手向ふものがない。  
(紀元一八四九年)

鎌倉幕府

そこで頼朝は、建久三年、征夷大將軍に任ぜられて、  
(紀元一八五二年)

守護地頭の設置  
凡七百五十餘

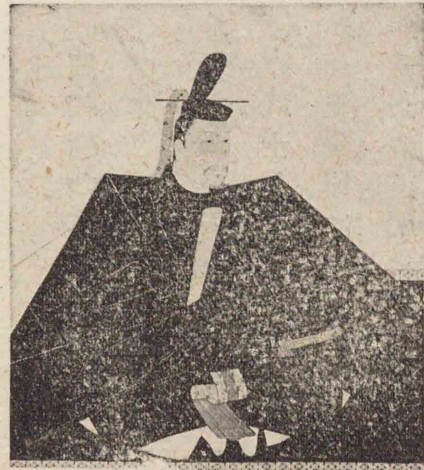
陸奥藤原氏の滅亡  
社會の統一

頼朝幕府を開く  
凡七百四十餘年前



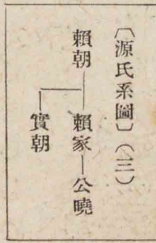
武家政治  
鎌倉幕府  
鎌倉時代  
國體との矛  
盾

政所  
侍所  
問注所  
別當  
執事



源頼朝

幕府を鎌倉に開いた。幕府は、征夷大將軍が、政を行ふ役所である。これから朝廷が衰へ、政治の實権が、幕府に移つた。世にこれを武家政治といひ、この時の幕府を鎌倉幕府、またその滅びるまでの間を鎌倉時代といふ。しかし、武士が、政治の實権を握るところは、國體に背いてゐる。故に、その後、國體の明かにせられた時に、武家政治は、滅んだのである。



幕府の組織 征夷大將軍の下に、政を統べる政所、軍事、警察をつかさどる侍所、裁判をつかさどる問注所がある。政所と侍所との長官を別當、問注所の長官を執事といふ。後には、政所の長

執權

北條時政の野心

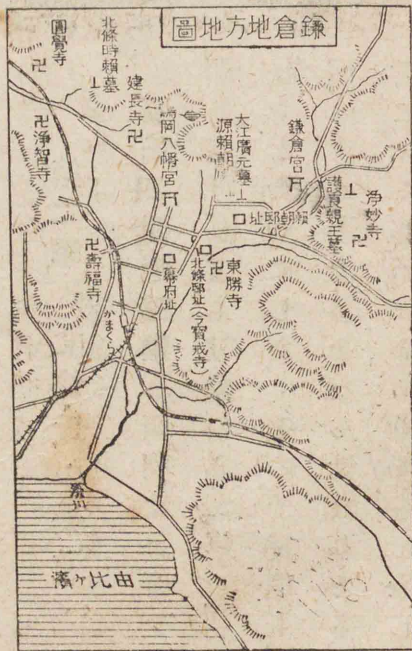
源頼朝の薨去  
凡七百四十年  
程前

源頼家の遭難

源實朝の遭難  
凡七百二十年  
程前

空名の將軍

官を執權と稱し、侍所の別當とともに、北條氏の世襲となつた。源氏の滅亡 北條時政は、頼朝を助けて、幕府を開いた功臣である。勢のあるにまかせて、源氏にかはりたいとの野心をおこし、頼朝が薨じ、その子頼家(紀元一八五九年)が將軍になつてから、まもなく、これを弑し、頼家の弟實朝(紀元一八六三年)を立てた。頼家、實朝の母は、時政の女である。然るに實朝も、頼家の子公曉に殺されたので、源氏は、父子三代、二十八年で滅んだ。北條氏の執權 時政は、はじめて執權となり、その子義時が、あつた。義時は、源氏の滅んだ時、藤原頼經を京都から迎へ



幕府政治  
は  
一八八  
年  
に  
終  
了  
した



事實上幕府の中心たる北條氏

源頼朝の敬神尊王

源實朝の尊王

て將軍としたが、名ばかりである。これから北條氏が、源氏に代つて、幕府の實權を握つた。後には、皇族を、將軍にいたゞいてゐるけれども、やはり名ばかりである。

### 第二章 北條氏の暴逆



源實朝

源氏の朝廷尊崇 頼朝は、幕府を開いたけれども、敬神の心が厚く、朝廷をも大切にした。その子實朝も、「山はさけ、海はあせなん世なりとも、君にふた心、われあらめやも」と詠じた。たとへ、山はくづれ、海が淺くなるやうなことがあつても、忠義の心は、失はないといふのである。然るに北條義時には、その心がけがないから、遂に承久の變がおこつた。

後鳥羽上皇の朝權回收の艱慮

北條氏誅伐の院宣 凡七百十餘年前

武士の不心得

天皇の廢立

三上皇の遷國遷幸

北條氏の不忠不義

承久の變 後鳥羽天皇は、御讓位の後、土御門天皇三代順徳天皇第四代仲恭天皇第五代三代之院政を行はれ、上皇と申上げた。源氏の滅んだ後、北條義時が政をほし、いまゝにするのを憎



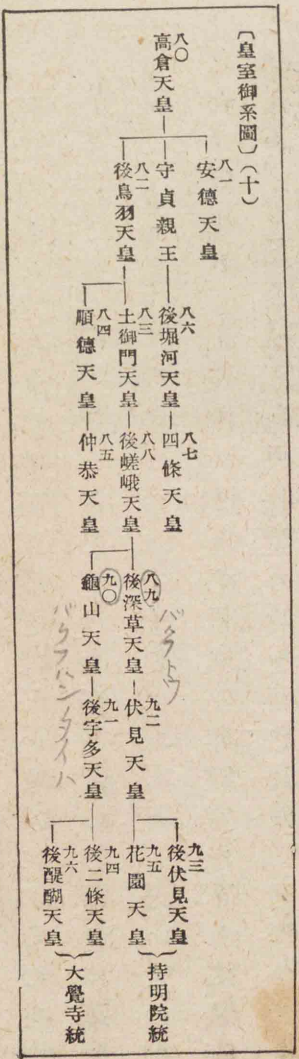
後鳥羽上皇

みたまひ、わが國體のとほりに、幕府の政を、朝廷に取もどした。いとこの御考から、承久三年院宣を下して、義時誅伐の兵を召された。諸國の武士は、北條氏を恐れて、御味方にまゐるものが少い。義時は、大軍を出して、官軍を破り、遂に、仲恭天皇を廢して、後堀河天皇第六代を立て、後鳥羽上皇を隱岐に、土御門上皇を土佐阿波に、順徳上皇を佐渡に遷しまゐらせた。世に承久の變といふ。北條氏の不忠、不義は、いふまでもないが、つまりは、この頃



國體意識の衰頹  
國史を學ぶ心得  
南北兩六波羅  
兩統迭立

の武士が、わが國の歴史を忘れて、國體をわきまへなかつたからである。われ／＼は、正しい心を以て、國史を學ばなければならぬ。義時は、また、京都の南六波羅、北六波羅の屋敷に、一族をおいて、朝廷を抑へ奉つた。その後、皇統が二つに分れ、代る／＼御位に御即きになるやうになつたをりにも、北條氏は、口出しをしてゐる。恐多いことである。



隱岐に  
おの  
鳥羽上皇の  
御歌

隱岐で御よみになつた後鳥羽上皇の御歌、  
われこそは新島守よ隱岐の海の荒き浪風心して吹け

阿波に  
おの  
土御門上皇の  
御歌

阿波で御よみになつた土御門上皇の御歌、  
浦々に寄する白波にこと問はむ隱岐のことこそしらまほしけれ  
絶海の孤島に、浪の音ばかり聞召して、思ひに耽りたまふ後鳥羽上皇白波の寄せ  
るのをみそなはして、御父君を慕ひたまふ土御門上皇の大御心を拜することに、  
われ等は、胸のさけるやうな心地がする。恐るべきは、國體意識の衰へである。  
また三上皇は、それ／＼行在所で御かくれになつた。

恐るべき  
國體意識  
の衰頹

北條泰時の  
政治  
貞永式目の  
制定  
北條時頼の  
政治



この頃が、北條氏の勢の、最も盛んな時である。

北條時頼  
北條時頼の子泰時は、後堀河天皇の貞永元年に、貞永式目といふ武家の法制を定め、その孫時頼とともに、人民をいたはつたので、國內がよく治まつた。



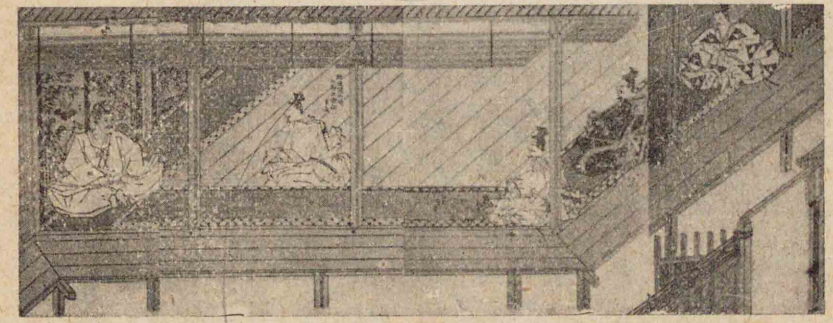
藤原氏及び平氏の奢り

源頼朝の尙武勳儉

武技  
笠懸  
流鏑馬  
犬追物  
家屋  
衣服

### 第三章 武士の生活

日常生活 藤原氏は、奢を極め、暮らし向きも、はて、あつた。平氏も、勢を得てからは、同じであり、武士らしい元氣をも、なくした。源頼朝は、これを憂へ、忠孝を重んじ、武藝を上げ、し、儉約をすゝめた。故に、この時代の武士は、元氣があり、笠懸、流鏑馬、犬追物など、勇ましい遊を好み、家屋は、板塀、土塀で四方を圍み、板茅で屋根を葺き、衣服は、質素な直垂を着け、烏帽子をかぶるなど、手輕な生活をしてゐる。



て着、子頼鳥がのるゐてい々たいに頭、活生の士武。るあてい敷にけだ所な要必は屋、垂直はのるゐ

武士の本分

武士道 武士の守るべき道德が、武士道である。忠孝を重んじ、武藝を上げ、主人と親との爲めには、喜んで命をも捨てる。また、贅澤なことをしない。神佛を信じ、何事にも、眞心を盡くすのが、大切の心がけとせられた。これだけの眞心があり、信仰があり、元氣があればこそ、元の大軍が、押寄せた時にも、國威をかゝやかすことが、出來たのである。

### 第四章 國威の發揚

支那の形勢  
宋金の對立  
蒙古の勃興  
金の滅亡  
朝鮮の形勢

支那朝鮮の形勢 支那は、唐が、早く滅び、この頃では、宋金の二國に分れてゐた。然るに、二國の北部に、蒙古がおこつて、金を滅ぼし、また中央亞細亞から、歐羅巴の東部までもあはせ、國力が盛んである。朝鮮では、高麗が、半島を支配してゐた。蒙古の無禮 蒙古は、その主忽必烈の時、高麗をも屬國とし、遂



蒙古わが國の服従を促す  
凡六百七十年  
稱す  
蒙古國號を建て、元と稱す

元高麗軍の襲來  
凡六百六十餘年前

戰術の相違

敵船の覆没

に、わが國をも従へようとして、龜山天皇第十代の文永五年(紀元一九二八年)以來、たびたび國書をおくつて來た。執權北條時宗時宗は、その無禮を怒り、朝廷に奏上して、これを卻け、兵備をととのへた。まもなく蒙古は國號を建て、元と稱した。



北條時宗

文永の役 元は、わが國の

従はないのを怒り、後宇多天皇第九十代の文永十一年(紀元一九三四年)、高麗と連合して、二萬餘人、對馬、壹岐を侵し、ついで肥前の海岸

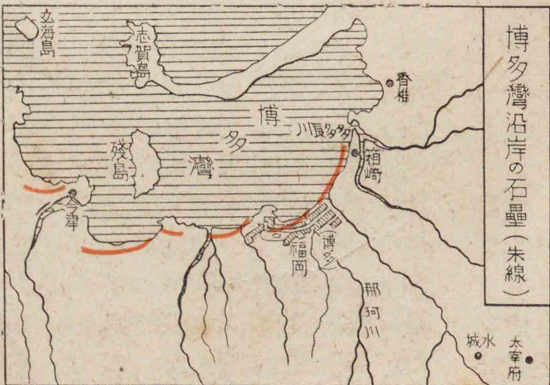
に押寄せ、また筑前の博多福岡市一部に迫つた。元の兵は、隊を組んで進退する團體組織であるから、一騎討の戦争ばかりしてゐる我が兵は、勝手がちがふので、ひどくなやまされた。たま／＼暴風が吹いて、敵船を沈め、助かつたものは、わづか／＼ある。世に文

永の役といふ。

元高麗軍の再襲  
凡六百五十餘年前

敵船の覆没  
元寇

弘安の役 その後、元は、また、使をおくつて來たが、時宗は、これを斬つて、決心を示し、石壘を博多の海岸に築いた。ついで、元は、宋を滅ぼし、その勢に乗つて、弘安四年(紀元一九四一年)再び高麗の兵をあはせて四萬餘人、對馬、壹岐を経て、博多の海上に押寄せ、別に十萬の本軍も來り、敵船は、海にあふれるほどである。この時、わが兵は、もはや、敵の戰術を知つてゐるから、よく防いで、上陸させない。たまたま、また暴風が吹いて、敵船を沈め、逃げて歸つたものは、三萬人に過ぎない。世に弘安の役といひ、前後の兩役をあはせて、元寇といふ。



博多灣沿岸の石壘(朱線)



龜山上皇の御祈願  
國民の從軍

舉國一致 この時、龜山上皇は、御身を以て、國難に代るべきを、皇大神宮に祈りたまひ、國民も、老少となく、先を争うて從軍した。元の大軍を破り、國威をかゞやかしたのも、國內が一致したからである。暴風が吹かないで、十分勝てる戦であつた。

わが國の美風



龜山上皇

かやうに、一致して、國難にあたるのは、わが國の美風である。故に、いつも強敵を破り、一度も、外國の侮を受けたことがない。

元高麗軍の蠻行  
捕虜の優待  
戦死者の弔慰

日本人の博愛 文永の役に、元、高麗の兵は、各地で、掠奪と虐殺とをした。そんな蠻行は、日本人には出來ない。日本人は、よくその敵を愛し、捕虜をいたはり、戦死者をも弔つた。博愛は、昔か

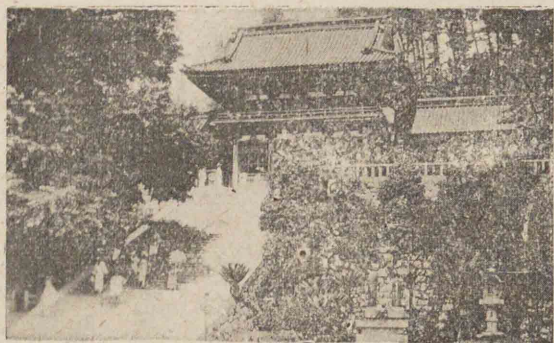
日本人の美德

ら傳はる日本人の美德である。

### 第五章 鎌倉時代の文化

氏神の社

伊勢參宮



源氏の氏神八幡宮(倉鎌)

を捨てることが多いので、この世の安樂よりは、未來の幸福を願

現世より  
未來の信仰

敬神 神を敬ひ、先祖を大切にすることは、昔のまゝに盛んであり、また、その家で最も敬ふ神をも、氏神といふことになつた。源氏の氏神八幡宮などがそれである。遠い國々から、皇大神宮に、參詣することも、この頃から、廣く行はれた。

佛教 武士は、厚く佛教をも信じた。しかし、天台宗、眞言宗などの、むつかしい教は、武士に分りにくい。また、戰場で、命



浄土宗

一向宗

法華宗  
時宗

念佛と題目

日本に出来た  
新らしい  
宗派

禪宗

臨濟宗  
曹洞宗

ふやうになつた。これが爲めに、法然ほつぜんは、早く浄土宗じやうどをはじめ  
てゐたが、この時代にも、その弟子親鸞しんらんは、一向宗いっかうしゆをひらき、また  
日蓮にちれんは、法華宗ほつわしゆ、一遍いぺんは、時宗ときしゆを  
ひらき、念佛ねんぶつや題目だいもくを唱へれば、未來  
は、極樂浄土ごくらくじやうどへ行かれると教へた。  
分りやすい教であるから、武士や庶  
民に、信ずるものが多い。いづれも  
日本で出来た新らしい宗派である。



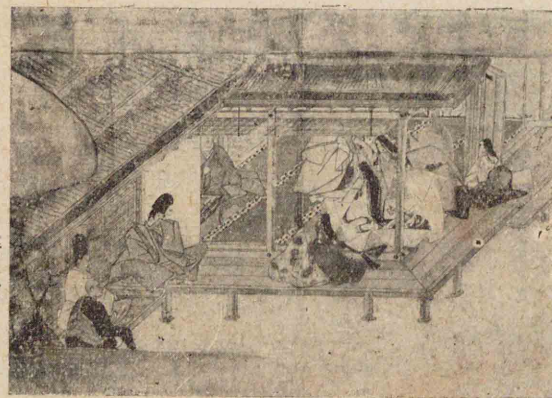
禪宗も、

僧 宋から

親 傳はり、

鸞

武士の間に弘まつた。榮西えいせいの傳へ  
た臨濟宗りんじしゆと、道元だげんの傳へた曹洞宗そうとうしゆと



法然が爲に教説する

活生の代時倉録



あるあもしがな着、兒男こゝらがのゐてしく短、兒女こゝらがのゐてしく長を髪。のまたい畫を狀の戲遊の女子こゝらの族貴  
(巻繪行人上然法)のゐて馬竹うまたけがのゐてつ跨またてけつを紐ひも、に竹たけたいつの笹ささ。のゐてけつを袴はかまに袖小そでこはく多



日本畫の大  
成

佛像彫刻の  
變化

寺院建築の  
新様式

武器の發達

陶器の發達

國文學

軍記物

和歌



がある。

美術工藝

繪畫では、土佐光長藤原信實が、日本畫を大成して、繪卷物や肖像を描き、佛像彫刻では、武士の氣風を受けて、東大寺にある、名工運

慶の仁王のやうな勇ましいものがつくられた。禪宗の寺が飾のない、質素な建物であるのも、これまでとは、違つてゐる。また戦争の爲めに、甲冑の製作が進み、刀にも正宗、崎、吉光、粟田などの名工が出た。支那の風を學んで、尾張の瀬戸焼のつくられたのも、この頃である。

文學 漢文學は、衰へたけれども、國文學では、力のある新らしい文章で書いた平家物語、源平盛衰記などの軍記物が、多くの人に讀まれ、和歌では、藤原定家、源實朝、僧西行などが名高い。定



家は、また、後鳥羽上皇の仰により、新古今和歌集を撰んだ。

和歌の例

箱根路を我こえくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆ  
心なき身にもあはれは知られけり嶋立つ澤の秋の夕暮

源實朝  
西行

外國貿易

内地貿易

市場

京鎌倉の

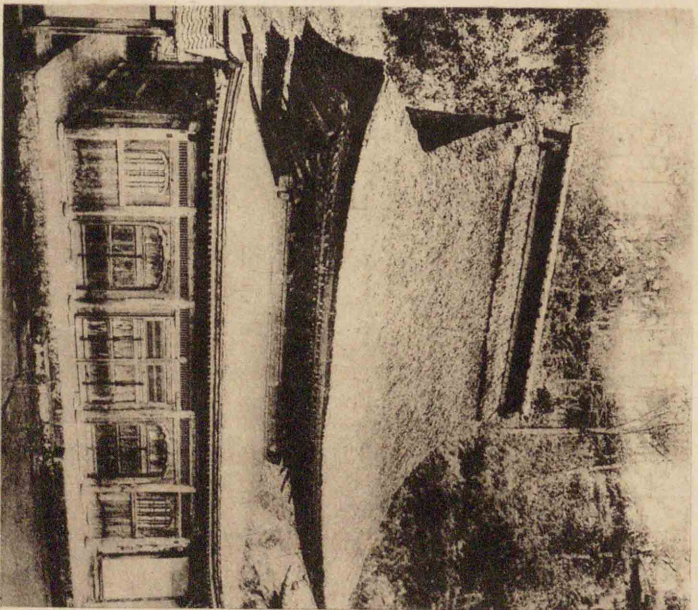
商業

武士中心の  
文化

産業 支那、朝鮮との外國貿易は、元寇の役に、一時絶えたが、内地貿易は、引きつづいて榮え、各地の市場も多くなつた。商業は、京都よりも、鎌倉が盛んである。貨幣は、支那の錢が流通した。  
文化の特色 この時代には、武士の勢が盛んであるから、武士にふさはしい信仰があり、武士の氣性にあふやうな、文學と美術工藝とがおこり、武士の使ふ武器が進んだ。かやうに、何でも、武士を中心としたところに、文化の特色がある。



大東大南門仁王



圓覺寺舍利殿(禪宗建築)

鎌倉時代美術の標本



財政の困難  
政治の頹廢

後醍醐天皇  
の御計畫

### 第五編 建武中興と吉野時代

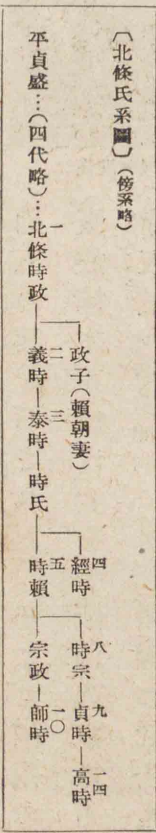
#### 第一章 建武中興

北條氏の衰頹 北條氏も一時は盛んであつたが、元寇の時の軍費、それから引きつゞいての國防費が多く、次第に、財政が苦しくなつた。また一族の間に、争もあつて、政がみだれ、執權高時の時には、漸く衰へた。この頃朝廷では後醍醐天皇第六十九代の御代である。

#### 元弘の變

#### 後醍醐天皇

は、非常の英主にましく、たから、國體のまゝに、皇室で、政を行ふ御考があり、後鳥羽上皇の御志をつぎ、北條氏を滅ぼさうとなさ

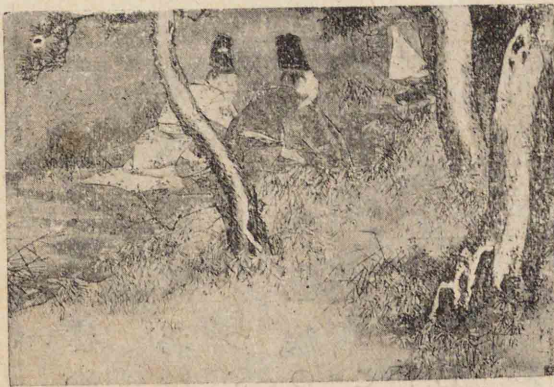




笠置遷幸  
凡百餘年前

楠木正成  
勤王

隱岐遷幸



後醍醐天皇が笠置山を落ちたこと

れた。然るに、まだ、御準備の出来ないうちに、北條氏の兵が京都に押寄せたので、元弘元年、俄に笠置山京都府相楽郡笠置村に幸し、詔を傳へて勤王の兵を召された。そこで河内の豪族楠木正成は、兵を金剛山の麓なる赤坂城大阪府南河内郡千早村に擧げ、諸國の武士も、行在所に集まつた。まもなく北條氏の大軍は、官軍を破り、天皇を、隱岐に遷しまゐらせるやうな大罪を犯した。世に元弘の變といふ。

天皇は、笠置山を御出ましになり、赤坂城へ行幸なされたが、途中の御難儀は、一とほりでない。しばらく木陰に御休みになつたをり、さして行く笠置の山を出でしよりあめが下にはかくれがもなし

楠木正成  
千早籠城  
護良親王の  
令旨

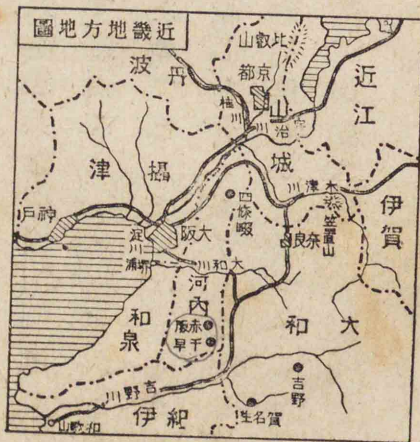
赤松則村  
池武時の勤  
王

伯耆遷幸  
凡百餘年前  
勤王  
名和長年の

と御製をあそばされた。恐多い限りである。それからまもなく、隱岐へ御遷りになつた。

**勤王の諸將** 楠木正成は、その後、赤坂城から、金剛山に移り、山腹に、千早城を築いて、北條氏の軍を破り、天皇の御子護良親王も、大和吉野奈良縣吉野郡吉野村の山中にたてこもり、令旨を傳へて、勤王の兵を招かれた。されば播磨の豪族赤松則村、肥後の豪族菊池武時をはじめ、勤王の兵を擧げるものが多い。

**北條氏の滅亡** 元弘三年、天皇は、諸國に勤王の兵のおこつたことを聞召され、隱岐から、伯耆に幸せられたので、同地の豪族名和長年が、天皇を奉じ、兵を船上山鳥取縣東伯耆郡に擧げた。この時赤松





足利尊氏の  
反應

兩六波羅の  
滅亡

新田義貞の  
勤王

北條氏の滅  
亡

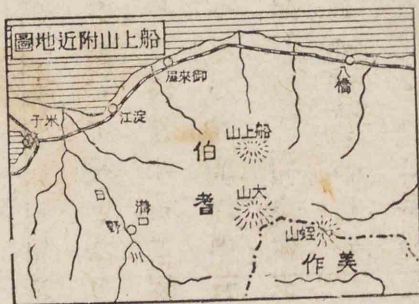
鎌倉幕府の  
滅亡

京都還幸



名和長年

新田義貞も、義兵を擧げて、鎌倉を攻入つたので、高時は自殺し、北條氏も、鎌倉幕府も滅んだ。源頼朝が、幕府を開いて



則村は、京都へ押寄せてゐる。高時は驚いて、下野の豪族足利尊氏をして討たしめたが、尊氏は途中から心を改め、則村と力をあはせて、兩六波羅を滅ぼし、京都を回復した。同じ頃、上野の豪族

から、百四十二年めである。

王政復古 京都が回復したので、天皇は、伯耆から、京都へ御歸りになつたが、その途中で、幕府の滅んだことを聞召された。こ

天皇の親政

記録所の政

護良親王の  
征夷大將軍  
就任

功臣の國司  
守護任命

成良親王の  
關東鎮守

義良親王の  
奥羽鎮守

建武中興  
凡六百餘年前

正しい國體  
の姿  
中興政治の  
敗因



後醍醐天皇

の時、天皇は、國體のまま、に御みづから政を行はれたのである。

中興の御政治

天皇は、記録所において、政務を御裁決になり、護良親王を征夷大將軍に任じて、軍務を御まかせになつた。ま

た地方には、正成、義貞、長年、尊氏などの功臣が、國司、守護となり、皇子成良親王は、鎌倉にゐて、關東をしづめたまひ、尊氏の弟直義がこれを輔け、皇子義良親王は、陸奥の國府宮城郡宮城村にゐて、奥羽をしづめたまひ、公家の北

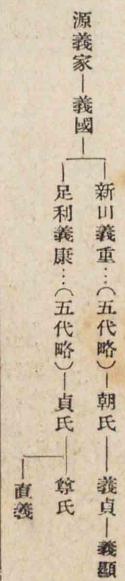
畠顯家がこれを輔けた。その翌年、建武と改元せられたので、世に建武中興といふ。これでこそ、正しい國體の姿である。たゞ残念なことには、天皇を御輔け申して、この大事業を爲しとげる



足利尊氏の  
勢力

だけの人物がゐない。その上、尊氏の勢が強くなつて、思召のと  
ほらないことが多く、折角の建武中興も、永くは、つゞかなかつた。  
／＼足利尊氏の謀叛 新  
田、足利の兩氏は、源義家  
の後で、關東の名族であ

〔新田足利分立系圖〕



足利尊氏の  
野心

護良親王の  
御遭難

足利尊氏の  
擧兵  
凡六百餘年前



宮前橋木正成銅像

を除かうとなされたが、かへつて、その讒言により、鎌倉に押込め  
られ、直義の爲めに弑せられた。ついで尊氏は、鎌倉に據り、みづ  
から征夷大將軍と稱して、兵を擧げた。建武二年のことである。

かくして建武中興の政がやぶれた。

湊川の戦 尊氏は、それから、まもなく、京都に押寄せた。正成、

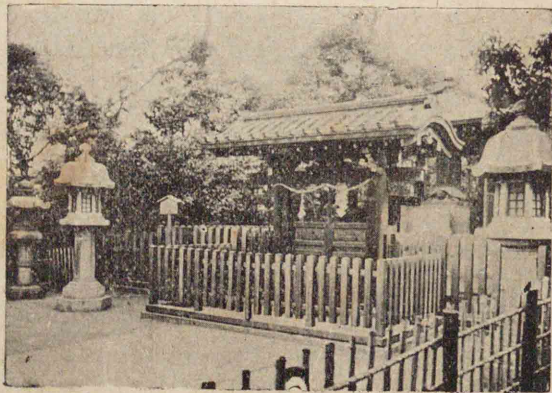
足利尊氏の  
西走

足利尊氏の  
大擧東上

凡六百餘年前

楠木正成の  
殉節  
足利尊氏の  
京都入京  
名和長年の  
殉節

義貞、顯家が、力をあはせて、これを破つ  
たので、九州に走り、延元元年に、再び勢  
をもちかへし、大軍を率ゐて、京都に攻  
入らうとした。義貞、正成は、攝津の兵  
庫市<sup>神戸</sup>でこれを防いだ、義貞まづ敗  
れて京都に歸り、正成も湊川市<sup>神戸</sup>で戦  
死した。尊氏は、遂に京都を奪ひ、天皇  
は、延暦寺に幸し、名和長年は、戦死した。  
しかし朝敵となつては、人々が服しな  
いから、この時尊氏は、後伏見天皇<sup>第九十</sup>の皇子豊仁親王を立て  
て、天皇と稱し奉つた。光明院と申上げる。



楠木正成墓(湊川神社境内)



楠木正成  
の精忠

その感化  
水戸光圀  
の延碑

正成が千早城に據つて、北條氏の大軍を支へ、遂に屈しないので、これにはげまされて、勤王の義軍が各地におこつた。義貞の舉兵がそれであり、尊氏の反應がそれである。勤王の諸將の中でも、正成の功を第一としなければならぬ。ことにそれから湊川の戦死に至るまで、五ヶ年の間身を忘れ、家を忘れ、命を捨て、御國の爲めに盡くし、一族子弟もまた、國難に殉じてゐる。されば忠臣の模範として慕ふものが多く、江戸時代になつて、水戸光圀は、湊川の墓を修理して、嗚呼忠臣楠子之墓の碑を建て、幕末勤王の士は、正成の心を心として、御國の爲めに盡くした。明治の御代に湊川神社を造營せられたのも、その精忠を嘉したまへるからであらう。

## 第二章 吉野の朝廷

吉野の皇居 尊氏は、その後、いつはつて降を請ひ、天皇が、これを許されて、京都に御歸りになると、すぐに押込めまゐらせた。まもなく天皇は、そこを遁れて、大和の吉野に幸し、回復のことを圖られたのである。皇居が、吉野にあるから、世に吉野の朝廷と

吉野御遷幸  
凡六百餘年前

吉野の朝廷

吉野時代

越前の官軍

陸奥の官軍

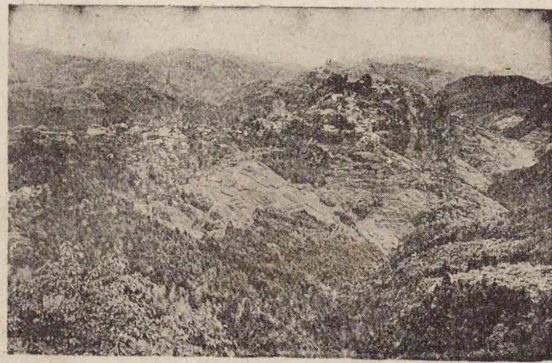
九州の官軍

尊良親王の御  
殉節

新田義貞父  
子北畠顯家  
の殉節  
北畠親房の  
京國下向

いひ、また後龜山天皇第九十代まで、四代、五十七年の間、概ねここに御住居になつた。その間を、世に吉野時代といふ。

朝敵征伐 吉野遷幸の前後に、皇太子恒良親王、皇子尊良親王は、新田義貞、義顯父子を従へて、越前に赴きたまひ、皇子義良親王は、北畠顯家を従へて、陸奥に歸りたまひ、皇子懷良親王は、征西將軍となつて、九州に下りたまひ、互に連絡をとり、朝敵征伐のことに、御力を盡くされた。然るに尊良親王は、義顯とともに戦死せられ、恒良親王は、毒殺せられ、義貞も、顯家も、戦死し、義良親王は、吉野に歸りたまふなど、官軍が振はない。ついで顯家の父親房は、常陸に赴き、東國地方



吉野山全景



凡六百年程前

後村上天皇の御即位

北畠親房の神皇正統記

官軍の形勢

楠木正行の殉節

北畠親房の薨去

を従へようとしたが、思ふやうにならなかつた。

後醍醐天皇の崩御 (紀元一九九九年) かやうに官軍の振はない時、延元四年、天

皇は、御病にかゝりたまひ、朝敵を滅ぼし、四海を泰平ならしめよとの御言葉を残されて、御かくれになり、義良親王が御位に即か

れた。後村上天皇 第七代 と申上げる。

官軍の不振 親房は、常陸の陣中で、神皇正

統記を著はし、吉野の朝廷が、正統の天皇にま

しますことを明かにしたが、ついで吉野に歸

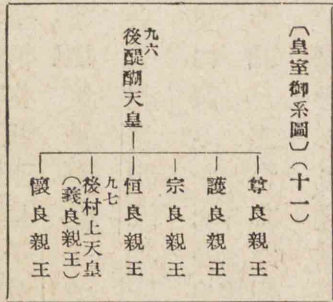
つた。この頃、楠木正成の子正行は、河内にゐ

て、皇居を護り、遠江には、征東將軍宗長親王、陸

奥には、顯家の弟鎮守府將軍顯信、九州には、征西將軍懷良將軍が、

官軍を率ゐてゐられる。然るに、正行が、河内の四條畷 大阪府北河内郡

で戦死し、ついで親房も薨じてから、官軍は、ますます振はない。



國體意識の衰頹 國士の典型たる勤王の人々

嚴然たる吉野の朝廷

諸國の武士には、わが國の歴史を忘れ、賊軍に味方するものが、多かつたからである。これに比べて、楠木正成、新田義貞をはじめ、

勤王の爲めに盡くした人々こそ、誠に

國を愛し、君に忠なるものといはな

ればならない。

君の爲め世の爲め何かをしからむ捨て、かひ

ある命なりせば 宗良親王

かへらじとかねて思へば、梓弓 なまき かずに入る 楠木正行

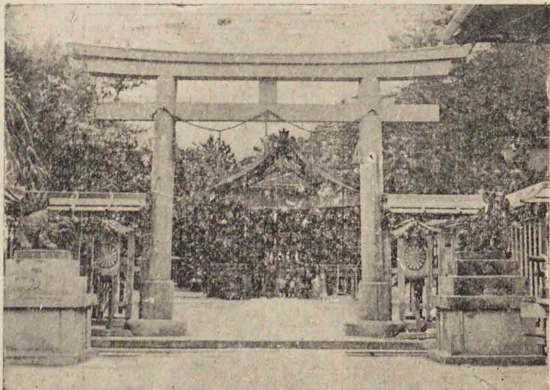
天下一統 吉野の朝廷では、官軍が

振はなくなつてからも、三種の神器を

奉じて、少しも、皇室の御威嚴をそこな

はれない。尊氏の孫義満も、皇室に、手向ふのを、恐多く思ひ、後龜

山天皇の時、京都に御歸りになることを御願した。天皇は、後村



楠木正行を行なれる四條畷神社(大阪府北河内郡四條村)



後龜山天皇の御還幸  
凡五百四十餘  
年前

日本精神の  
表現

上天皇の御子、長慶天皇第九十代の御弟である。長い間の戦争で、國民の苦しんでゐるのを、御心配のあまり、その願を許され、元中(紀元二〇五二年)九年京都に歸りたまひ、神器を後小松天皇第一百代に御傳へになつた。後醍醐天皇が、吉野に遷られてから、五十七年めである。

〔皇室御系圖〕(十二)  
九七 後村上天皇 — 長慶天皇

九八 後龜山天皇

九三 後伏見天皇 — 光嚴院 — 後光嚴院

一〇〇 後圓融院 — 後小松天皇 — 稱光天皇

國體の尊嚴

吉野の朝廷は、賊軍を避

けて、不便な山中にゐられ

たが、御歴代の天皇は、少し

も御いとひがなく、國民の幸福ばかりを、御心配あらせられた。

義満が、後龜山天皇の御還幸を御願したのを見ても、國體の尊い

ことが分る。また勤王諸將の行も、日本精神の現れとして、いつ

までも輝いてゐる。

〔足利氏系圖〕(一)  
尊氏 — 義隆 — 義満

## 第六編 室町時代

### 第一章 内治外交

足利義満の  
幕府再興

室町幕府

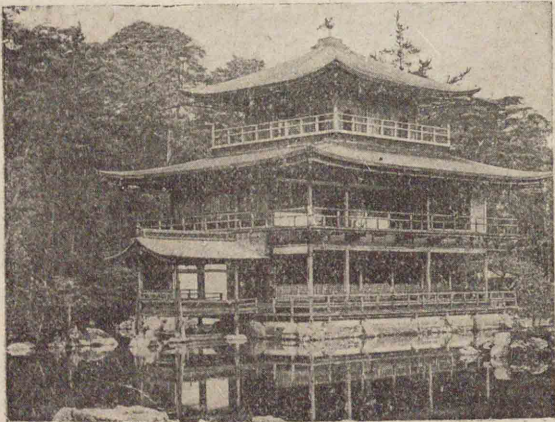
室町時代

北山の別荘  
凡五百四十餘  
年前

管領

室町幕府 足利義満は、後龜山天皇京都還幸の後、征夷大將軍として、再び幕府をおこした。京都の室町にゐたので、世に室町幕府といひ、また幕府の滅びるまでの間を室町時代といふ。晩年には、別荘を北山につくつて、住つてゐた。名高い金閣は、この別荘の内にある。

幕府の組織 將軍の下に、管領が



金閣(京都市)







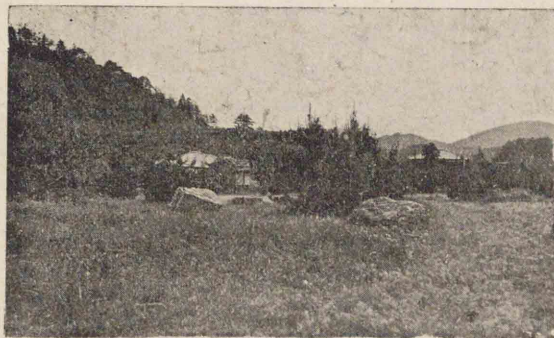
鎌倉管領の再興  
凡四百九十年

古河公方

堀越公方

關東の分裂

關東地方の亂 永享の亂後、幕府は、足利持氏の子成氏を鎌倉管領とした。(紀元二一〇九年)まもなく、成氏は、その臣上杉氏に逐はれて、下總の古河古河縣古河町に移り、義政の弟政知が、上杉氏に迎へられ、京都から、伊豆の堀越田靜岡縣田方郡堀越に來た。成氏を古河公方、政知を堀越公方といふ。これから、關東の豪族は、古河公方に味方するものと、堀越公方に味方するものとの二つに分れ、關東の地方がみだれた。



堀越公方の屋敷跡



關東地方地圖

應仁の亂 この頃、幕府では、細川勝元、

十三万

細川勝元山名宗全の争  
凡四百七十年

十一箇年の長期戦争

山名宗全が、最も勢力があり、互に権力を争つてゐる。諸國の豪族にも、それ〴〵、味方するものが多い。かくて後土御門天皇百三十三代の應仁元年、勝元、宗全は、おの〴〵、その仲間を集め、敵味方三十萬に近い大軍が、京都の内外で、戦をはじめた。ついで勝元、宗全が死んだけれども、戦は、やまない。前後十一箇年もつゞいてゐる。世に應仁の亂といふ。これが爲めに、京都の町は、焼けたところが多く、一時全く荒れはて、見るかげもなく、日本全國も、またみだれた。



細川勝元

支那との關係 かやうに、國內は、みだれたけれども、外國との關係は、割合に親密である。支那とは、元寇の時から、交がない。



元の滅亡  
明の勃興  
凡五百七十年  
明との交通  
貿易  
凡五百三十餘  
年前

支那貿易の  
發達  
明文化の傳  
來

高麗の滅亡  
朝鮮の勃興  
凡五百四十餘  
年前

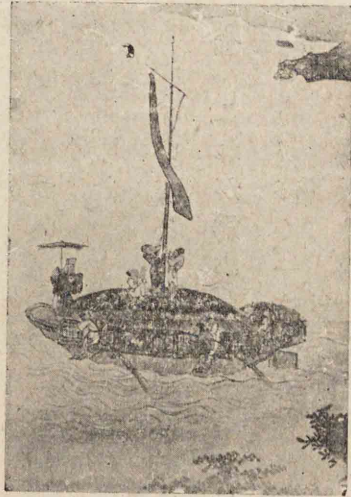
朝鮮との交  
通貿易

支那朝鮮へ  
の進出

海外進出の  
勢

東山の別荘  
銀閣  
足利義政の  
風流

吉野時代になつて、元が滅び、明がおこつた。その後、明と交を結  
び、貿易をも開いたのは、義滿の時である。義滿は、貿易の利益に  
あこがれて、國體をみだり、明から、日本國王と書いた國書を受取  
り、みづからも、明に對して臣と  
稱した。日本人として、あるま  
じき行である。さればその子  
義持は、これを恥ぢて、明と交を  
絶つたけれども、次の義教の時  
に、また、もとのやうになつた。



船明遣

しかし、交通貿易は、次第に盛んになり、明の文化も、傳はつたので  
ある。

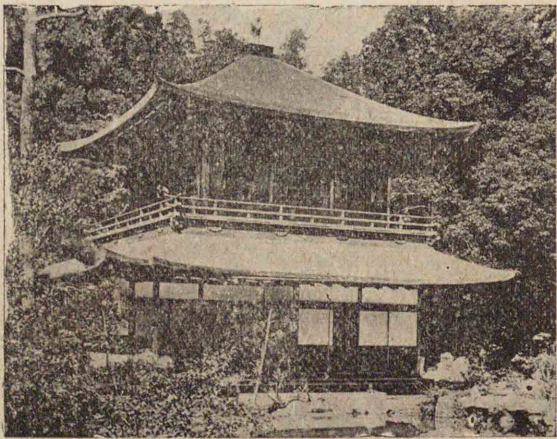
朝鮮との關係 高麗は、内亂の爲めに滅び、朝鮮がおこつたの  
は、室町時代のはじめである。義滿は、朝鮮とも交を結び、貿易を

も開いた。その後、使が、互に往來して、漸く親密になつた。

國民の海外發展 四國、中國、九州邊のものは、鎌倉時代の末か  
ら、支那、朝鮮に出かけて、貿易するも  
のが多い。室町時代には、ます、  
盛んになつた。國民の海外に進出  
するのは、これからである。

## 第二章 東山時代の文化

東山時代 足利義政は、應仁の亂  
があり、世の中も、さわがしくなつた  
けれども、心にかけないで、奢を極めた。隱居の後、別荘を東山に  
つくり、美術、工藝を愛し、茶の湯、生花を好んで、これを保護してゐ



(市都京)閣銀



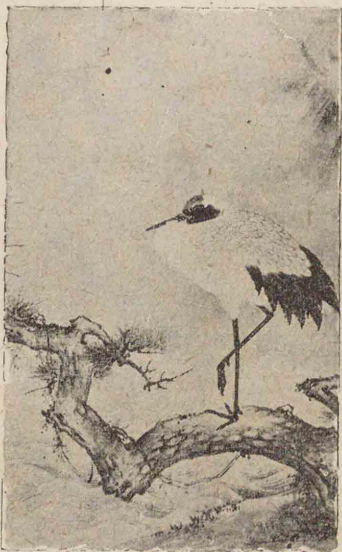
美術工藝の  
保護  
東山時代  
新文化の發  
生

繪畫

る。名高い銀閣は、この別荘の内にある。世に義政の頃を東山時代といふ。また明の文化も傳はり、こゝに、新しい藝術と文學とがおこつた。

美術工藝 繪畫には、佛畫

に長じた明兆、山水に長じた周文、雪舟があり、支那の畫風を取入れてゐる。また土佐

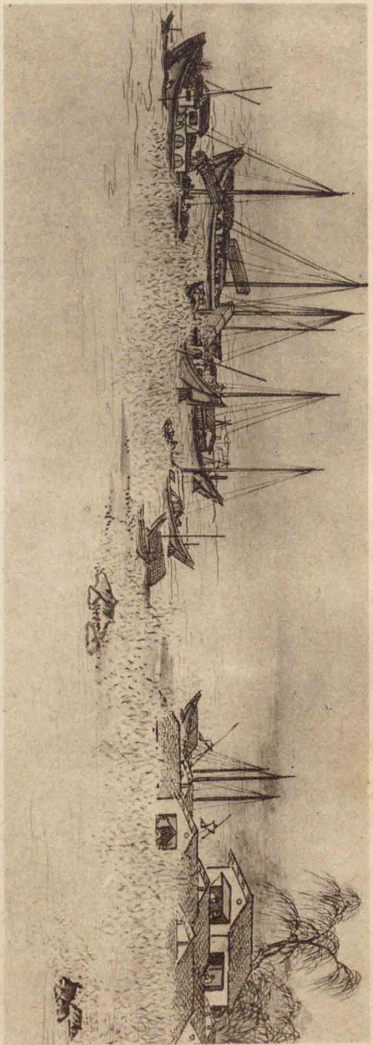


狩野元信筆松上鶴

光信が出て、土佐繪が盛んになり、狩野元信は、狩野派を開いた。金屬彫刻には、名工後藤祐乘がある。陶器では、伊萬里燒、唐津燒が名高く、漆器、蒔繪も進んで、支那に輸出するまでになつた。

文學 この時代に、新しくおこつたのが、謡曲文であり、盛んになつたのが連歌である。連歌は、二人、または、二人以上で、和歌

室町時代美術



山水筆舟雪



で、逆に明に傳へられるのは、いと歩獨今古はてつ至に水山、くた所るざせく能るけ於に繪の舟雪、るな健朝の力筆、もき如の圖本。たつあで景風の那交ね概所す寫、で、のたし、疾親に水山のそ、るゐて、れはらあが目面の舟雪く能、るた然整の置布



室町時代の生活



狩野永頼筆 高尾観楓圖

、がるみてつ寄近に代現どほよが装服。のもたい畫を見葉紅の尾高都京  
りなく長の袖。るあでうやの紐、でのもるす稱と帶屋古名は帶。い短は袖  
行流が湯の茶。るあでとこの後以期中代時戸江、はのるなく廣の巾の帶  
。るんでん飲を茶らがなち立が客お、りあが人商行に傍路、でのたし  
(期末の代時町室)



東原ヨリ西此に言ふは

一條兼良の  
博學  
僧侶の詩文  
和歌  
太田道灌の

禪宗

法華宗  
一向宗

本願寺

神佛の信仰  
家屋  
書院造

の上の句と、下の句とを、幾度かくりかへして、つゞけるもの、謠曲  
文は、能の時に謠ふ文句である。學問は、すたれたけれども、公家  
の一條兼良が、その頃の學者といはれ、僧侶の内には、詩文を能く  
するものが多い。武人では、太田道灌が、歌人として有名である。  
わが庵は松原つゞき海近く富士の高嶺を軒端に見る  
太田道灌



信仰 禪宗は、おもに武士の間  
太に行はれ、夢窓、石菴、一休、純宗などの名  
僧がある。法華宗、一向宗は、武士  
道にも、庶民にも信ぜられた。一向  
宗の本願寺の盛んになるのも、こ  
れからである。

日常生活 神佛を信ずることは、をしなべて厚く、家屋には、禪  
宗の寺の風をまねて、玄關、床の間などを設けた書院造がつくら



能狂言  
茶の湯生花  
士民の氣風

れ、また能、狂言、茶の湯生花が流行した。されば人々の氣風も、どことなく、ゆつたりした、やさしいところがある。東山時代の文化は、こうした氣風の間からおこつた。

### 第三章 戰國時代

英雄豪傑の  
興起

#### 戰國時代

應仁の亂後、幕府は、全く衰へて、日本國中がみだれ、

英雄豪傑が各地におこり、戰爭のやま

北ないこと、百餘年に及んだ。その間を、

條世に、戰國時代といふ。

早 群雄割據 はじめ關東のみだれた

雲 時、伊勢の人北條早雲 長伊勢 は、堀越公方 (紀元二二五年)

を滅ぼし、ついで相模の小田原 縣神奈川

町原に據つた。これから、あちらでも、こちらでも、はげしい勢力の



北條早雲  
凡四百四十餘  
年前

實力の競争

關東地方  
北條氏康

争があり、弱いものは滅び、少數の英雄、豪傑が、各地に富み榮えた。關東地方 早雲の孫、氏康が、古河公方を滅ぼして、關東の大部分を平げた。

中部地方

今川義元

武田信玄

上杉謙信

織田信長

徳川家康

中國地方

大内義隆

毛利元就



中部地方 駿河の今川義元、甲斐の武田信玄、越後の上杉謙信、虎輝の勢が強く、尾張の織田信長、三河の徳川家康もあるが、まだ盛んでない。中國地方 はじめ周防の大内義隆が、盛んであつたが、後に安藝の毛

利元就がこれに代り、中國の大部分を平げた。

四國地方

長宗我部元親

九州地方

島津義久

四國地方 土佐の長宗我部元親が、四國の大部分を平げた。九州地方 薩摩の島津義久が盛んであり、その附近を従へて

ある。



畿内及び近畿地方

松平久秀

淺井氏  
朝倉氏

豪族の御料地横領

國民愛撫の大御心

後花園天皇の御聖徳

後奈良天皇の御聖徳

畿内及び近畿地方 京都では幕府の勢が次第に衰へて、遂に松永久秀が権力を振ひ、將軍義輝をも弑した。また近畿地方には、近江の淺井氏、越前の朝倉氏がある。



上から、皇室の御料地も、概ね豪族が横領した。この時ほど、皇室の衰へられた時はない。皇室の衰へられた時は、わが國の衰へた時である。

皇室の御仁慈 皇室が衰へられ

ても、御歴代の、民を慈みたまふことは、御かはりがない。後花園天皇<sup>第百</sup>は、將軍義政が、政を怠る不心得を戒められ、後奈良天皇<sup>第百</sup>は、疫病流行のをり、御みづから經文を御寫しになり、名高い神社と、寺とに納めて、國民の平和を御祈りになつてゐる。どう

かして、安らかに、この世を治めたいといふのが、御歴代の、大御心であつた。

いかにせば、月日と同じ心にて、雲の上より世を照らさまし  
今の世を、神にまかせて、石清水再び澄まむか、げをこそまて

後柏原天皇  
後奈良天皇

皇室の御稜威 かやうな大御心に



武 感泣して、皇室を奉じ、みだれた世の中を平定しようとしたのが、大内義隆、毛利元就、今川義元、武田信玄、上杉謙信である。また義隆、元就、謙信などは、朝廷の御入費をも獻じた。世の中のみだ

れた時、いつでも、人心が、皇室に向ふのは、わが國體の精華である。

國體の精華

豪族の獻金

豪族の皇室奉戴

後柏原天皇の御製  
後奈良天皇の御製

〔皇室御系圖〕(十三)  
後伏見天皇—光嚴院—崇光院—榮仁親王—貞成親王—後花園天皇—後土御門天皇—後柏原天皇—後奈良天皇



第四章 革新の機運

新文化發達の端緒

都市の發達

政治の中心

文學藝術の發達

時勢の推移 英雄といはれる人々が、皇室をいたゞいて、太平を開かうとした頃から、世の中の、移りかはつて行く兆が、次第にあらはれた。されば、新しい文化も、漸くおこりかけてゐる。

政治上の文化 諸國の英雄は、民政にも、心を用ゐたから、これに慕つて、集まつて来るものも多く、

大小の都市が、國々に出來て、政治の中心地となつた。中にも大内氏の周防山口、山口市北條氏の相模小田原が、繁華である。また文學、藝術のたしなみもあり、おのづから、その發達をも助けた。

本同施敷於世光飾  
藝苑潤色詞林則所  
謂徑寸之珠不失寶  
於其形之小者也矣  
皆天文八年己亥春  
三月日 藤原義隆書

(大内隆義の出版した書籍)

産業の發達の中心としての都市

經濟上の文化 大小の都市は、商工業の中心地でもあつた。中にも、山口は、支那、朝鮮の貿易によつて榮え、小田原の商業も盛んである。また上杉謙信、武田信玄は、鑛業にも力を入れた。この頃から、わが國の産業が、進んだのである。

西洋文化の傳來  
凡三百九餘年前

小銃大砲の流布  
戰術及び築城法の變化

歐洲人の渡來 新しい文化のおこりかけてゐる時、これを助けたのが、歐洲人の渡來である。後奈良天皇の天文十二年、(紀元二二〇三年)葡萄牙の商船が、大隅の種子島鹿兒島縣熊毛郡に漂着した。葡萄牙との貿易は、この時から開け、西洋の文化が、傳はるやうになつた。



鐵砲の傳來 葡萄牙の商船は、この時、はじめて小銃を傳へ、ついで大砲をも傳へた。小銃、大砲は、まもなく世上に弘まり、戰術



宣教師ザヴィエルの渡  
来  
凡三百九十餘  
年

天主教

キリシタン  
宗

社會統一の  
任務に就い  
た人々

や、城のつくりかたも、かはるやうになつた。

耶蘇教の傳來 （紀元二二〇九年） その後、天文十八年宣教師ザヴィエルが、薩摩

の鹿兒島 鹿兒島市 に來て、耶蘇教を傳へ、これを信ずるものが多い。

九州を主として、次第に各地方に

も弘まつた。世に天主教、または、

キリシタン宗といふ。

社會統一の姿 世の中の、かは

るすがたは、内からも、外からも開

けた。もはや、社會も、統一せられ

なければならぬ。そこで、織田

信長、豊臣秀吉、徳川家康が、つぎ／＼に、その仕事を爲し、遂げたのである。



ザヴィエル

### 第七編 安土桃山時代

#### 第一章 皇室を中心とする社會統一

織田信長の  
勃興

桶狭間の戦  
凡三百七十餘  
年前

正親町天皇  
の内勅  
凡三百七十餘  
年前

畿内平定  
御料地の回  
復  
皇居の修理  
御儀式の再  
興  
足利義昭の  
將軍就職

織田信長の尊王 織田信長は、はじめ、さほどの豪族でもなか

つたが、永祿三年桶狭間 愛知縣知多郡 の戦に、今川義元を斬つてから、俄

に、その勢が強くなつた。正親町天皇 第六代 は、これを聞召し、勅使

を下して、御料地の回復を命ぜられた。信長は、非常にありがた

く思ひ、をりから信長をたよつて來た將軍義輝の弟義昭を伴ひ、

永祿十一年入京して、松永久秀を降し、畿内の地方をも平げ、御料

地を定め、皇居を修理し、御儀式を再興し、公家の領地を取りもど

すなど、皇室を尊んだことが多い。

足利氏の滅亡 信長は、上京の後、奏請して、義昭を將軍とした。

天子に申し上げ  
御願すること



室町幕府の滅亡  
凡三百六十餘年前  
信長皇室を奉じて政を行ふ  
安土築城

安土時代

近畿平定

武田氏の滅亡  
凡三百五十餘年前

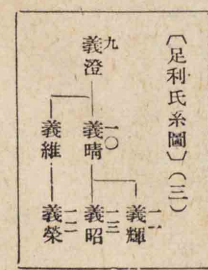
中國征伐

然るに義昭は、信長をねたむやうになつたので、遂に信長に逐はれ、室町幕府が滅んだ。(天正元年のことである。これから信長が、皇室を奉じて、政を行ひ、城を安土(紀元二二三三年)滋賀縣蒲生に築き、ついで右大臣に任ぜられた。信長が、政を行つてゐる間を、世に安土時代といふ。



織田信長

信長の事業 信長は、畿内を定め、てから、近畿地方をも平げ、ついで徳川家康とともに、武田信玄の子勝頼を滅ぼし、また部將羽柴秀吉をして、毛利元就の孫輝元を討たしめた。(紀元二二四二年)秀吉は、進んで、備中の高松城(岡山縣吉備郡)を圍んでゐるをりに、本能寺の變がおこつた。  
本能寺の變 この時、信長は、中國まで出か



織田信長の遺難  
凡三百五十餘年前

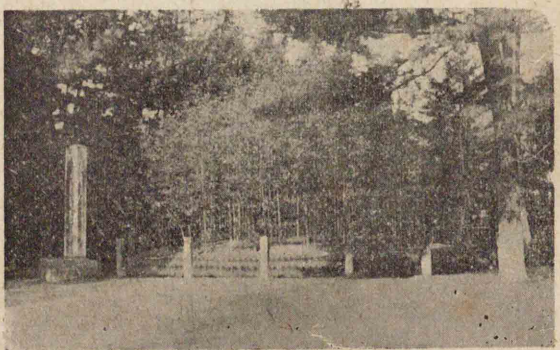
明智光秀の誅伏

織田信雄、信孝及び柴田勝家との争

長久手の戦  
凡三百五十餘年前

けて、秀吉を助ける考から、天正十年京都の本能寺に入つた。たまたま部將明智光秀が俄に叛いて、本能寺を襲ひ、信長を弑した。世に本能寺の變といふ。漸く出來かけてゐた國內の統一も、これが爲めに中止せられた。

秀吉の事業 秀吉は、本能寺の變を聞くと、すぐに、毛利氏と和して、備中から引きかへし、光秀を山城の山崎(京都府乙訓郡大山崎村)に誅した。これから秀吉の勢が俄に強く、信長の子信雄、信孝、織田氏の老臣柴田勝家との争がおこり、遂に、信孝、勝家を滅ばしたので、信雄は、援を徳川家康に求めた。家康は、この頃、有力の豪族となつてゐる。信雄を助けて、天正十一年秀吉の兵を長久



豊臣秀吉の誕生地(名古屋中村公園)



徳川家康の服従

四國の平定

九州の平定

東國の平定

北陸奥羽の平定

五奉行

五大老

租税貨幣

豪族の配置

手<sup>愛知縣知多</sup>郡長久手村多に破つた。しかし秀吉は、まもなく和睦して、家康をも従へたのである。

秀吉の統一 秀吉は、家康を従へてから後、長宗我部元親を討

つて、四國を定め、島津義久を討つて、九州を定め、相模の北條氏を滅ぼして、東

國を定め、また越後の上杉景勝、陸奥の伊達政宗をも従へて、ほゞ國內を統一

した。

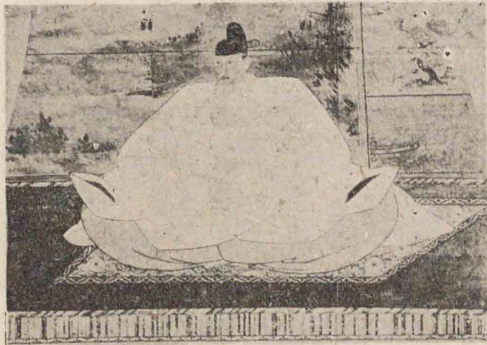
秀吉の政治 秀吉は、五人の奉行を

おいて、政を行はしめ、五人の大老をお

いて、大事を議せしめた。また全國の

田を調べて、租税を定め、大判、小判を鑄て、貨幣の制度をと、の

へ、京都の市街をも整理し、自分の家來を、要所において、豪族に備



大阪築城  
凡三百五十餘  
年前

伏見築城

桃山時代

關白就職  
凡三百五十餘  
年前  
太政大臣就  
任  
豊臣氏

へるなど、細な注意をしてゐる。

大阪伏見の築城

天正十一年秀吉は、城を大阪に築いて、こゝ

に住ひ、皇室を奉じて、四方に號令した。これから豪族も、屋敷を

おき、諸國の商人も集まり、今日の

大阪市のもとをつくつた。その

後、山城の伏見京都市の一部にも城を築

き、晩年は、こゝに住つてゐた。伏

見城のあるところは、桃山とも呼

ばれるので、世に秀吉の頃を、桃山

時代といふ。

秀吉の尊王

秀吉は、天正十三年關白となり、ついで太政大臣

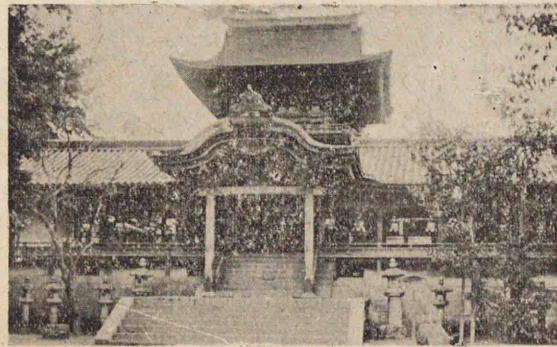
に任ぜられ、豊臣の氏をも賜はつた。尊王の心が厚く、皇居の造

營をはじめ、京都に聚樂第を建て、同十六年後陽成天皇第七百の



城阪大の代現るせ興復





石清水八幡宮

行幸を仰ぎ、數日の間、和歌音樂の會を催して、叡慮を慰め奉り、御料地と、公家の領地とを定め、また豪族をして、皇室に忠誠を盡

くすことをも、誓はしめてゐる。

**信長秀吉の敬神** 信長は、敬神の心

が厚く、石清水八幡宮京都府綴喜郡を造營した。また費用を惜しまず、内宮外宮をも造營しようとしたが、本能寺の變で、中止になつたので、秀吉が、その志をついて、兩宮を造營した。

**皇室の御稜威** 信長も、尊王

の心が厚いので、源氏、足利氏のやうに、幕府を開かうとはしない。朝廷の大臣として、政を行つてゐる。

また二人が、前後して、國內を統一したのは、皇室を奉じたからである。皇室の御稜威がなければ、あれだけの仕事は出来ない。そこに尊い國體が、かゞやいてゐる。

秀吉の妻は、杉原氏名は彌ナカ秀吉がまだ貧しい頃に嫁ぎ、永い間苦樂をともし、内助の功が多い。秀吉が偉くなつたのも、半は、その力である。温良貞淑、慈みの心も深いので、諸將もよくその徳になつた。されば、秀吉も、これを重んじ、情愛も、また、こまやかである。後に北政所と呼ばれ、世上から尊敬せられた。出家して高臺院といふ。



秀吉の妻 (高臺院)

## 第二章 海外發展

**國民の遠征** 正親町天皇の天正八年(紀元二二四〇年)、西班牙の商船が、肥前の平戸長崎縣北松浦郡平戸町に來て、貿易を開いた。本能寺の變の二年前であ



外國貿易の發達

朱印船

凡三百四十餘年前

連戰連勝

明との講和條件

明の遠約

る。この頃から、外國貿易が盛んになり、わが商人も、支那、印度、南洋の地方に出かけるものが多い。秀吉は、商人に、朱印を捺した渡海の免許状を授けた。その船を朱印船といふ。

文祿の役

秀吉は、大陸發展の志があり、明を従へようとして、

その手引を朝鮮に求めたが、承知しない。そこで文祿元年加藤

清正、小西行長を先鋒とし、宇喜多秀家を總大將として、まづ朝鮮

を討たしめたのである。わが軍は、いつも戦に勝ち、首府京城を

陥れ、國王を走らし、二王子を捕へ、明の援軍をも破つた。明は、恐

れて和を求めたから、明と貿易を開き、朝鮮の半分を、日本領とす

ることを條件として、これを許した。戦國時代以後、明と表向き

の交通貿易が、絶えてゐたからである。世に文祿の役といふ。

慶長の役

その後、明では、約束を守らない。またその使が、大

阪に來た時、秀吉におくつた國書に、爾を封じて、日本國王と爲す

秀吉の薨去

加藤清正と朝鮮の二王子

捕虜の價付

日本人の博愛

と書いてあつた。秀吉は、大に怒り、使を逐ひ歸し、慶長二年(紀元二二五七年)小早川秀秋を總大將として、再び朝鮮を討たしめた。然るにその翌年、秀吉が薨じたので、出征部隊も引揚げたのである。世に慶長の役といふ。

わが國民性

文祿の役に、二王子

を捕へたのは、加藤清正である。清

正は、約一箇年の間、二王子をあづか

つて、これをいたはつた。二王子は、

清正の恩に感じ、和睦が出來て、國に

歸る時、永くその恩を忘れないことを記した禮狀を、清正におく

つてゐる。この外、多數の捕虜も、わが國では優待して、これをお

くり返し、歸國を好まないものは、清正その他の諸將に仕へ、或は

職業を求めて、平和の生活をした。敵を愛する美はしい心は、こ



加藤清正



の時に、よくあらはれてゐる。

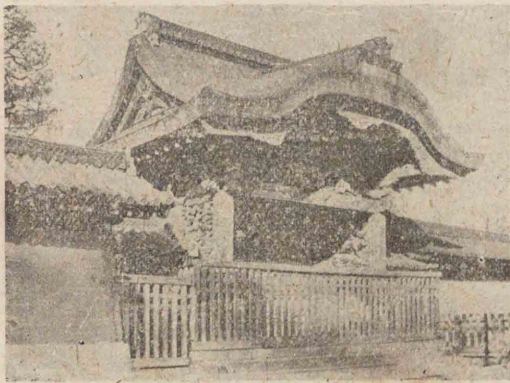
### 第三章 安土桃山時代の文化

風雅のたし  
なみ

士民の氣風 この頃にも、士民の間には、風雅のたしなみがあり、茶の湯連歌などが流行した。また世の中には、新しいものが、おこらうとしてゐるから、あふれるばかりの元氣があり、伸びようとする力が強い。この氣風は、文化の上にも、あらはれてゐる。

#### 美術工藝 建築には、秀吉の建てた

大阪城、伏見城、聚樂第が、壯麗を極め、繪畫には、狩野永徳、狩野山樂、海北友松が、狩野派を大成し、豪放の構



(門の城見伏舊) 門唐寺願本西

繪畫 建築

衣服の模様

日用の器具

陶器

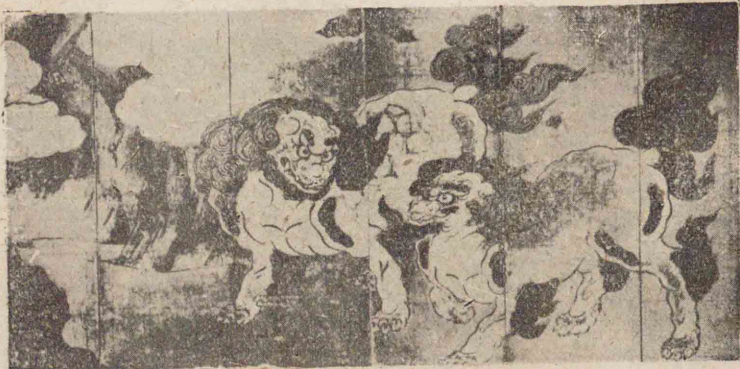
圖に、その特色をあらはし、衣服の模様、日用の器具にも、やはり華麗雄大の風があつた。また朝鮮の捕虜には、陶器の製造に長じたものがあり、わが國に歸化して、その業を開き、新しい製法を傳へた。

#### 文學 儒學は、久しく衰へてゐたが、

藤原惺窩が出てから、漸くおこりかけた。その門人には、林羅山をはじめ、すぐれた學者が多い。活字印刷の法も、この頃、朝鮮から傳はつてゐる。

#### 信仰(其一) 神を敬ふことは、かほり

がない。佛教では、禪宗、淨土宗が、武士の間に行はれてゐる。



子獅唐筆徳永野狩

敬神 佛教

活字印刷の始

儒學復興の端緒



寺院の兵力  
その破壊

耶蘇教

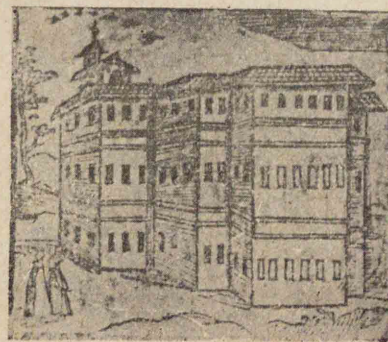
九州豪族の  
羅馬遣使

宣教師等に  
對する疑

向宗、法華宗は、民間に行はれ、武士にも、信ずるものが多い。この頃大きな寺では、兵士を養ひ、世の中をさわがしたので、信長は近江の延暦寺を焼拂ひ、秀吉は、大阪の本願寺を討ち、紀伊の根來寺和歌山縣那賀郡根來村を焼拂ひ、その勢力を抑へた。

信仰(其二) 信長は、葡萄牙の耶蘇教宣

教師を保護したので、教會學校が、京都、安土にも建てられ、秀吉の時には、西班牙からも、宣教師が來るやうになつた。耶蘇教は、これから盛んになり、信長、秀吉部下の諸將にも、信ずるものが多い、また九州の豪族、豊後の大友、肥前の大村、有馬の三氏は、共同して、使を羅馬におくり、法王に敬意を表した。日本人が歐羅巴に赴いたのは、この時がはじめてである。しかし宣教師や、外國船員などには、



耶蘇教の學校

秀吉の禁教  
凡三百五十餘  
年前

歐羅巴の文  
化  
學問技藝

織物

風俗

日本の平和を、みだすやうな疑ウタガハシのかゝるものもあつた。秀吉は、これを憂へ、はじめて耶蘇教を禁じたけれども、まもなく禁令がゆるみ、再び盛んになつた。(紀元二二四七年)

新文化の傳來 西洋との交通が開け、耶蘇教の弘まるにつれて、歐羅巴の新らしい文化が傳はつた。西洋形の帆船フネがつくれ、醫學、天文學、數學、航海術が開け、活字印刷が、西洋からも傳はり、羅紗ラクサ、天鵝絨テンカウジの製法をも學んで、織物が發達した。また羅馬字の印を用ゐ、洋服を着るものがあり、カルタや、煙草が、全國に弘まつたのである。



2600  
400  
2200

# 第八編 江戸時代

## 第一章 江戸幕府の創立

徳川家康の創業 徳川家康はもと、三河の小さな豪族である



徳川家康

が、信長を助けて、武田氏を滅ぼした頃から、盛んになつた。されば、秀吉に服従してからも、その勢が強く、秀吉の薨後、豊臣氏を凌ぐほどの有様である。五奉行の一人石田三成はこれを憂へ、同志の諸將とともに、家康を除かうとしたが、(紀元三二六〇年)關ヶ原の戦に

敗死し、豊臣氏は却て衰へたのである。そこで家康は、後陽成天

家康の勢力

關ヶ原の戦  
凡三百三十餘  
年  
家康の征夷  
大將軍就職  
凡三百三十餘  
年前



江戸幕府  
江戸時代

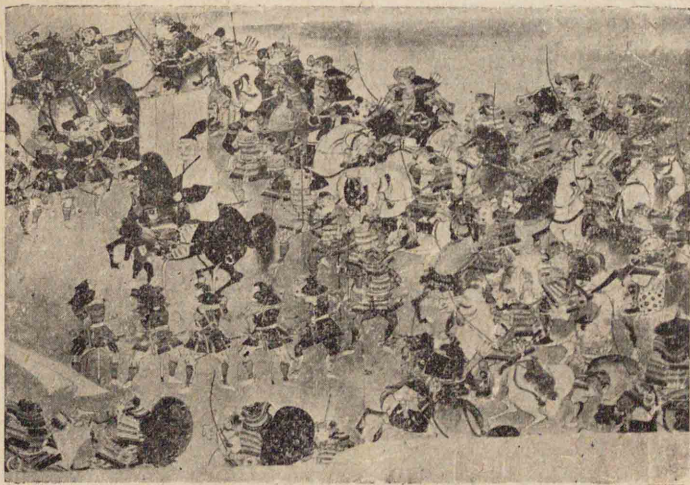
皇の慶長八年に、征夷大將軍となつて、幕府を江戸に開いた。世  
(紀元二二六三年)  
に江戸幕府といひ、またその滅び  
るまでの間を江戸時代といふ。  
江戸は、これから發達して、遂にわ  
が國第一の大都會となつた。

大阪落城  
凡三百二十餘  
年前

中央職制  
老中  
若年寄  
大老

豊臣氏の滅亡　その後、秀吉の  
子秀頼が、兵を大阪に擧げたけれ  
ども、元和元年に城が陥り、豊臣氏  
は滅んだ。(紀元二二七五年)  
これから、徳川氏に手  
向ふものがなく、世の中が、はじめ  
て、おだやかになつた。

幕府の組織　老中が政を統べ、  
若年寄が、これを助けた。その上に大老がゐる、大事を決裁する



(康家が中央端左)陣出の康家役の阪大

寺社奉行  
勘定奉行  
町奉行  
大目付  
目付  
地方職制  
奉行  
代官  
所司代  
城代

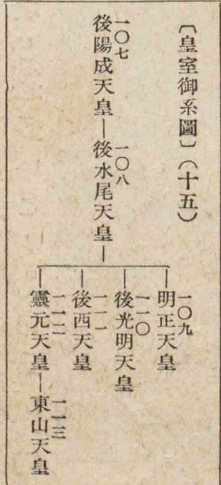
幕府の尊王

幕府の不遜  
公家法度



(體法御)皇天尾水後

こともあるが、必要がなければおかない。その下には、寺社奉行、  
勘定奉行、町奉行がゐる、社寺、財政、江戸の市政をつかさどり、大目  
付、目付がゐる、大名旗本を監督した。地方には、奉行、代官がゐる、  
また京都には、所司代がゐる、皇居を  
護り、大阪、駿府、岡崎などには、城代がゐ  
て、城を守つてゐる。  
朝廷と幕府　幕府は、信長、秀吉に  
も増して、朝廷を尊び、御料地を増進  
し、御  
儀式  
を再興し、陵をも修理した。しか  
し、また、公家法度を定め、所司代を  
おこななど、朝廷を抑へまゐらせ、また思召に添はないやうな事柄



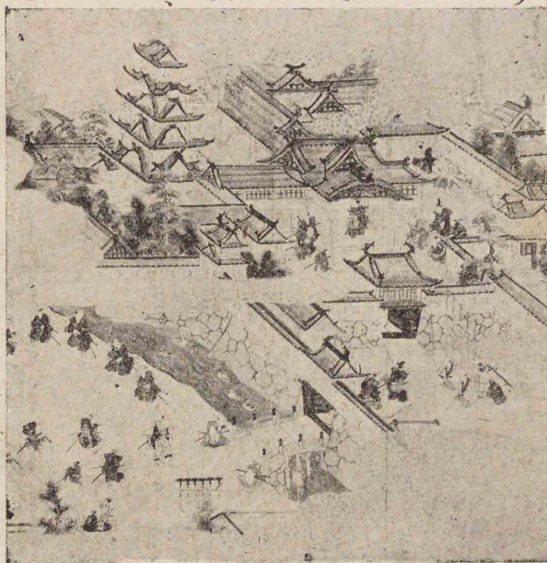


地方分権

も、少くはない。これを御不快に思召され、後陽成天皇も、後水尾天皇第八代も、早く御位を退かれるなど、恐多いこともあるが、後は、幕府でも、朝廷を大切にす  
るやうになつた。

大名  
幕府の實力  
三百年に近  
い泰平

封建制度 幕府は、全國の土地を、豪族に分ち與へて、その地方を治めさせた。これが封建制度であり、その豪族を大名といふ。封建制度は、鎌倉時代からおこり、室町時代に出來上つたけれども、幕府に力がないから、名ばかりである。然るに江戸幕府は、十分の力を持つてゐたから、大名の取締が行届き、三百年に近い泰平を



關玄に竝門正の城戸江

大名の種類  
親藩  
外様  
譜第

大名の取締  
その配置  
武家諸法  
度

参勤交代  
入質

階級制度

も開いた。

幕府と大名 大名の中、幕府の一族を親藩、關ヶ原の戦の時から服従したものを外様、その前から服従してゐるものを譜第といふ。幕府は、親藩、譜第の大名を、要所において、外様、大名に備へ、また武家諸法度を定めて、大名を取締つた。大名は、参勤交代と稱し、概ね一年がはりに江戸に住ひ、その妻子をも、江戸において、人質とした。これが爲めに、幕府の命令が、十分に行はれたのである。  
武士と百姓町人 この時代には、武士が最も勢力があり、政治、軍事の實權を握つてゐる。農業、商工業に従事するのは、百姓、町人と稱し、政治にも、軍事にも、あづかることが出來ない。また



(下上?) 裝正の名大



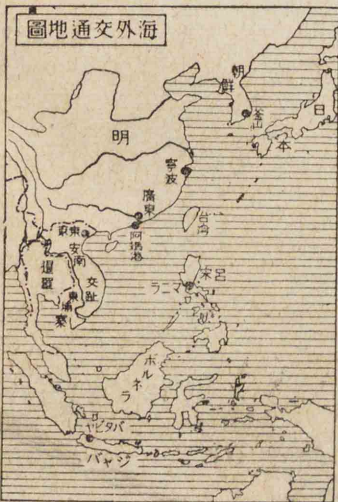
みだりに、身分、職業をかへることも許されない。まことに、窮屈な社會であつた。

## 第二章 鎖國

東洋諸國との交通貿易 明とは、戦國時代から朝鮮とは、秀吉

朝鮮  
明  
清  
暹羅  
安南  
東埔寨

の時から、交通が絶えてゐる。家康は、まづ朝鮮と和して、交を結び、將軍の代がはりに(紀元二二六五年)は、使が来るやうになつた。明との交は、回復せられないけれども、その商船は、長崎で貿易を行ひ、明が滅び、清シナがおこつてからも同じである。また暹羅、安南、東埔寨との交通貿易の開けたのも、やはり、家康の時であつた。



貿易國外の期初代時戸江



或る港に着いた南蠻船から、商品を持ち上げてゐる所、多分堺邊であらう。

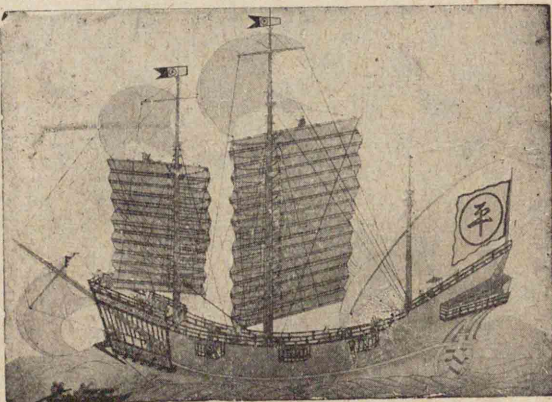
或る貿易港に於ける南蠻人



朱印船の活躍  
海外に於ける居留地  
日本町  
日本人の勢力  
山田長政  
荒木宗太  
濱田彌兵衛

西洋諸國との交通貿易 家康はまた、和蘭、英吉利の二國にも貿易を許した。なほ西班牙領の農昆須般Novaya Hispania 今西の墨とも、貿易を開かうとしたが、その目的を達しなかつた。

國民の海外發展 國民の海外に出かけることは、この頃が最も盛んである。されば、朱印船は、支那、印度、南洋の間を往來し、暹羅、安南、呂宋ルソン、群島の首島ホリツビンには、廣い居留地があり、日本町と呼ばれた。従つて日本人の勢力も強く、山田長政は、暹羅の國政に與り、荒木宗太郎は、安南の貴族に列し、濱田彌兵衛は、臺灣で、和蘭總督の不法をこらしたことがある。



(朱印船末次)



凡三百二十餘年

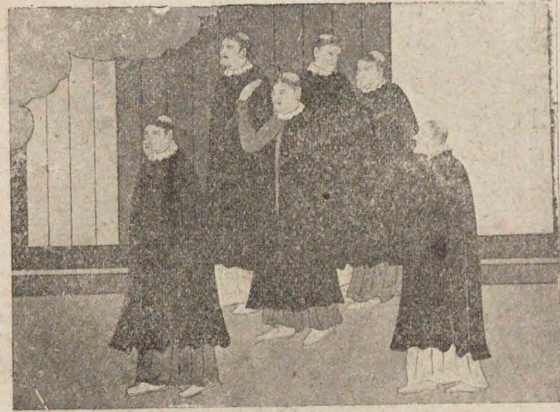
耶蘇教の禁止 この頃幕府では秀吉と同じやうに、耶蘇教宣教師が日本の平和をみだすものと信じ、將軍秀忠の時遂に耶蘇教を禁じた。しかし、外國との交易貿易が行はれてゐるから、取締が十分に行届かない。

鎖國(其一) 幕府はこれを見て、外

國との交通をやめる外はないと考へ、將軍家光の時、西班牙人の渡來を停め、貿易をも縮少し、寛永十二年に

は、國民の海外に赴くことを禁じ、ほゞ鎖國の形になつた。

島原の亂 幕府は、耶蘇教の信者に、改宗を命じ、改宗しないものは、死刑に處した。これが爲めに、寛永十四年肥前の天草、島原



(牙 荷 葡) 俗 風 の 師 教 宣

凡三百餘年前 耶蘇教信者の擧兵 凡三百餘年前

海外渡航の禁 西班牙人渡來の停止 貿易の縮少

地方の信者三萬人、島原半島の原城長崎縣南高來郡南有馬村に據つて兵を擧げ、その勢が盛んである。幕府は大軍を發して城を圍み、翌年の春、漸くこれを平げた。世に島原の亂といふ。

鎖國(其二) 島原の亂後、幕府

は、ます／＼、耶蘇教を恐れ、寛永

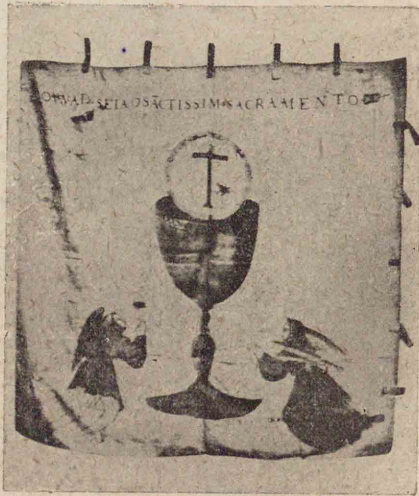
十六年、葡萄牙人の渡來を禁じ、

その在留せるものを國外に逐

ひ、ついで貿易港を、長崎の一箇

所だけにした。これで、鎖國の形が、全く出來上つたのである。

然るに、英吉利人は鎖國の前に日本を去り、暹羅、安南、東埔寨も、鎖國の後、いつしか來なくなつて、支那、和蘭の商人ばかりが、長崎で貿易してゐる。



旗の用使者信教蘇耶時之亂の原島

凡三百餘年前 葡萄牙人渡來の停止 長崎だけの貿易

清蘭二國商人だけの貿易



宗門改

佛敎信仰の  
強制

踏繪

鎖國の利益  
國內の治  
平と國の  
文化の發  
達

鎖國の損害  
海外發展  
の挫折と  
國力の衰  
頹

耶蘇敎の取締 幕府は宗門改（しゆもんかい）をおいて、耶蘇敎を取締り、また  
信者でないことを證明する爲めに、國民には、悉く、所屬の寺を定  
めしめ、長崎及びその附近では、庶民をして、毎年一回、耶蘇、マリヤ  
などの像を踏ましめた。これを



踏繪

踏繪といふ。

鎖國の利害 鎖國の後には、外

國からの影響がないから、國內が  
よく治まり、日本風の文化が進ん  
だ。しかし海外發展の勢が挫け、

國民も、次第に、廣い世界のあることを忘れて、元氣をも失ひ、遂に  
國の力さへ、衰へたのは、大きな損害である。

### 第三章 江戸時代前期の世相と文化

幕府の隆盛 家康の後、秀忠、家光が相ついで、その業を守り、幕

將軍家綱  
由比正雪  
の變  
明曆の大  
火

府の基礎が、ますます、固くなつた。されば、將軍家綱（しやうげん）の時、由比正雪（ゆひしやうせつ）が、謀叛をおこさうとしたが、すぐに誅せられ、明曆（めいれき）の大火に、江

將軍綱吉

戸の大部分が、焼けたけれど、まもなく復興した。幕府は、この頃が、最も盛んである。享保の改革 將軍綱吉は、家綱の弟である。はじめの

元祿の三  
大弊政  
凡二百三十四  
年前

間、政に心を用ゐたが、元祿年（げんろく）間には、生物（せいぶつ）憐みの令を出し、



（與給の彌）護救の後火大曆明

土木事業に金銀を費し、質のよくない貨幣をつくるなど、漸く政  
を怠り、また奢を極めたので、財政が苦くなり、風俗がみだれた。  
これが爲めに、將軍吉宗（きしゆん）の時、文武を上げまし、儉約をすゝめ、風俗

將軍吉宗



享保の改  
凡二百餘年前  
泰平の氣分

敬神の社  
氏神の社  
鎮守の社  
佛教  
幕府の保  
護

黄檗宗の  
傳來

華美の風俗  
演藝の流行  
淨瑠璃  
操人形  
芝居  
儒學  
朱子學

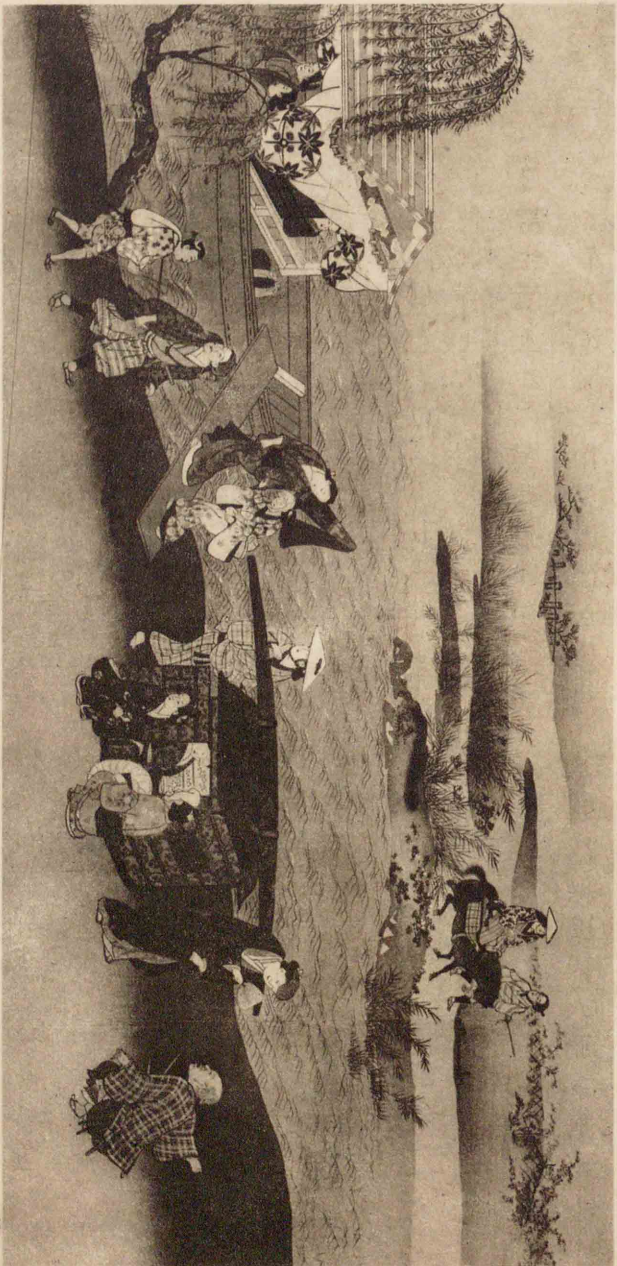
をたゞし、人心を引きしめてゐる。世に享保の改革といふ。  
元祿時代 江戸時代に、泰平の氣分があらはれ、また文化の進  
んだのは、將軍綱吉の頃である。世に元祿時代といふ。

信仰 神を敬ふことは、昔のまゝに行はれ、氏神の社、鎮守の社  
が、國民信仰の中心となつてゐる。佛教は、幕府が、耶蘇教を取締  
る爲めに保護を加へ、だれでも、寺の檀家となることに定めたの  
で、信者でないものは、一人もない。宗旨では、禪宗、淨土宗、一向宗、  
法華宗が盛んである。また禪宗の一派黄檗宗が、元祿以前に、明  
から傳はつてゐた。

日常生活 この頃は、世の中が、泰平であるから、次第に贅澤に  
なつて、華美に流れ、物見遊山が盛んになり、淨瑠璃、操人形、芝居が  
流行し、それにつれて、文藝が發達した。

文學 儒學では、早く林羅山、山崎闇齋が、朱子學を教へて、多く

江戸時代の生活



宮川長春筆四季行樂圖卷

乗に籠駕。るゐてこれか、兼もつ三はに、こ。たつあで、開機通交な要重がと馬と舟と籠駕、代時のこ  
く、長が袖の服衣。妻の姓百はるれ乗に馬。うらあでれ運のそはのるゐに舟。人始るあ、の分身はるれ  
るあで幸懐はるたひ、負背を猿。るゐてつなく、廣も帯



陽明學

古學

國文學

古典研究

俳諧

戲曲

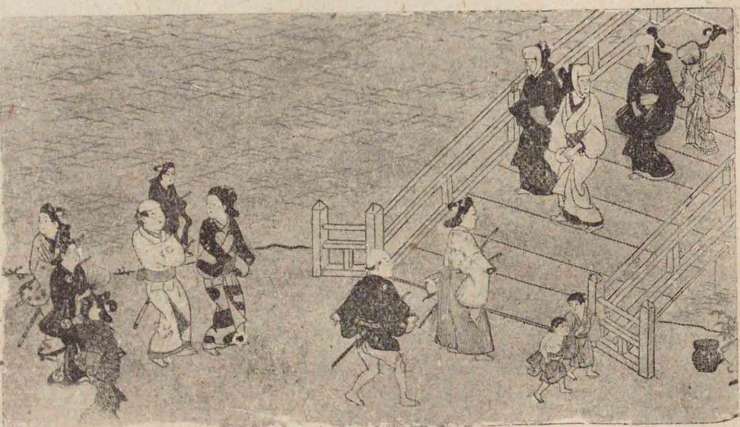
の門人を養成した。儒學は、これから盛んになつた。かくて元祿の頃には、中江藤樹は陽明學を唱へ、荻生徂徠は古學を唱へて、別に一派を開いた。國文學の開けたのも、この頃



山 羅 林

てあり、  
僧契沖、  
北村季  
吟が古  
書の研

究に手を着けてゐる。また俳諧には、松尾芭蕉が大家と仰がれ、戲曲には、近松門左衛門、竹田出雲が名高い。



俗 風 の 代 時 祿 元

近松の國姓爺合戦、出雲の

鄭成功  
↑



江戸時代の美術



土佐光起筆鶉圖

光起は宋元の異法を研究して一新の面を開き、有職人物宮殿より花鳥  
 鳥に殊に鶉、及び魚虫鳥。い多が作名はに鶉に殊、及びに魚虫鳥  
 。るみてし象胎に口人、どほる

小説  
 聖堂  
 諸藩の學校  
 寺子屋

假名手本忠臣藏は、その傑作といはれる。小説は、井原西鶴が出

てから、盛んになつた。  
 教育 綱吉は、聖堂を江戸の湯島に  
 建て、學問をすゝめたので、教育が開  
 け、諸大名にも、學校を設けるものがあ



(作清仁村々野) 壺茶燒清仁

るものは、百姓町人が多く、庶民の間にまで、教育が弘まつた。寺子屋に入學す

る。少年、少女に、讀書、算術、習字の初歩を教へる寺子屋も、この頃から盛んになつた。寺子屋に入學す



寺子屋



陸運  
五街道  
並木道  
宿場塚

錦繪  
織物  
漆器

浮世繪

模様畫

住吉派

狩野派  
土佐派

繪畫

### 美術工藝

この時代のはじめ、狩野探幽が、狩野派を中興し、土佐光起が、土佐派を中興し、中にも探幽は、日本一といはれた。元

祿の頃には、住吉具慶が住吉派をおこし、尾

形光琳が、華麗な模様畫を描いて、陶器、蒔繪

織物などに應用せられ、菱川師宣が、民間の

風俗を描いて、浮世繪をはじめた。浮世繪

は、後に、美しい版畫として行はれた。これ

を錦繪といふ。織物では、西陣織、陶器で

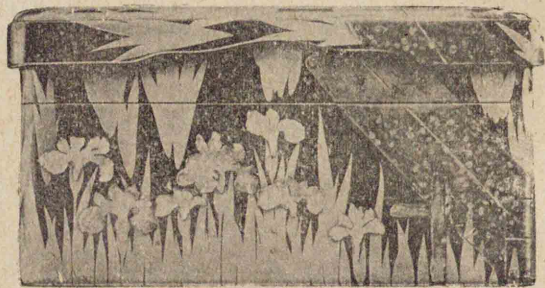
は、仁清焼、乾山焼、九谷焼、漆器では、輪

島塗、春慶塗が、美術品として名高い。

交通 陸上には、江戸を中心として、東海

道、中仙道、奥州街道、日光街道、甲州街道の五街道が通じ、街道には、

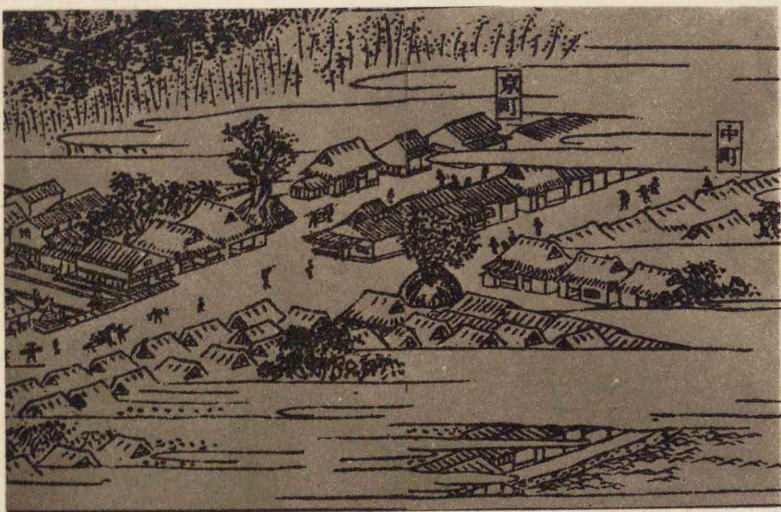
並木を植ゑ、一里塚を築き、所々に宿場がある。宿場には、旅館を



(面側) 篋手繪蒔濤八若杜作琳光形尾



塚里一の町津大道海東



江、にめ爲るめしら知を程里はに道街、リ圖を便の人旅塚なき小に側兩の路道に每里一、てしと心中を橋本日戸（會圖所名道海東）。るあてゑ植が榎、き築を

木並の近附原吉道海東



木。るあてゑ植が木並の松、に側兩のそたま、はに道街。るげ防でれこも暑の夏、ばれ來出もところす息休で際（次三十五道海東筆重廣）

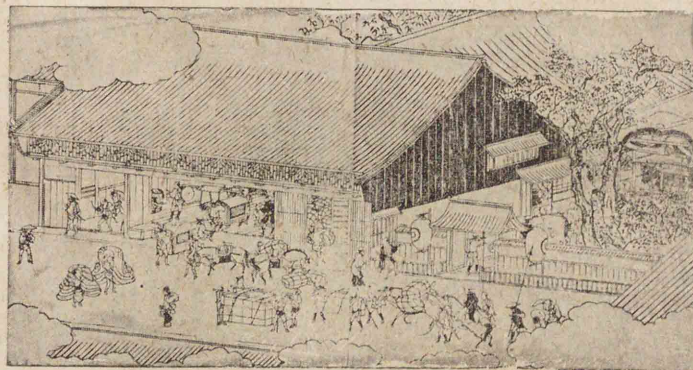
江戸時代の交通

海運  
江戸大阪  
奥羽間の  
航路  
九州四  
大阪間の  
航路

商工業  
鑛業  
貨幣の流通  
絹布木綿の  
普及

はじめ、人足、乗物の用意もあつた。海上には、大阪及び奥羽地方と、江戸との間に、また大阪と四國、九州との間に、早くから、航路が開けてゐる。されば元祿の頃、漸くこれを利用するものが多く、旅行の風が盛んになつた。産業 商工業が發達し、鑛業がおこり、金、銀、銅、三種の貨幣が、はじめて全國に流通した。絹織物、木綿織物の普及したのも、この頃である。

第四章 江戸時代後期の世相と文化  
寛政の改革 その後將軍家治の時



（宿下の坂道海東）館旅は物建、場宿

海上には、大阪及び奥羽地方



將軍家治  
田沼意次  
の弊政  
前凡百五十餘年

將軍家齊  
寛政の改  
革  
凡百四十餘年

將軍家慶

老中田沼意次が賄賂をむさぼり不正の行も多い。また天明年

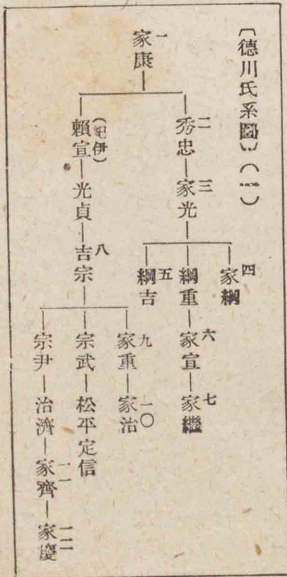


松平定信

間引きつゞいての飢饉洪水にも手當が届かないから騒動が各地におこつた。これが爲めに將軍家齊の時意次を退け老中松平定信を用ゐて賄賂を禁じ風俗をたゞし、財政をととのへた。世に寛政の改革といふ。

幕府の衰微 定信辭職の後家齊は政を怠り奢を極めたので、

財政がまた苦くなり士氣が衰へ風俗がみだれた。將軍家慶これを憂へ老中水野忠邦を用ゐて再び風俗をたゞし、人心を引きしめようとし





天保の改  
革  
凡九十餘年前

泰平の頂上  
教育

國文學  
小説

和歌

狂歌

た。世に天保の改革といふ。しかし成功しなかつた。この頃  
から、幕府は衰へたのである。

文化文政時代 將軍家齊の頃を世に文化文政時代といふ。  
泰平の頂上である。それにつれて、文化も進んだ。

文化の概観 幕府の聖堂には、附屬の學問所が出来て、廣く入  
學を許し、諸大名も、學校を建てるものが多く、教育が進み、學問が  
ますく開けた。中にも國文學が盛んであり、小説には瀧澤馬



の頃が盛んである。小説では、馬琴の里見八犬傳、一九の東海道

琴十返舎一九があり、  
和歌には、加藤千蔭、村  
田春海、香川景樹があ  
り、狂歌には、太田蜀山  
人がある。狂歌は、こ

繪畫

圓山派  
四條派

浮世繪

漆器  
蒔繪

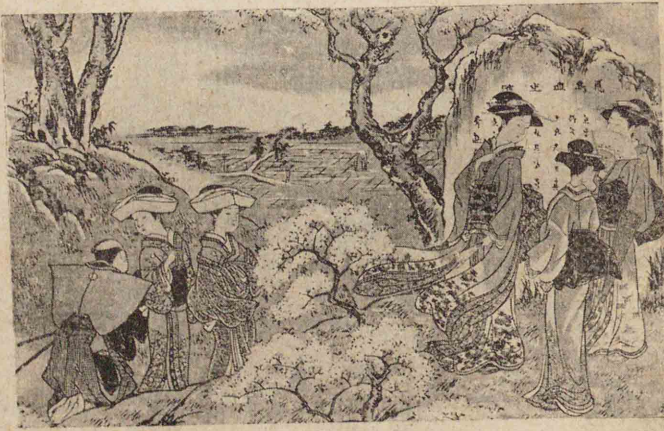
商工業

演藝娛樂  
服裝  
食物

中、藤栗毛が名高い。繪畫には、圓山應舉が寫生に長じて、  
圓山派を開き、松村月溪が、山水に長じて、  
四條派を開き、喜多川歌麿、葛飾北

齋、歌川豊國、安藤廣重が、浮世繪に  
長じて、錦繪が流行した。漆器、蒔  
繪なども、各地でつくられるやう  
になつた。されば、商工業が榮え、  
西では大阪、東では江戸が繁華の  
中心となつてゐる。

日常生活 世の中が、おだやか  
であるから、淨瑠璃、芝居、相撲など  
が、人々に喜ばれ、服裝が、はてにな  
り、食物では、料理が進んだ。酢、醬油、砂糖が、普及するやうになつ



(文化文政時代の飛鳥山花見の注意せられ)



國民元氣の喪失

たのもこの頃からである。しかし、泰平が永くつゞいた爲めに、國民の元氣がなくなつた。丁度そのをりに、外國との關係が、おこつたのである。

狂歌の例

郭公鳴きつるかたは見えねどもきいた證據は有明の月

蜀山人

和歌の例

旅人の朝行く駒の蹄より雲立のぼる足柄の山

加藤千蔭

花ははや須磨も明石もなかりけり浦づたひして春や暮れ行く

村田春海

蝶よ蝶よ花といふ花の咲くかぎり汝が至らざるところなきかな

香川景樹

第五章 開國

英露佛諸國の勃興の米國の獨立 凡百五十年

世界形勢の變化 わが國が國を鎖してゐる二百年ばかりの間に、世界の形勢がかはつた。葡萄牙、和蘭、西班牙は、衰へて、英吉利、露西亞、佛蘭西が盛んになり、亞米利加合衆國が獨立した。ま

(紀元二四四三年)

汽船の發明

北方に於ける露西亞の勢力 千島の蠶食

貿易の要求 その狼藉

南方に於ける英吉利の勢力 軍艦の不安

凡百三十年程

た汽船が發明せられて、世界の距離が短くなつた。これが爲めに、わが國でも、次第に、鎖國が出来なくなつた。

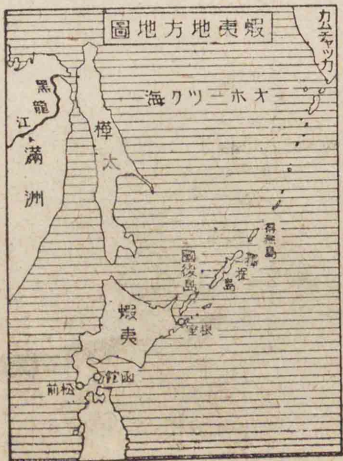
露西亞との關係 かねて西比利亞、カムチャッカを占有してゐる露西亞は、南に進んで、千島の大半を奪ひ、わが國に近寄つた。

Kamchatka

されば將軍家齊の時、二回まで使が來て、貿易を求めたが、幕府では、應じない。露西亞人は、これを怒り、千島、樺太で、亂暴したこともあり、世の中が、さわがしくなつた。

英吉利との關係 この頃、英吉

利は、印度を占領し、支那とも貿易を開いて、わが國に近寄り、その軍艦は、突然、長崎に來て、港内をさわがしたことがあり、またその捕鯨船は、しばしばわが海岸にあらはれ、上陸して薪水食料を求





國防の不備

林子平の國防論

江戸灣の防備  
大砲の製造

將軍吉宗の獎勵

め、言葉の通じない爲めに、争をおこしたこともある。

國力の不振 外國との關係がおこり、世の中も、さわがしくなつたのは、家齊の頃であり、幕府は衰へ、國民は元氣をなくしてゐる。また外國に對して、國を護る用意さへもない。されば仙臺の林子平は、早く書を著はして、國防のことを論じてゐる。幕府でも、漸くその必要を認め、江戸灣の兩岸に砲台を築き、西洋風の大砲をもつくつたが、まだ力の弱いものであつた。

洋學の起り 洋學の開けたのも、この頃である。

洋學は、鎖國の後、衰へてゐたのを、將軍吉宗の時、青木昆陽をして、和蘭語を學ばしめてから、再びおこりかけた。ついで前野良澤、杉田玄白は、醫學研究の爲めに、和蘭語を學び、舶來



林子平

解説新書  
凡百六十餘年  
前

醫學  
蘭學

地理歴史

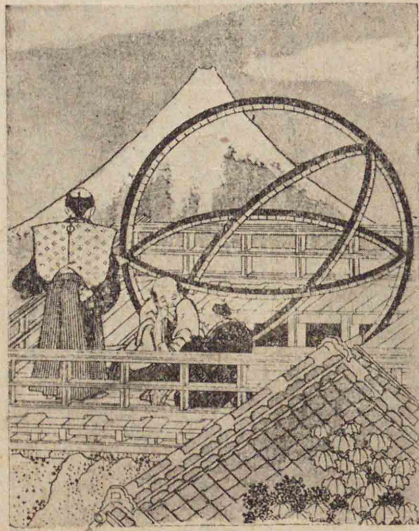
兵學

理化學工學  
新文化の發  
達と世界の形  
勢の認知

の解剖書を譯して、（紀元二四三四年）解説新書を著はしたのが、洋書翻譯のはじめである。また大槻玄澤は、書を著はして、和蘭語の發音と、綴方を教へた。玄澤も醫者である。かやうに、洋學は、まづ醫學から開けた。世に蘭學といふ。

洋學の發達 蘭學が開け

てから、まもなく、露西亞、英吉利との關係がおこつたので、外國のことを知る爲めに、西洋の地理、歴史の研究が盛んになつた。また國防上からは、西洋の戰術、兵器を學ぶことが、必要になつて、兵學の研究がはじまり、大砲がつくられ、それにつれて、理化學、工學が、和蘭から傳はつてゐる。これから新しい文化が開け、世界の形勢をも知



臺文天の府幕

Handwritten notes and stamps at the bottom of the page, including a circular seal and various characters.



凡百十餘年前

アヘン戦争の影響

打拂の中止

和蘭國王の好意

凡九十餘年前



和蘭國王威廉二世世

ることが出来た。ついで露西亞語、英語をも學ぶやうになり、ますます外國の事情が明かになった。

外國船打拂令 幕府は、英露二國のおだやかでない行があつてから後、その船を近寄せない爲めに、文政八年見かけ次第、打拂ふことにした。然るに、まもなく、支那に、アヘン戦争がおこり、英吉利の爲めに、香港を奪はれた。幕府は、これを見て、急に打拂令を停めた。

開國の忠告

その頃、和蘭國王は、書を幕府におくり、アヘン戦争のやうな不幸を避ける爲めに、國を開くことをすすめた。幕府は、まだ、これに従はなかつた。

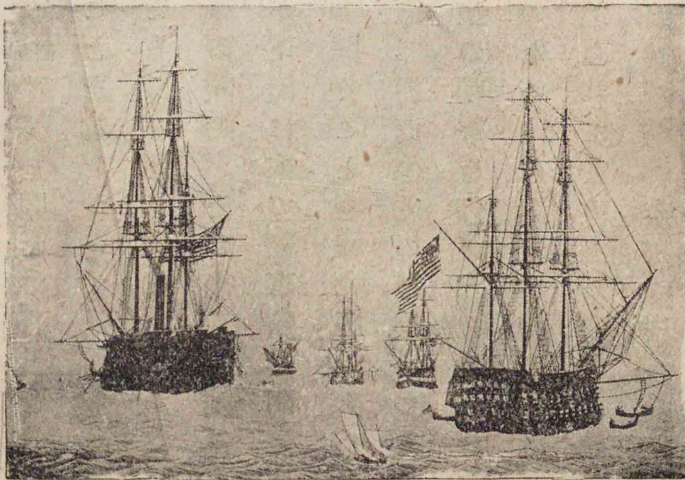
ペリーの渡來

開國の要求 亞米利加合衆國は、アヘン戦争の後、支那と貿易を開いたので、日本とも交を望み、孝明天皇（第百二十代）の嘉永六年（紀元二五三三年）、海軍代將ペリーが、相模の浦賀（神奈川縣浦賀郡浦賀町）に來て、和親を求めた。幕府では、確答を與へない。ペリーも、また、一とまづ浦賀を去つた。露西亞は、これを知つて、海軍中將プーチヤチン（Poutiatine）を長崎に遣はし、同じことを要求したが、幕府は、やはり、確答を與へなかつた。

プーチヤチンの渡來

ペリーの再渡

凡九十餘年前



日本幕府の使者が來た國艦の威威（安政元年）

開國

安政元年（紀元二五四年）ペリーは、再び大艦隊を率ゐ、相模の神奈川沖





米國領事館(下田玉泉寺)

に來て、開國を迫つた。幕府はこれに恐れて、遂に和親條約を結  
び、伊豆の下田下田町、蝦夷の函館函館市、北海道函館市を開いて、薪水食料を授  
けることを約し、ついで、露西亞、英吉利、

和蘭とも、ほゞ同じ條約を結んだ。

通商の開始　その後、米國總領事ハ

リスが、下田に來て、領事館を開き、また

貿易を開くことを求めた。幕府は、こ

れに應じ、通商條約の草案をつくり、孝

明天皇の勅許を仰いだ。然るに、まだ

勅許のない内に、大老井伊直弼は、ハリ

スに迫られて、(紀元二五二八年)安政五年條約に調印し、

貿易の爲めに、江戸、大阪の兩市、函館、長崎、神奈川、横濱市、兵庫、神戸

部、新潟市、新潟市の五港を開き、治外法權を認め、關稅をも定めた。つ

ね、ハリスの渡來、通商條約、和親條約、開國、幕府、領事館、貿易、通商、條約、草案、調印、勅許、大老、井伊直弼、安政五年、條約、調印、貿易、爲め、江戸、大阪、兩市、函館、長崎、神奈川、横濱市、兵庫、神戸、部、新潟市、新潟市、五港、開き、治外法權、認め、關稅、も、定め、た、つ



徳川光圀

いて英吉利、露西亞、佛蘭西、和蘭とも、ほゞ同じ條約を結んだ。然  
るに、この頃、尊王思想が盛んになり、王政復古の途が、次第に開け  
て行くのである。

### 第六章 尊王思想の發達

尊王思想の起り　幕府で、政を行

ふのは、國體に背いてゐるけれども、

これまで、だれも不思議に思ふもの

がない。然るに、國史の研究が開け

てから、漸く、そのことに氣が付いて、

學者では、林羅山、山崎闇齋などが、尊

王の說を唱へ、水戸藩主、徳川光圀も、

大日本史を著はして、國體を明かにし、また、湊川に嗚呼忠臣楠子

三九七卷  
DANKON



嗚呼忠臣  
楠子之墓

之墓の碑を建て、  
楠木正成の忠義を  
たへた。されば、  
幕府で政を行ふの

は、間違つてゐると考へられるやうになり、桃園天皇第六十の時

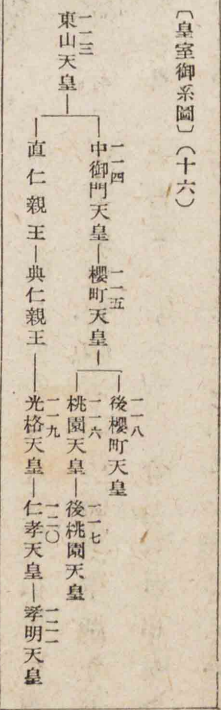
竹内式部は、王政復古の志を抱き、京都にゐて、公家の人々を説き、  
幕府の爲めに追放せられ、ついで山縣大貳も、江戸で、尊王のこと  
を説き、死刑に處せられた。  
尊王思想の發達 國學は、國體を  
明かにする學問である。荷田春滿、  
賀茂眞淵が、そのもとを開き、本居宣  
長が、これを大成した。名高い古事  
記傳は、宣長が著はしたのである。



本居宣長

竹内式部  
凡百十餘年  
山縣大貳

國學  
荷田春滿  
賀茂眞淵  
本居宣長  
古事記傳



蒲生君平  
高山彦九郎  
賴山陽  
日本外史  
平田篤胤

皇室を中心  
とする國力  
の回復

徳川齊昭  
藤田東湖

これから、尊王の思想が、盛んになつた。また宣長と、ほぼ同じ頃、  
蒲生君平、高山彦九郎も、尊王の説を唱へ、賴山陽は、日本外史を著  
はして、忠君愛國のことを教へ、ついで、宣長の門人平田篤胤が、國  
學によつて、世人を導いてゐる。

尊王思想の普及 尊王の思想の進んだ時に、露西亞、英吉利と



藤田東湖

の關係がおこつた。然るに、幕府は  
衰へ、國防も出來てゐない。これが  
爲めに、國力を回復することが必要  
であり、國力を回復するには、皇室を  
中心としなければならぬとの考  
が、次第に強くなつた。水戸藩主徳川齊昭、その臣藤田東湖など  
が、これを説いて、世人を導いてゐる。かくして尊王の思想が普  
及し、どうしても、幕府を倒し、朝廷で、政を行はなければならぬ

結末  
皇室  
尊王



維新の原因

といふことが、だれにも、はつきりと分つて来た。これが明治維新の原因である。

### 第七章 大政奉還

井伊直弼に對する非難

幕府を立てなほす爲めの世嗣問題

安政の大獄 はじめ井伊直弼が、勅許のない内に、通商條約を結んだ時、世としては、この不敬を、とがめるものが多い。この頃幕府は、衰へてゐる。幕府が衰へてゐては、國力の回復が出来ない。またこの時の將軍家定は、病身であり、子供もないから、有力の大名は、賢明といはれる一橋家の徳川慶喜を、その世嗣として、衰へてゐる幕府を立てなほさうとしたが、直弼は、これにも従はない。まだ幼い紀州藩主徳川家茂を、將軍の世嗣と



橋本左内

志士浪人の井伊直弼排斥の計畫

志士浪人の處罰

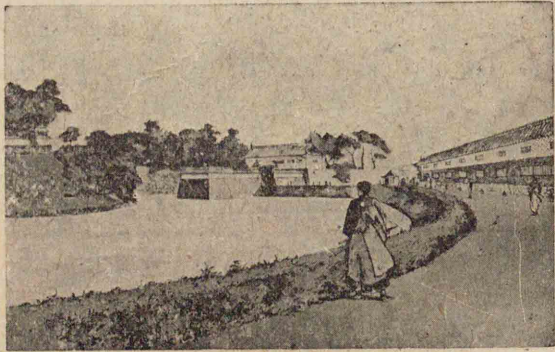
皇族公家大名の處罰

櫻田門外の變

凡七十餘年前

坂下門外の變

した。ついで家定が薨じ、家茂が將軍となつた。されば越前の橋本左内、長州の吉田松陰、浪人の梁川星巖、梅田雲濱などは、朝廷の御力をかりて、直弼を、幕府から退けようとした。直弼も、やむを得ず、安政五年から六年にかけて、左内をはじめ、數十人を捕へて、死刑以下の刑罰に處した。皇族、公家、大名の中にも、罪せられたものがある。世に安政の大獄といふ。これが爲めに、直弼は、人心を失ひ、遂に江戸城櫻田門外で殺され、直弼の後をうけた老中安藤信正も、江戸城(紀元二二五)坂下門外で傷けられ、幕府の威力が挫けた。(紀元二二五)君が代を思ふ心の一寸ちにわが身ありとは思はざりけり



櫻田門遠望

梅田雲濱



志士の討幕  
計畫

薩州藩の反  
對  
凡七十餘年前

改革の無効



眞木和泉

かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂 吉田松陰  
幕府の改革 この頃、尊王の思想が進んでゐるから、久留米の  
眞木和泉をはじめ、諸國の志士は、多く京都に集まり、幕府を倒し  
て、朝廷を奉じ、國力を回復しよう  
とした。然るに、朝廷では、まだ早いと  
思はれたので、御許しがない。薩州  
の島津久光の意見に従ひ、(紀元二五三二年)幕府は、  
幕府改革の勅を降された。

勅を奉じ、徳川慶喜を將軍の後見とし、また京都守護職をおく  
ど、色々の改革をした。しかし、國內を治める實力がないから、衰  
へるばかりである。  
長州藩の討幕計畫 長州藩主毛利敬親も、王政復古の考があ  
り、公家の三條實美と結び、眞木和泉、筑前の平野二郎などの志士

大和擧兵の  
計畫  
凡七十餘年前

薩州藩の反  
對

三條實美等  
の西走

但馬生野の  
變

大和五條の  
變

とはかり、文久三年兵を大和に擧げようとした。然るに薩州藩  
(紀元二五三二年)は、まだ早いといつて、京都守護職松平容保とともに反対したが、  
朝廷でも、これに従はれ、實美等の參  
内を停め、長州藩士の在京を禁じた。  
長州藩士は、實美等を連れて長州に  
走つた。しかし平野次郎等は、遂に  
兵を但馬生野兵庫縣朝來郡生野町に擧げ、土  
州の吉村寅太郎等は、兵を大和五條  
奈良縣宇智郡五條町に擧げたが、幕府の爲めに  
敗られ、或は戦死し、或は捕へられて  
斬られた。



三條實美等の西走

大君にさゝげあましゝわが命今こそ捨つる時は來にけり  
今しばしまてや都の花紅葉御幸ある世となさでやむべき

平野次郎  
同上



長州軍隊の  
京都討入  
凡七十餘年前

長州藩の降  
服

長州藩の再  
舉

凡七十餘年前

薩長二藩の  
連合

幕府の敗軍

將軍家茂の  
薨去

慶喜の相續

### 長州征伐

毛利敬親は、まもなく再舉をはかり、元治元年まづ、軍隊を京都に進めて、松平容保を攻めた。幕府は、これを討破り、また奏上して、敬親の官位を奪ひ、長州征伐の兵をおこしたのである。敬親は、首謀者を斬つて、罪を幕府に謝した。

### 長州再征

その後、長州藩は、また兵を擧げる用意をしてゐる。幕府は、これを知つて、應慶二年再び長州征伐の兵をおこした。

この頃、薩州藩でも、漸く、國力を回復

するには、幕府を倒すより外はない

と、考へるやうになり、土州の坂本龍

馬のとりなして、長州藩と連合した。

されば長州藩の勢が強く、しばし、

幕府の兵を破つてゐるをりに、將軍家茂が薨じた。子供がないから、徳川慶喜が家を嗣いだ。然るに慶喜は、遂に兵を引揚げた

〔皇室御系圖〕(十七)

孝明天皇—明治天皇—大正天皇—今上天皇

〔徳川氏系圖〕(二)

家齊—定慶—家定

〔徳川氏系圖〕(一)

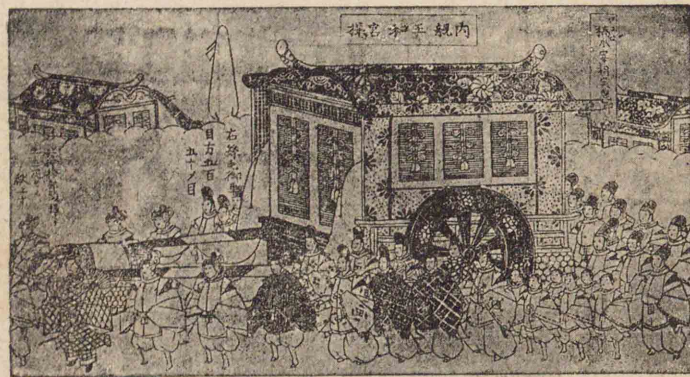
齊順—家茂

〔徳川氏系圖〕(一)

光圀—(八代略)—齊昭—慶喜(一)

ので、幕府の威力が、全くなつてしまつた。

和宮の御  
婦徳



和宮御降嫁の時御車

川家を保つことに御力を盡くされた。誠に婦人の鑑と仰ぐべき御方である。

家茂の夫人は、和宮親子内親王と申し、孝明天皇の御妹である。御年十七で、御降嫁になつた。「をしまじな君と民との爲ならば身は武藏野の露ときゆとも」とはその時の御歌である。よく家茂に仕へて、御内助の力が多く、御伉儷もむつまじかつた。家茂は大阪で薨じ、宮は江戸にゐられたが、かねて御歸りのをりに、西陣の織物を、ぜひにと、御願ありしに、今は御形見となつて、宮の御許に届いたのを、そのまゝ、しかと抱かれたまゝ、泣き沈みたまひ、空蟬の唐織、ごろも何かせん綾も錦も君ありてこそ、と御詠みあそばされた。その後、朝廷から、京都へ御歸りになるやうにと、御沙汰のあつた時にも、一旦徳川家に縁付いた上は、この家を離れることは出来ないとして、御聞入がない。まもなく、徳川家が朝敵となり、官軍が江戸城に迫つたをりに、徳川家を保つことに御力を盡くされた。誠に婦人の鑑と仰ぐべき御方である。



孝明天皇の崩御  
明治天皇の踐祚

山内豊信の勸告

將軍慶喜の上表  
凡七十餘年前  
幕府の滅亡

### 薩長二藩の討幕計畫

慶應二年孝明天皇が御かくれになり、  
ついで明治天皇第十二代が踐祚あらせられた。この時、薩州の西郷隆盛、大久保利通、長州の木戸孝允は、公家の三條實美、岩倉具視と結び、勅を奉じ、二藩の兵をあはせて、幕府を討たうとしてゐる。



徳川慶喜

### 王政復古

土州前藩主山内豊信は、幕府を討つよりも、大政を返上せしめるのが得策であると考へ、これを將軍慶喜にすゝめた。慶喜も、幕府で政を行ふことの不都合を知つ

てゐたから、豊信の忠告に従ひ、慶應三年十月、大政の返上を御願した。明治天皇は、すぐに、これを御許しになつた。幕府は、これに滅び、源頼朝以來、七百餘年つゞいた武家政治も、終を告げたのである。

薩州の徳川氏勢力破壊の計畫  
徳川氏軍隊の憤激  
鳥羽伏見の戦

江戸開城

徳川家達の相續

である。

### 徳川氏の處分

大政返上の後、薩州藩は、朝廷にすゝめて、徳川氏の勢力を弱めようとした。その頃、大阪にゐた慶喜部下の軍隊は、これを怒り、朝廷から、薩州藩を退ける爲めに、明治元年正月、京都に進軍したが、その途中、鳥羽、京都府紀伊郡伏見京都市伏見區で、官軍の爲めに破られ、慶喜も、また、江戸に歸つた。ついで有栖川宮熾仁親王の率ゐたまふ官軍は、江戸城に迫つた。慶喜は、城を官軍に引渡して、罪を謝した。朝廷では、徳川氏の領地を沒收し、慶喜の一族、徳川家達に、その家を嗣がしめ、新らたに駿府静岡七十萬石を賜はつた。



官軍の装束



彰義隊の上野屯集  
榎本武揚の蝦夷地占據  
奥羽北陸諸藩の連合  
平定  
凡七十年前

戊辰の亂 徳川氏の家來の中には薩州藩を憎むものが多い。これが爲めに、彼等は、彰義隊を組織して、江戸の上野野今の上野公園に據り、また、その海軍副總裁榎本武揚は、軍艦を率ゐて、蝦夷北海を奪ひ、奥羽、北陸の諸大名も、連合して、薩州藩を討つ爲めの兵を擧げたけれども、皆敗れて、戦のしづまつたのは、明治二年である。  
(紀元二五二九年)

### 第九編 明治維新と明治時代

#### 第一章 維新の國是

新政府の組織  
凡七十餘年前  
總裁議定參與の設置

維新 慶應三年十二月九日明治天皇は、王政復古の勅諭を下したまひ、攝政、關白及び幕府を廢し、總裁、議定、參與の三職をおか



有栖川宮熾仁親王

れた。この時、有栖川宮熾仁親王が總裁となり、また議定、參與には、公家大名、諸藩士の中から、任命せられ、一切の政が、朝廷で行はれるやうになつた。これが、わが國體の正しい姿である。世に王政復古令といひ、この時の改革を、維新といふ。維新の政は、これから明治の御代にかけて、行はれてゐるから、明

國體の正しい姿  
王政復古令  
維新  
明治維新



治維新ともいはれる。

五箇條の御誓文

翌年三月天皇は、宮中紫宸殿に出御あり、總裁議定、參與の三職をはじめ、公家、大名を率ゐられて、御みづから



(座玉方右) 文誓御條箇五

天神地祇を祭りたまひ、神々に、五事を誓はせられ、また、これを、國民にも御示しになつた。

廣く會議を興し、萬機公論に決すべし。

上下心を一にして、盛に經綸を行ふべし。

官武一途、庶民に至る迄、各其志を遂げ、人心をして、倦まざらしめんことを要す。  
舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし。

智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし。

世に五箇條の御誓文といふ。維新の國是は、この時に定まり、明治年間

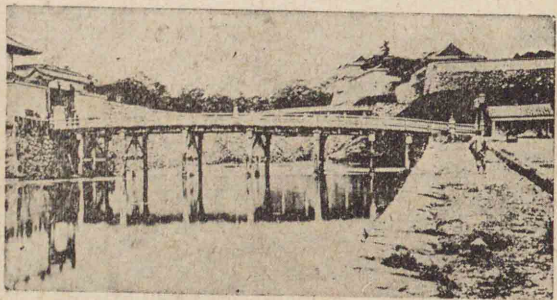
の改革は、すべて、皆御誓文の御主意によつて、行はれてゐる。

即位の大禮と一世一元の制

同年八月、天皇は、即位の大禮を擧げたまひ、ついで慶應四年を改めて、明治元年とし、また天皇御一代の間、一つの年號を用ゐられることになつた。これを一世一元の制といふ。

東京奠都 天皇は、また、改革を行ふには、人心を引きしめなければならぬ。それ

には、都を遷すがよいと思召された。されば、明治元年七月詔を下して、江戸を東京とし、ついで東京に行幸あらせられ、江戸城を



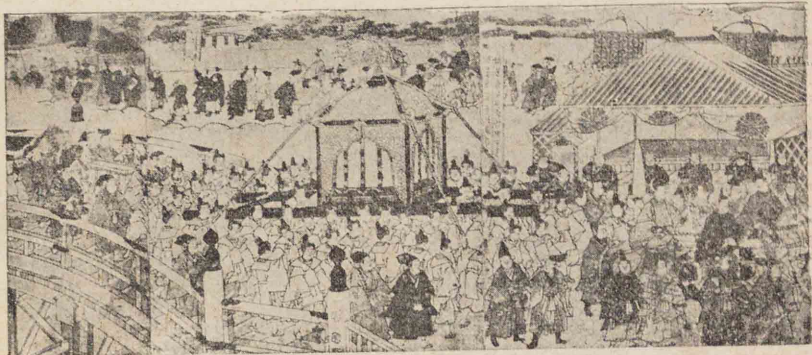
明治初年の重橋



京都還幸  
再度の東京  
行幸

徳川氏の領  
地没収

國體上の矛  
盾  
薩長土肥四  
藩主の上表



(御通橋京肇鳳)幸東御皇天治明

東京城と改稱して、皇居と御定めになつた。まもなく、京都に御歸りの後、翌二年(紀元二五二九年)再び東京城に入御あらせられてから、永く帝都と定まつたのである。

**版籍奉還** 鳥羽伏見の戦の後、朝廷は、徳川氏の領地を収めて、府、縣とし、知事をおかれたが、大名の領地は、もとのまゝである。然るに大名が、土地、人民を支配するのは、國體に背いてゐるから、薩州、長州、土州、肥前の四藩主は、これを朝廷に返上したいと申出で、他の大名にも、四藩にならふものが多い。明治

薩州藩主	島津忠義
長州藩主	毛利敬親
土州藩主	山内豊範
肥前藩主	鍋島直大

凡六十餘年前

封建制度の  
崩壊

幕府大名が  
その地位を  
捨てた理由  
國體上の理  
解

二年六月天皇は、その願を御許しになり、悉く大名の領地を収められた。世に版籍奉還といふ。版籍とは、土地と人民とのことである。

**廢藩置縣** 版籍奉還の後、朝廷は、人心をしづめる爲めに、しばらく、もとの大名に、もとの領地を治めしめ、藩の名稱も、そのままにしておかれたが、明治四年詔して、全國二百餘の藩を廢して、縣をおき、新らたに、府、知事、縣令を任命せられた。世に廢藩置縣といふ。封建の制度は、この時に、全く、やぶれたのである。

**國史の教訓** 大政返上があつて、天皇親政の御代が開け、版籍奉還があつて、封建制度がやぶれた。この時、幕府も、大名も、進んで、自分の地位を捨てたのは、よく國體をわきまへてゐたからである。わが國でなければ、見ることが出来ない。まことに、世界に誇るべき美事である。



太政官制の復活

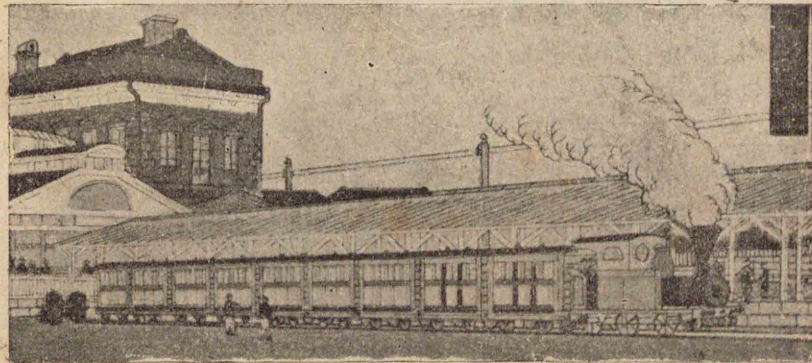
北海道廳

租税  
貨幣  
商工業

官制の改革 官制はいくたびも改正せられた後、太政官に、太政大臣、左大臣、右大臣、參議をおき、その下に、宮内、外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、工部の十省をおくことになつた。また地方では、府、縣の外に、蝦夷を改めて、北海道と稱し、北海道廳をおいた。

### 第二章 社會の一新

明治初年の改革 政府は、五箇條の御誓文により、歐米の風を受入れて、色色改革をしてゐる。租税、貨幣を改正した。商人を保護して、銀行、會社、工場



明治初年の汽車(東京横濱間)

交通  
通信

陸海軍

徴兵令

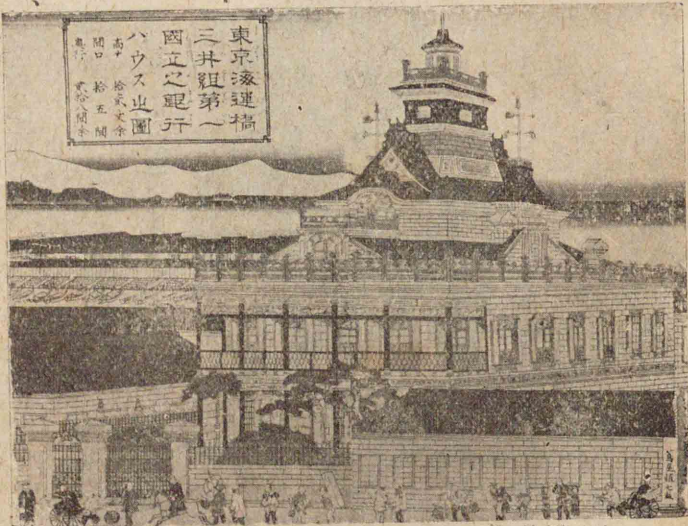
法律

裁判所

太陽曆

國民の平等

をおこした。航海業を奨励して、海外にまで航路を開いた。鐵道が敷かれ、郵便が開け、電信が通じて、交通、通信が便利になつた。陸軍、海軍が設けられて、軍備がととのつた。徴兵令が布かれて、全國の男子は、だれでも満二十歳になれば、兵役に就くことになつた。法律が改正せられて、慘酷な刑罰がなくなり、裁判所がおかれて、訴訟が自由になつた。太陽曆が廢せられて、太陰曆が用ゐられた。公家、武士、百姓、町人などの差別がなくなつて、國民はすべて平等にな



わが國最初の銀行(第一銀行)の今(第一銀行)



つた。されば、世の中の有様が、急にかはつて、どこにも、活氣が満ちてゐた。

**日常生活** この頃、わが國民は、日常の生活にも、西洋の風を取入れてゐる。男の髪を結ふ風がすたれて、散髪となり、女の髪も、洋風にするものが多い。禮



明治初期貴婦人の装束

服には、洋服が用ゐられ、官廳の建物も、洋式になつて、椅子、テーブルが用ゐられ、その風は、次第に民間に及んだ。帽、子、靴、洋傘などが日用品となり、これまで、いやしめてゐた肉食が盛んになつた。馬車が輸入せられ、人力車が發明せられて、駕籠がすたつた。

**教育勅語** かやうな姿の中から、明治の文化が生れた。しか

凡四十餘年前

し、西洋のことを學ぶに熱心なあまり、やゝもすれば、わが國の上いところまで、失はうとする心配もあつた。明治天皇は、深くこれを憂へたまひ、明治二十三年十月教育勅語を賜はり、日本人として、守るべき道を、御さとしになつた。これから、わが國民は、教育勅語を守つて、身を修めることになり、社會も、はじめて、健全に發達するやうになつた。

### 第三章 立憲政治

**征韓論** 明治のはじめ、政府は、王政復古のことを、朝鮮に知らせ、交を温めようとしたが、受け付けない。また、おだやかでない行もある。されば、參議西郷隆盛、板垣退助、江藤新平などは、その都合を責め、やむを得ない時は、軍隊を派遣することを唱へたけれども、右大臣岩倉具視、參議大久保利通、木戸孝允が反對したの



西郷隆盛等の  
辭職

凡六十餘年前

江藤新平の  
舉兵

秋熊本秋月  
の暴動

西郷隆盛の  
舉兵

凡六十餘年前

自由民權説

民選議院設  
立の建白

凡六十餘年前

て、明治六年皆その職を辭した。世に征韓論といふ。

(紀元二五三三年)

地方の叛亂

江藤新平は、不平のあまり、亂を佐賀市佐賀におこし、ついで政府の新政を喜ばないものが、萩山口縣熊本市熊本、秋月福岡縣に暴動をおこしたが、まもなく平いだ。然るに明治十年



西郷隆盛

西郷隆盛も、兵を鹿兒島鹿兒島市に擧げて、熊本鎮臺を圍み、これに應ずるものが多い。その勢は、一時盛んであつたけれども、遂に敗れて、故郷の城山で戦死した。これから、世の中が、

はじめておだやかになつた。

國會開設の詔勅 板垣退助は、辭職の後、自由民權の説を唱へ、

明治七年に、後藤象二郎、副島種臣など、民選議院を設けること

を、政府に建白した。政府は、まだ早いといつて、用ゐなかつたけ

地方官會議  
府縣會

伊藤博文の  
憲法起草

政黨の組織

官制の大改  
革

凡五十餘年前

れども、地方官會議を開き、府縣會を設けて、議事のことをならはしめるなど、他日國會を設ける用意をしてゐる。その中に、世の中も進んで來たので、明治天皇は、明治十四年に、來る二十三年に

(紀元二五四一年)は、國會を開かれるとの詔勅を降された。

國會開設の準備 それから

政府では、參議伊藤博文が、勅を奉じて、憲法を起草し、民間では、板垣退助が自由黨、大隈重信が、改進黨を組織して、國會を迎へ



地方官會議行幸

る準備をした。これが政黨のはじめである。

内閣制度 國會を開くには、これまでの官制では、不便である

から、明治十八年大改革を行ひ、新らたに、内閣總理大臣及び外務



市制町村制  
凡五十年前

大日本帝國  
憲法  
凡四十餘年前

皇室典範  
第一帝國議  
會  
凡四十餘年前



憲法發布式

内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信の十大臣をおいて、内閣を組織することになり、伊藤博文が、はじめに總理大臣となつた。  
自治制度 政府は、また、國會を開く準備として、明治二十一年市制、町村制を布いたが、ついで府縣制も布かれ、地方自治の制度が漸く備はつた。

憲法發布 明治天皇は、伊藤博文の起草した大日本帝國憲法を、樞密院に御

下問の後、明治二十二年二月十一日、めでたい紀元節に發布せられ、また皇室典範をも定められた。ついで同二十三年、第一帝國

立憲政治の  
確定

外交の刷新  
凡七十年前

公使の派遣

法權稅權回  
復の必要  
岩倉具視等  
の歐米派遣  
凡六十餘年前

議會が召集せられ、立憲政治が、全く備はつたのである。

#### 第四章 條約改正

##### 西洋諸國との關係

明治元年明治天皇は、廣く交を諸外國と

結び、國威をかゝやかすべきことを、國民に御さとしになり、また王政復古をも、外國公使に傳へられ、ついで同三年には、公使を、各國に御遣はしになつた。外國との交は、これから盛んになり新らたに通商條約を結んだ國々も多い。

##### 條約の不備

江戸時代に、歐米諸國と結んだ通商條約は、治外法權を許し、關稅にも、不利益のことが多い。されば明治四年政府は、智識を世界に求めたまふ叡慮を奉じ、右大臣岩倉具視を全權大使とし、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文を副使として、歐米諸國に遣はした時、條約改正のことも相談せしめた。具視等は、



條約改正の  
交渉とその  
中止

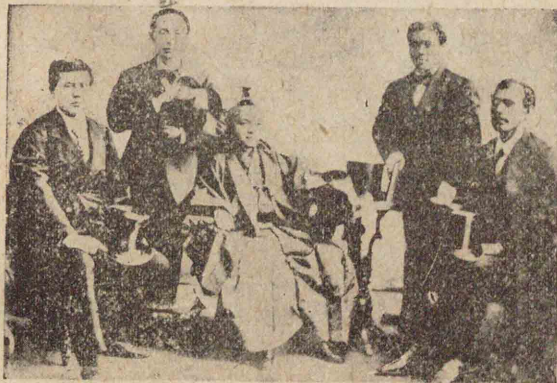
條約改正の  
不成功

刑法  
凡五十餘年前  
民法商法

國力の發展  
に伴ふ信用  
の増進

まづ米國に赴いたが、相談がまとまらないので、これを打きり、歐洲諸國を巡つて交を温め、またその文化をも視察し、歸國したのは、同六年である。

法典の編纂　その後、政府はいくたびか、條約の改正を企てたけれども、歐米諸國が應じない。これを見て、政府は、まづ法典を完備しなければならぬとて、その編纂を急ぎ、明治十五年に刑法を實施し、ついで民法、商法を公布し、また刑法をも改正して、法典が漸く備はつた。



大久保伊藤岩倉大  
使の一行  
右から  
大久保、伊藤、岩倉、左木、右木

改正條約　歐米諸國が、條約の改正に同意しないのは、わが國の實力が認められてゐなかつたからである。然るに法典が備

改正日英條  
約  
凡四十餘年前

治外法權の  
廢止

再度の改正  
條約の回復  
稅權の回復  
凡三十年程前  
對等の國際  
的地位

東洋平和の  
支持者として  
の日本

はり、憲法が布かれ、議會が開け、立憲政治も定まつたので、次第に、わが國を信用するやうになつた。されば外務大臣陸奥宗光が、條約改正の談判を開いた時には、英國が、まづこれに應じ、明治二十七年七月改正日英條約が結ばれたのである。引きつゞき、他



陸奥宗光

の諸國との條約も改正せられ、治外法權が廢止せられ、在留の外國人は、すべて、わが法律で取締ることになつた。たゞ關稅は、まだ不十分であつたが、それも十餘年の後に改正せられた、はじめて、歐米諸國と、對等の地位を有することになつた。

### 第五章 東洋平和の實現

帝國の地位　わが國は、地理上の關係から、東洋の平和を支へ



通商條約の締結  
凡六十餘年前

て行かなければならない大きな役目がある。この役目を果たす爲めに支那、朝鮮、露西亞との間に、色々な事件がおこつた。

支那との關係

明治四年わが國は、清と通商條約を結び、戦國時代から絶えてゐた交が、再び開けた。たまたまわが國の漂民

が、臺灣の蕃人に殺された。臺灣は、清の領土である。故に、わが國は、清に、その處分を求めたけれども、蕃地は、支配外の地であるといつて、受付けない。やむを得ず、同七年みづから臺灣を征して、蕃人を處分した。これを見て、清は、俄に、蕃地も、自國の領土であるのに、なぜ、勝手に征伐するかと、苦情をいひ出した。そこで參議大久保利通は、清の首府北京に赴いて、その不都合を責め、償金を出させることにして、軍隊を引揚げた。



大久保利通

（紀元二五三四年）

世に臺灣事件といふ。

露國の千島占有

樺太の雜居

千島樺太の交換  
凡六十餘年前

わが軍艦砲撃  
修好條約締結  
凡六十餘年前

朝鮮の内亂  
凡五十餘年前

清との關係

世に臺灣事件といふ。

露西亞との關係　これより先、千島の大部分は、露西亞に占有せられたが、樺太では、境を定めないうて、互に雜居してゐるから、とかく、争がおこりやすい。わが國は、東洋の平和の爲めに、明治八年樺太を露西亞に與へ、その代りに、千島を讓受けた。

（紀元二五三五年）

朝鮮との關係　朝鮮は、この前、交を拒んだばかりでなく、明治八年わが軍艦をも砲撃した。わが國は、使を遣つて、その不都合を責め、罪を謝せしめた後、はじめて修好條約をも結んだ。しかし朝鮮は、永い間、支那に従つてゐたから、いまだに清を恐れ、わが國を侮るものが多い。これが爲めに、同十七年遂に内亂がおこり、その軍隊は、清の軍隊とともに、京城のわが公使館を焼き、わが居留民を殺した。この時、わが國は、朝鮮を責めて、その罪を謝せしめたけれども、清を責めることは、十分でなかつたから、清も、ま

（紀元二五三六年）

（紀元二五四四年）

（紀元二五三四年）



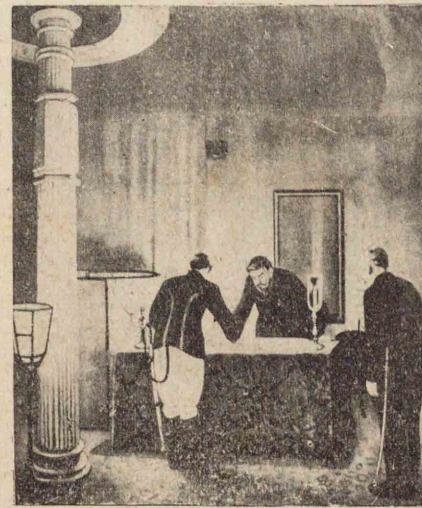
清と朝鮮  
朝鮮に於ける  
支那の勢力

東洋平和の  
爲めの宣戰

連戦連勝

た、次第に、わが國を侮るやうになつた。

明治二十七八年戦役 明治二十七年、朝鮮に、また内亂がおこつた。この時、清は、兵を出して、朝鮮を従へようとした。朝鮮が、



廣島大本營に於ける軍務御親裁

清の屬國となれば、東洋の平和がみだれる。故にわが國は、清と力をあはせて、朝鮮の獨立を助けようと申出たが、これに應じないので、明治天皇は、東洋の平和の爲めに、清に戰を宣したまひ大本營を

廣島市廣島において、軍務を御統べになつた。わが軍は、連戦連勝陸には、遼東半島を占領し、海には、黄海及び威海衛に、敵の艦隊を全滅せしめ、進んで北京に迫らうとした。

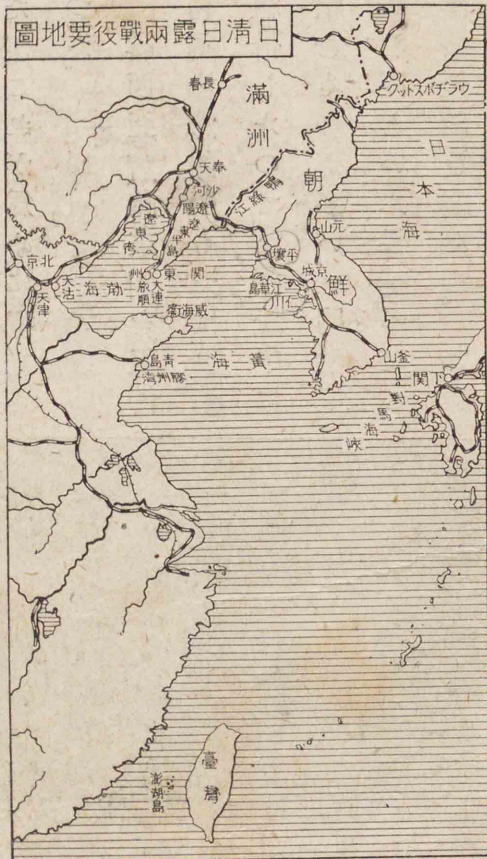
三月五日  
八月五日  
九月五日

講和

三國干涉と  
遼東半島の  
返付

戦争の結果 清は、大に驚き、同二十八年和を求めたので、朝鮮の獨立を認め、遼東半島、臺灣、澎湖島を割き、及び償金を出さしめ

てこれを許した。明治二十七八年の戦役といふ。その後、遼東半島は、露西亞、獨逸、佛蘭西のすすめによつて、清に返した。清は、世界の大国である。然るに、わが國の勝つたのは、平和を愛するが爲めの戦であり、また忠君愛國の心が、強いからであつた。





滿洲に於ける勢力  
朝鮮に於ける勢力

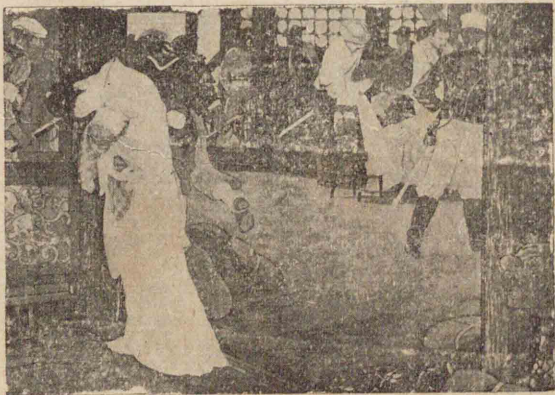
歐洲各國の清國壓迫

義和團の北京包圍

凡四十年程前  
聯合軍の組織

露西亞の勢力 この戦役の後、露西亞は清に迫つて、關東州を租借し、西比利亞鐵道を、南滿洲にまで延ばし、また朝鮮をも従へようとした。朝鮮は、その頃、國號を韓と改めてゐたが、これが爲めに、獨立さへも危くなつた。

北清事變 露西亞が、關東州を租借した頃、英吉利、獨逸、佛蘭西も、やはり清國の要地を租借したので、清國民中には、歐洲人を憎むものが多い。明治二十三年遂に義和團といふ暴徒がおこり、北京の各國公使館を圍んだ。各國は、聯合軍を組織し、わが軍隊が、その主力となつて、漸くこれをしづめた。この事變には、清の軍隊も加はつてゐるから、各國は、清



北京の城館の日本人

東洋平和の危機

平和の保證としての同盟

凡三十餘年前  
露國の滿洲及び朝鮮北部の占有

平和の爲の宣戰  
凡三十餘年前  
連戰連勝

と談判して、償金を出させた。これを北清事變といふ。  
日英同盟 北清事變のをり、露西亞は、滿洲をも、占領しようとした。滿洲が奪はれ、朝鮮が危くなつては、東洋の平和がみだれる。この時、英吉利も、東洋の平和のみだれるのを憂へてゐたから、わが國は、明治三十五年英吉利と同盟を結び、ともに東洋の平和を支へることになつた。

明治三十七八年戦役 然るに露西亞は、遂に、滿洲と朝鮮の北部とを占有したのである。明治天皇は、東洋の平和の爲めに、やむを得ず、明治三十七年戦を露國に宣したまひ、大本營を宮中におかれた。この時にも、連戰連勝、陸には、遼陽、沙河、奉天に、敵の大軍を破り、堅固といはれた旅順の要塞をも占領した。海には、黄海で、敵の東洋艦隊に致命傷を與へ、日本海で、バルチック艦隊を全滅せしめた。露西亞は、世界の強國である。然るに、海に、陸に、



連勝したのは、忠君愛國の心に富み、平和を愛する國民が、東洋の平和の爲めに、平和をみだすものと戦つたからである。

よもの海みなはらからと思ふ世になど波  
風のたちさわぐらむ  
明治天皇

おのづから仇のころも靡くまで誠の道  
をふめや國民  
明治天皇

### 戦争の結果

米國大統領の勸告

日本海、海戦で、ほゞ勝敗が定まつたので、米國大統領ルーズベルトは、講和のことを、兩國にすすめた。

平和條約

Portsmouth  
兩國は、これに従ひ、それ、使を米國ポーツマスに遣り、明治三十八年平和條約を結んだ。この條約で、わが國は、露西亞から、樺太の南半分と、關東洲の租借權、南滿洲にある鐵道、炭坑などを讓受けた。明治三十七八年戰役といふ。これから、わが國



議會和講スマツーポ  
(テツイウ央中側右郎太壽村小央中側左)

世界の一等國

東洋の平和原因  
統監の設置

は、世界の一等國となり、國力が、日に月に進んだ。

韓國併合 韓國は、わが國の力で、支那、露西亞の侵略から、救はれたけれども、獨立するだけの實力がないから、東洋の平和をみだす心配がある。これが爲めに、わが國は、統監を京城におき、韓國は、その指導を受けて、政を行ふことになつた。それでも、まだ十分でないので、韓國國民の中には、日本と併合することを望むものが多い。かくて明治天皇は、明治四十三年韓國皇帝の

望 國民の希

凡三十年程前

朝鮮總督府

東洋平和の實現



文博蘇伊監統の初最

讓を受けて、韓國を、わが國に併合せられ、改めて朝鮮と稱し、朝鮮總督府をおいて、これを治めしめたまひ、また、前皇帝及び、その近親には、わが皇族と、同じ禮遇を賜はつた。これから、はじめて、東

Handwritten notes and stamps in the bottom left corner, including the date '三月廿七日' and other illegible characters.



洋の平和が實現せられたのである。

### 第六章 文教の發達

敬神  
靖國神社  
佛教  
耶蘇教

信仰 神を敬ふことは、昔のまゝに、國民の心を支配してゐる。されば、御國の爲めに、命を捧げた人々を祭れる靖國神社が、東京九段坂の上に建てられた。宗教では、やはり、佛教が盛んである。耶蘇教も、外國との交が開けてから、再びわが國に傳はつたけれども、佛教に比べると、信者は少ない。

#### 教育

明治五年歐米諸國の制を参考して、學制を布き、小學校

は、全國に行きわたり、中學校、女學校、專門學校が設けられた。大學は、少しおくれて設けられ、後に、帝國大學となつた。私立學校では、慶應義塾と東京專門學校とが名高い。後には、いづれも大學となつて、慶應義塾大學、早稻田大學と改稱した。

私立學校

學制

凡七十年程前

福澤諭吉  
三田隆  
大隈重信

西洋文學

文學 文學では、早く外國の書物が、紹介せられ、森鷗外は、獨逸文學を傳へ、坪内逍遙は、英文學を傳へた。逍遙は、なほ戯曲、小説

戯曲小説

和歌  
俳諧



森鷗外

をも革新し、落合直文は、和歌を革新し、正岡子規は、俳諧を革新した。尾崎紅葉、幸田露伴、樋口一葉も、新しい小説を著した代表的な作家である。

わが歌をあはれと思ふ人ひとり見出

て後に死なんとぞ思ふ

松原のつどくところに海見えて島一

つあり舟二つあり

月二更廊下に滿つる梅の影 正岡子規

落合直文

落合直文

正岡子規



樋口一葉

#### 美術工藝

繪畫では、狩野芳崖、橋本雅邦が、維新後、衰へてゐた日本畫を再興し、また黒田清輝が、西洋畫を傳へてから、新らしい

繪畫



彫刻  
漆器  
織物

兌換制度

金貨本位制

貿易

國力の發展  
に伴ふ産業

農林省  
商工省

海運

畫家が次第にあらはれた。彫刻、漆器、織物なども、西洋の長所を取入れて、改良せられたところが多い。

商工業

明治十五年  
(紀元二五四二年)

年に、日本銀行が設けられてから、兌換制度が定まり、日清戦争の

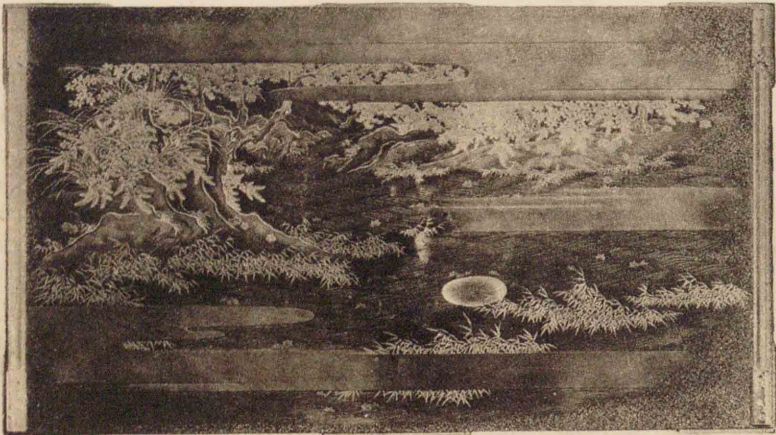


橋本雅邦、筆、虎溪三笑

後、金貨本位制が定まつてから、貨幣制度がととのひ、また條約が改正せられてから、貿易が發達した。また日清、日露など、大戦争のあるごとに、國力が伸びたので、商工業も進み、農業は、改良せられて、その産額を増した。されば、農商務省は、農林省と商工省とに分れたのである。

交通通信 海運では、日本郵船會社、大阪商船會社が設立して、

蒔繪文臺(河之邊一朝作)



蒔繪の河之邊一朝、彫刻の石川光明、七寶の瀧川惣助は、明治時代美術界の巨匠である。こゝにはその代表作を示した。

牙彫牧童(石川光明作)



七寶花瓶(瀧川惣助作)





外國航路

陸運

鐵道  
電車

鐵道省

通信

航空

凡二十餘年前

伏見桃山の

不世出の英  
主

日清戦争の前に、南清航路が開けてゐる。戦後には、歐洲航路、米  
國航路、濠洲航路が開け、日露戦後、南米航路も開けて、世界との交  
通が自由になつた。陸運では、官設、私設の鐵道が、各地に通じ、日  
露戦後、おもな鐵道が、國有となつてから、ます／＼發達し、また電  
車も、所々に通じた。これが爲めに、遞信省から分れて、鐵道省が  
おかれてゐる。通信では、電信、電話が普及して、非常に便利にな  
つた。飛行機が漸く使用せられ、無線電信、無線電話が開通した  
のも、この時代の末である。

第七章 明治天皇・大正天皇

明治天皇の崩御

明治天皇は、明治四十五年七月御病にか  
りたまひ、その月の三十日におかくれになつた。伏見桃山の陵  
見桃山町に葬り奉る。天皇は、古今にも稀な英主にまし／＼、維



昭憲皇太后  
の御坤徳

新の大業は、天皇の御手によつて行はれ、半世紀にも満たない内に、わが文化、わが国力が、歐米諸國に比べて、劣らないやうになつたのも、天皇の御力によるものである。



明治天皇

明治天皇の皇后は、崩御の後、監して、昭憲皇太后と申上げる。もれ承るところによれば、どこまでも御しとやかに御つゝ、ましく天皇に仕へたまひ、日夜御政務にいそしみたまふ大御心を、御慰めあそばされた。晝と晩との御食事は、必ず御一所に召上り、四方山の御物語りに、打興じたまふ御有様など御側で

拜し奉るさへ、如何にも御樂げに見上げまゐらせたといふ。

御園生ツツブの花は咲けどもしづかには見そなはず日ぞすくなかりける

とは、天皇の御身の上を案じたまふ御やさしい思召を窺ひ奉る御歌であり、

昭憲皇太后の御坤徳



越路の空

初雁を待つとはなしにこの秋は越路の空のながめられつゝ、(御歌)



踐祚

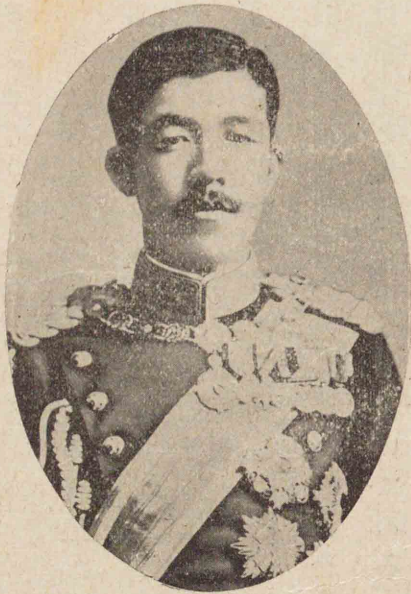
改元

御即位式

攝政

初雁を待つとはなしにこの秋は越路シロヤのそらのながめられつゝ  
とは天皇が北陸行幸のをり君います越路の方をしのびたまへる御歌である。  
恐多い次第ながら日本婦人の模範と仰ぎ奉るべきであらう。

大正天皇の御即位 明治天皇の御かくれと同時に大正天皇



大正天皇

第百二十三代が踐祚シロヤあらせられ、年號を大正と改め、その日以後を大正元年とし、ついで、同四年御即位(紀元二五七五年)の大禮を、京都の皇宮で御舉げになつた。その後、御病にかゝられたの

て、同十年皇太子裕仁親王が攝政となられた。

大正天皇の崩御

大正十五年十二月二十五日大正天皇が御

四十八才

ハヤマシ



多摩の陵  
守成の君

踐祚  
改元  
御即位式

かくれになつた。多摩の陵東京府南多摩郡横山村に葬り奉る。天皇は、よく明治天皇の御遺業を守りたさひ、これを大成せられた。守成の君にましくたのである。

今上天皇の御即位　この日、皇太子裕仁親王が、踐祚あらせられ、年號を昭和と改め、同三年十一月京都の皇宮で、御即位の大禮を御舉げになつた。(紀元二五八八年)今上天皇第十四代にましますのである。陛下は、皇太子の御時に、二十一年七月歐洲各國を御巡回になり、親しく海外の文化をも御視察あらせられ、御智見を廣められた。末永い御治世は、希望と光明とにかゝやいてゐる。

歐洲の騒亂  
凡二十年餘前

日英同盟による獨逸との開戦

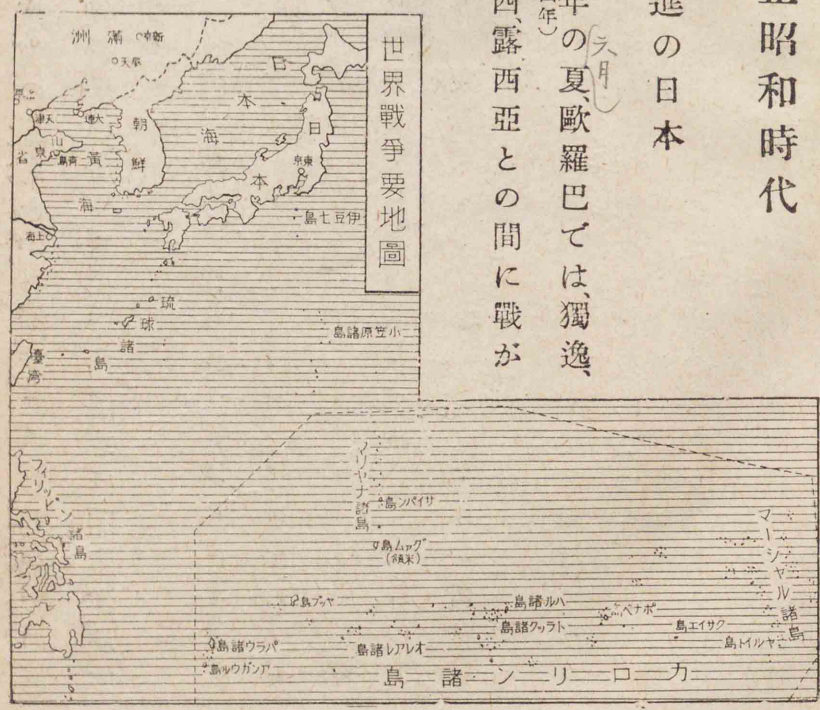
### 第十編 大正昭和時代

#### 第一章 躍進の日本

##### 世界戦争

大正三年の夏(八月)歐羅巴では、獨逸(紀元二五七四年)と、英吉利、佛蘭西、露西亞との間に戦が

起り、ついで伊太利亞、米利加も、英吉利側に加はり、世界の大戰が、はじまつた。わが國は、日英同盟によつて、英吉利に加勢し、獨逸と戦を開き、その支那





青島及び南洋諸島の占領

から租借してゐる山東省の青島を陥れ、南洋にある獨逸領の島を占領した。その後、戦争の廣まるに従ひ、海軍は、印度洋、地中海に、陸軍は、西比利亞にまで、出動してゐる。

### 戦争の結果

大正七年獨逸側の勢が衰へて、和を求めた。  
(紀元二五七八年)

列

平和條約  
凡二十年経前

山東省租借權の讓受け

南洋諸島の統治

世界の平和を目的とする多數國家の聯盟



首席全權西國寺公望

この時、わが國は、英米、佛、伊とともに、五大國として、會議の中心となり、た獨逸から、山東省の租借權を讓受け、もとの獨逸領南洋諸島をも統治することになつた。

### 國際聯盟

この平和條約によつて、世界の平和を目的とする國際聯盟がおこつた。わが國も、これに加はり、英、佛、獨、伊の四國とともに、常任理事國として、力を盡くしたのである。

國家の富

商工業

陸海軍教育

藝術

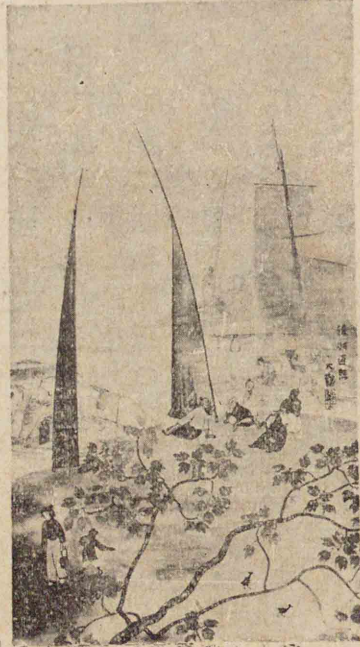
映畫蓄音器

交通

通信

### 國力の發展

世界戦争の頃から、國力が非常に進んだ。されば、英、米二國についての富國となり、商工業が發達し、貿易は、ますます榮え、國產品の海外に輸出するものが多くなり、精銳なる陸海軍は、國を衛るに、十分の力を備へ、教育は、普及して、大學教育、專門教育も盛んになつた。藝術では、竹内栖鳳、横山大觀が、新らしい畫風をはじめ、西陣織、七寶燒などは、世界的に有名になり、映畫、蓄音器も次第に普及せられた。交通では、電車、自動車が行きわたり、通信では、無線電、無線電話が、海外にまで通じ、ラヂオが放送せられるやうになり、航空では、飛行機の定期航路が開かれ、最近また倫敦への



松山觀大筆漁村返照



飛行に、見事な成功を収めた。ことに學問では、醫學の進歩が、西洋にも、まさるとさへいはれる。嘗ては、支那、朝鮮の文化を受入れて、これを日本のものとしたやうに、今は、西洋の文化を受入れて、これを凌がうとするまでになつた。

**重要なる帝國の地位** 明治維新の後、我が國の制度文物は、次第に備はるやうになつた。されば條約改正の頃に及び、漸く西洋の諸國から、その實力を認められ、日清、日露の戦役を経て、世界の一等國に進み、世界戦争後には、宇内の強國となり、英米とともに、三大海軍國といはれ、英、米、佛、伊とともに、五大國とも、いはれるやうになつた。それだけ、わが國の地位は、重要になり、世界各国との關係も、複雑になつた。

### 第二章 列國との關係

三大海軍國  
五大國  
複雑なる國  
際關係

海軍縮少

日英同盟の  
廢棄

支那の革命

山東省の返  
付

不戰條約

海軍縮少

### 華盛頓會議

大正十年わが國は、列國とともに、米國華盛頓で、會議を開き、翌年英、米、佛、伊の四國と、互に、海軍を縮少することを約束し、この時、また日英同盟をも廢した。これより先、支那には、革命がおこり、清が滅んで、共和國となつてゐる。わが國は、この會議の後、獨逸から讓受けた山東省を、支那に返して、好意を表した。

### 不戰條約及び倫敦會議

昭和三年  
佛蘭西の巴里で、日、英、米、佛、伊の五國間の間に、戦争を避ける爲めの不戰條約が結ばれ、ついで同五年英吉利の倫敦で、日、英、米、佛、伊の五國間に、再び海軍を縮少する約束を結んだ。



倫敦會議 (立) 首席全權若槻次郎



滿洲事變

（日本が特殊權益）

（軍閥）  
（張作霖）

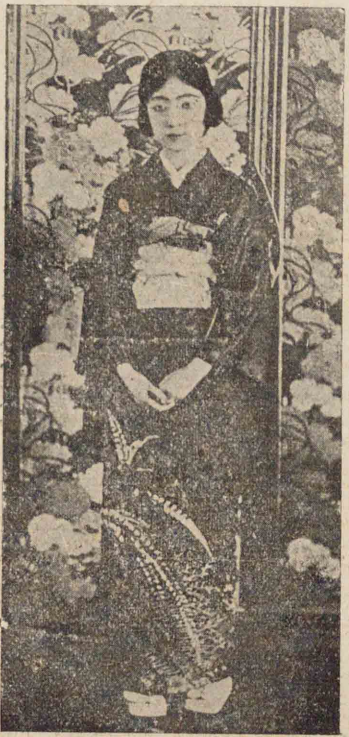
滿洲事變及び上海事變 昭和六年支那の軍隊は、いはれなく、わが國の經營する南滿洲鐵道の線路を破壊したことから、滿洲警備のわが軍隊との衝突がおこつた。これを滿洲事變といふ。ついで上海にも、排日の運動がおこり、同七年支那の軍隊と暴民とは、わが居留民を迫害し、また居留民を保護せる海軍陸戰隊にも發砲した。わが國は、やむを得ず、陸海軍を派遣して、取りしづ

めた。これを上海事變といふ。

日滿同盟 昭

和七年三月滿洲國の住民は、支那から獨立して滿

滿洲國皇太后

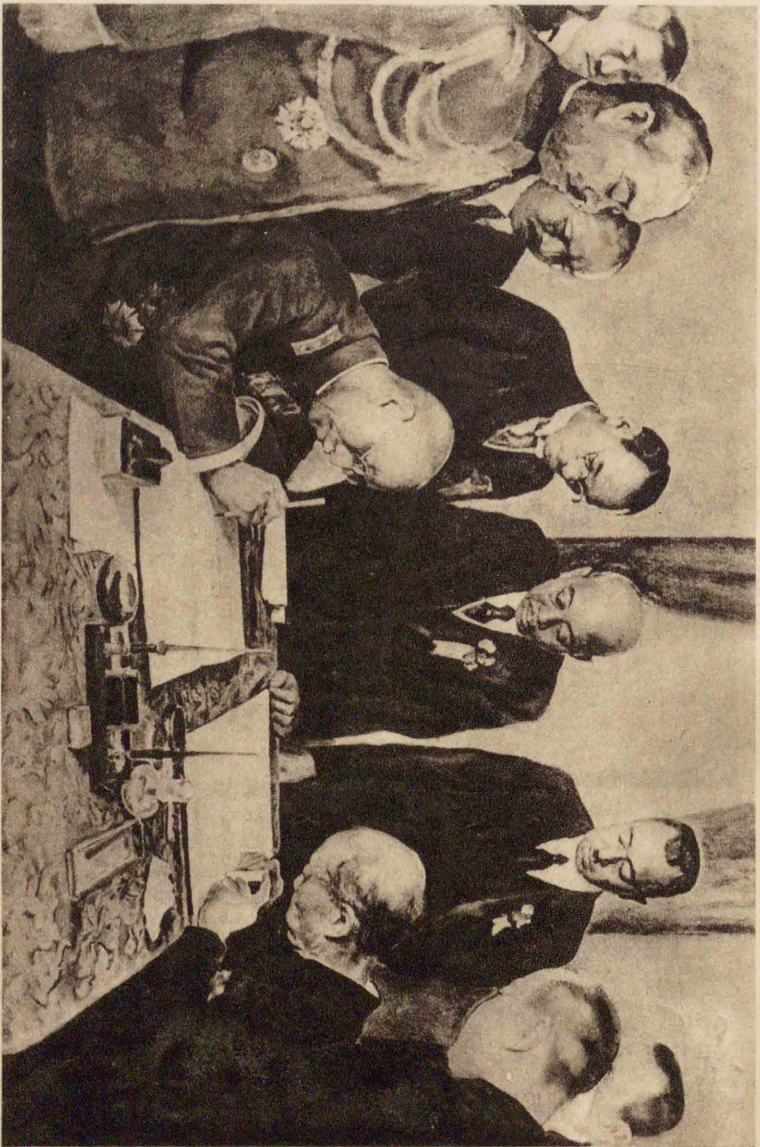


日滿議定書

洲國を建てた。わが國は、同年九月滿洲國を承認し、日滿議定書

滿洲國の獨立

東洋平和の象徴



義信 藤武使大權全左 香李 鄭理總國洲滿右 印調書定議滿日



滿洲國の發展

（康徳  
年号）

を結んで、相ともに、東洋平和の爲めに盡くすことになつた。滿洲國は、その後帝制を布き、かゞやかしい發展をつゞけてゐる。

國際聯盟脱退

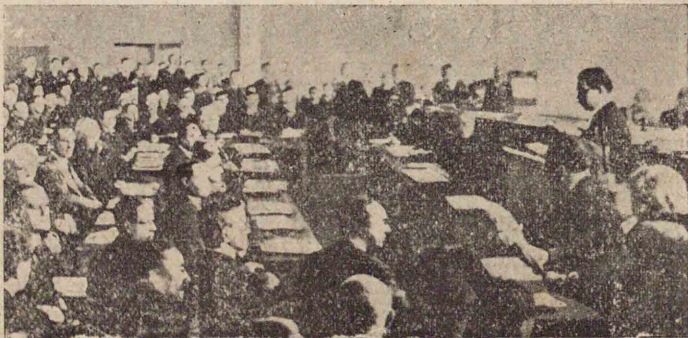
然るに國際聯盟は、滿洲事變も、滿洲國の獨立も、日本の滿洲侵略と誤解し、わが國に、滿洲國の承認を取消すことを求めた。わが國は、その誤解を解かうとして、力を盡くしたが、聞入れないので、昭和八年遂に聯盟から脱退した。

（紀元二五九三年）

華盛頓條約の有効期間

華盛頓條約の廢棄

大正十一年の華盛頓會議で約束した海軍の縮少は、十五箇年間効力があり、もし繼續を望まない時には、その二箇年前に、



（右洋阿松立起方右）言宣の退脱るけ於に會總時臨盟聯際國



國防上の不安

米國政府に通告することになつてゐる。然るに滿洲國の獨立兵器の進歩などにより、それでは國防上の不安を感じるやうになつた。これが爲めに、昭和九年、約束の期限の昭和十一年十二月限り、廢棄することを、米國政府に通告したのである。(紀元二五九四年)  
(紀元二五九六年)

### 倫敦會議脫退

昭和十年英國倫敦で、日、英、米、佛、伊五箇國の間に、再び海軍縮少の會議が開かれた。わが國は、各國平等の立場から、縮少しなければならぬと主張したが、各國

海軍の縮少  
各國平等の主張



首相全權野永修身

が聞入れないので、同十一年この會議をも脱退した。

### 支那事變

滿洲事變、上海事變の後、支那政府は、わが國を侮り、極端な抗日の方針を定めてゐる。これが爲めに、昭和十二年七月北支に於て、その軍隊が、わが駐屯軍を襲撃したのをはじめ、

東洋平和の支持

上海占據  
南京陥落  
中華民國臨時政府の成立

不都合な行が多く、また八月、上海でも、わが陸戰隊員を殺し、軍艦領事館をも空襲したので、同月遂に軍隊を派遣し、海軍も力を合せ、十一月には、上海を占據し、十二月に南京を陥れ、また支那には、新らしく中華民國臨時政府が成立した。しかし事變の片づくまでには、なほ相當の月日を要するであらう。

### 第三章 わが國の現状

東洋平和の支持

朝鮮から滿洲へ

滿洲問題 東洋で、西洋諸國と、同等の力のあるものは、わが國ばかりである。東洋の平和を支へることも、わが國の力に、よらなければならぬ。昔は、朝鮮から、平和のみだれる心配があつた。然るに、韓國併合の後、漸く、その心配がなくなり、しばらくは、東洋も平和であつた。その後、東洋の様相がかはり、滿洲から、平和のみだれる心配がおこつて來た。幸に、滿洲國の獨立、日滿同



盟によつて、これを防いでゐるけれども、西洋の強國は、伊太利、獨逸、奧太利の外、まだ、滿洲國の獨立を認めてゐない。わが國を疑がつてゐるからである。それでは、東洋の平和が覺束ない。また朝鮮、滿洲と境を接してゐる支那、露西亞との關係も、むつかしくなつた。こうした疑を取除け、支那、露西亞との交を厚くし、東洋の平和を圖ることが、今、必要となつてゐる。

國防問題

わが國の領土が、内地だけであつた時には、國防も、内地を衛りさへすれば、よかつた。然るに、韓國が併合し、南洋の諸島を統治し、日滿同盟を結んでからは、朝鮮、滿洲の國境から、太平洋方面までも、衛らなければならぬ。國防の意味が變つて來た。華盛頓條約を廢棄したのも、倫敦會議を脱退したのも、これが爲めである。それだけ、列國から、色々の誤解を受けやすい。こうした誤解を取除けて、國防を整へることが、今、必要となつて

思想問題 わが國は、昔から、上に、萬世一系の皇統を戴き、忠君愛國の眞心を捧げて來た。國力の進んだのも、これが爲めである。然るに、世界戦争の頃から、外國の悪いところを學んで、よくない考を持つものも、ないではない。こうした悪い考を取除けることが、今、必要となつてゐる。

國民の覺悟

今、わが國では、かやうに、色々な、むつかしいことがある。このむつかしいことを、取除けて、國家の安全を圖らなければならぬ。それには、非常の決心を要する。正しいものは強い。その覺悟さへあれば、必ず出來るのである。

光輝ある國史の成跡

上下古今を貫く、悠久なるわが國史のあとを見るに、いつも、皇室を中心として進んで來た。また忠君愛國は、平和を愛する心とともに、日本精神となつて、今にまで傳



舉國一致  
外國文化の  
同化  
日本精神の  
維持と發展

はつてゐる。されば、國難があれば、一致して、これに當り、平和の  
をりには、外國の文化を取入れて、これを同化し、遂に現在の強國  
日本となつた。いつまでも、この精神を傳へて、天壤無窮の皇運  
を扶翼し奉り、あはせて、また、世界人類の平和と幸福とを見出さ  
なければならぬ。これが、われ等日本人の爲すべき當然の行  
として、將來に残されてゐる。

終

史小國帝子女修新

用級初



昭和十二年十月一日  
昭和十三年二月二十五日  
昭和十三年二月二十八日

印刷  
發行  
修正發行

昭和十四年八月二十五日

修正印刷  
修正發行

著者 井野邊 茂雄  
發行者 中村時之助  
印刷者 松岡虎王  
印刷所 三鐘印刷株式會社

錢八拾圓壹金 價定

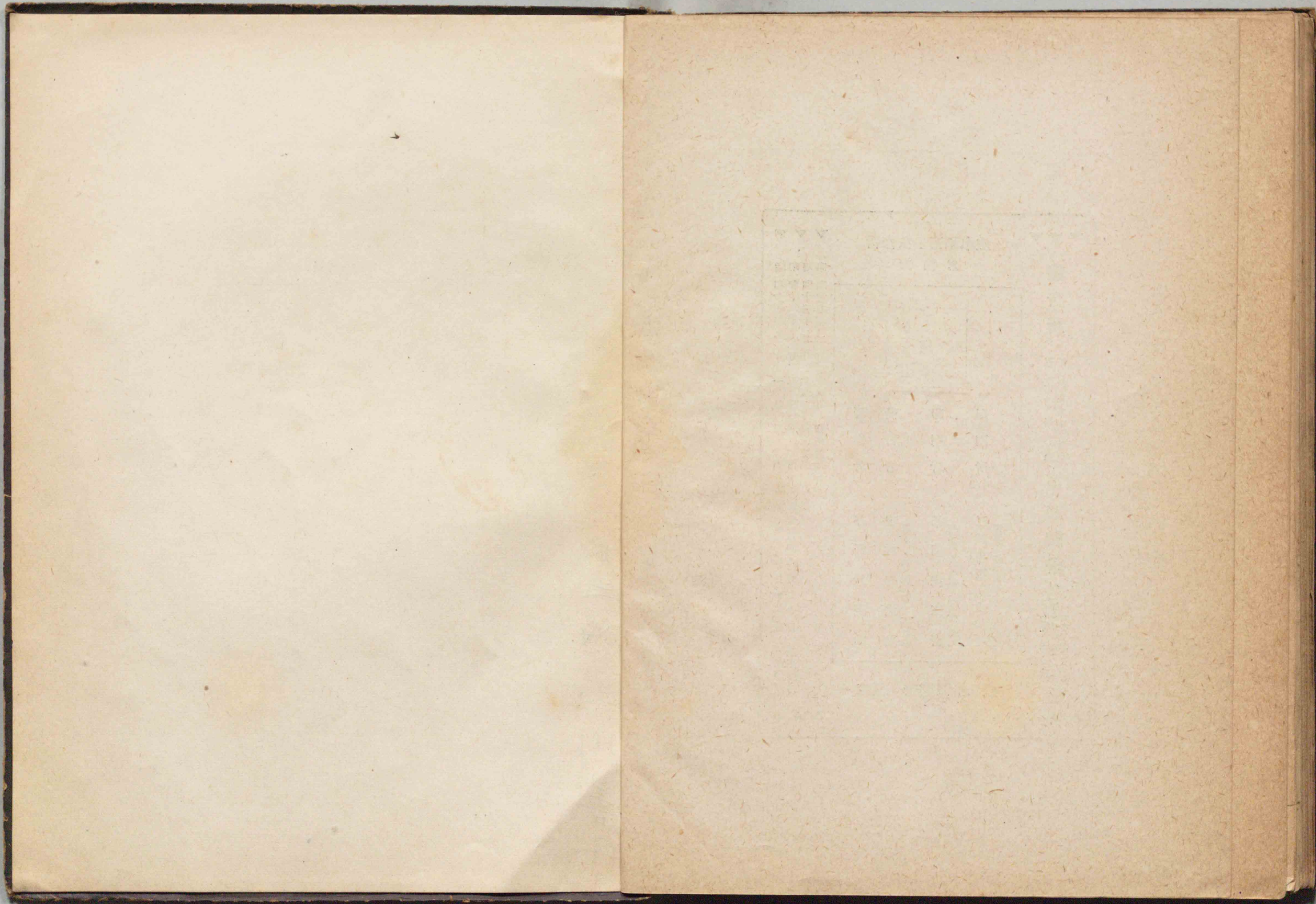
發行所

東京市牛込區  
辨天町百七十四番地

中文館書店

電話牛込三三三二五番  
振替東京三八四二七番







本  
二  
~~梅~~ 櫻  
玉  
川  
善  
子





広島大学図書

2000071960

